
流れ星との約束

スチール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ星との約束

【Nコード】

N9525F

【作者名】

スチール

【あらすじ】

少年は、幼少時代、幼なじみの前で流れ星と約束を交わす。

その内容は「甲子園出場」

10年の時を経て、少年は高校で野球部に入る。

だが、彼は野球未経験であった

0・流星（前書き）

完結するのはしばらく後になると思います。それまでの間、どうか
よろしくお願いします

0・流れ星

まだ5歳の神山遥斗は夜空を見ながら大きな欠伸をした。首だけを右に向けて、自分と全く同じ格好で、自分と同じように夜空を見ている水原光を見る。

彼女も退屈しているのだろうと思って見たのだが、全然違った。『キラキラした瞳』彼女の目はそういう目だった。

かわいい。遥斗は素直にそう思う。と、急に光が彼の方を見た。

「どうしたの？」

「何でもない」

「光に見とれてた」なんて死んでも言えない。顔が赤くなっているのを彼女に気づかれないように、遥斗は顔を反対側に向けた。

「なかなか見れないね」

「何が？」

「流れ星だよ」

もちろん遥斗には光が流れ星のことを言ったことに気がついていたら、あえてとぼけた。

全く意味のない、いわゆる無駄なことだったが、何故かしてしまっている。自分でも不思議だと思った。

「あっ！」

光の声で遥斗は目が覚めた。どうやら眠っていたらしいが、5歳の子供にとつて、夜の9時というのは真夜中に等しい。本来なら、彼の母親が起きることを許す時間ではない。だが、光がどうしても流れ星を見たいと言ったので、彼女の母親と話し合って許可したのだ。

「どうしたの？ そんな大声出して……」

「流れ星だよ。流れ星！ ほら、また！」

急に興奮してきたのか、彼女はブツブツと早口言葉を呟いていた。

それを聞きながら、遙斗は流れ星を見たら何か約束事をしなければいけない。と誰かから聞いたのを思いだした。

約束……

必死に考えてみたが、今の彼に約束できそうなことなんて無かった。

「遙斗は何も言わないの？」

光が不思議そうな顔をして聞いてきた。

それもそうだろう。わざわざこんな真夜中まで起きてまで流れ星を見たのに、何も約束事を言わないなんて不思議に決まっている。

必死に彼が考えると、一つの単語を思いだした。彼は慌ててその単語を口にした。

「コウシエン……コウシエンに行きます！」

「コウシエン……？」

光がまたも不思議そうに言った。遙斗も、その単語を知ったのは今日のことだったが、テレビで見たあの光景はよく覚えている。

テレビに映る一人の人物がとても格好よく見えた。それがどんな人なのかは5歳の遙斗には全く分からなかったが、あの人みたいになりたいと思った。

父親に聞くと、それはコウシエンという場所で、格好よく見えたのはピッチャーという人らしかった。

だから彼は流れ星に『コウシエンに行く』と約束したのだ。本当は『ピッチャーになる』とも約束したかったが、欲張りはいけなれない、自重した。

「コウシエンだよ。コウシエン。知らないの？」

「知ってるよお。でもそれがお願いなの？ 変なの」

彼女の言葉に遙斗は目をパチクリさせた。約束事ではなくて、願い事だったのか。約束事と聞いていたと思っただけだったが、それも願い事と聞いていたのだろう。

「知ってたよ」

少し見栄を張って遙斗は言った。光はあまり気にしていない様子

で、ふーんと言つと急に立ち上がった。

「どうしたの？」

「帰る。流れ星見たもん。お母さん、帰る」

そう言つて、光は彼女の母親を急かせた。その様子を見た遥斗は自分も帰ろうと、母親に声をかけた。

母は、やつと終わったことが嬉しかったのかすぐに立ち上がると、彼の手を引いて歩き始めた。

4人で並んで歩いていると、遥斗はふと光の願い事が何なのか気になった。

「光は何をお願いしたの？」

彼の問いに彼女はなかなか答えなかったが、やがて口を開いた。

「……遥斗のお嫁さん」

「えっ？」

顔を真っ赤にしている光を見て、遥斗は自分の顔も赤くなるのが分かったが、今度は隠そうとしなかった。

「遥斗くん、光を頼むよ」

彼女の母親が少し笑いながら言った言葉に対し、彼は大きな声で「はい、と言った。」

1・約束

「遥斗。まだ？」

窓の外から聞こえる水原光の声を敢えて無視しながら、神山遥斗は着替えを急いだ。一階からは、母親が自分を急かしている声が聞こえるが、それも無視する。やっと着替え終わると荷物を持って下に降り、リビングに置いてあるパンを掴んで家を出た。

入学式だが、母親は来ない。母子家庭であるため、学費を稼ぐために、残念ながら仕事を頑張ってもらわねばならない。

「遅い。入学式くらい早く行こうとか思わへんの？」

「思わんな。そんなに言うならお前1人で行けばいいやろ」

「うわっ、せっかく迎えにきてあげてんのにそんなこと言うんや」

高校生になるというのに、毎朝一緒に登校するのもどうかと遥斗は思ったが、これ以上反抗すると光の機嫌が悪くなる。とりあえずそれは避けたかった。

謝った後、持ってきたパンを食べながら歩き始めた。光もあまり怒っていないのか、隣に来て並んで歩いている。

少し肌寒さの残る通学路。まだ数回しかここを通ったことがないが、これからは毎日通ることになるのだ。瓦屋根の家が建ち並ぶ光景を横目で見ながら、遥斗は少し変な気持ちになった。

「あつ。ヨシムネや」

十字路にさしかかったところで光が言った。遥斗がその言葉に反応して右を見ると、彼女の言うとおり一人の男が歩いてきていた。

「よっ。相変わらずアツいねえ」

ニヤニヤしながらその男、吉田宗が言った。そんな笑い方をしても下品に感じないのが、彼の凄いところだと遥斗は思う。遥斗の親友である彼は光とも親しく、彼女は宗のことを、吉田の田を取って

吉宗　ヨシムネ　と呼んでいた。

「やろー」

光が笑顔で言いながら、遥斗の腕に自分の腕を絡める。遥斗は自分の顔が赤くなることに気づいたので、慌てて宗から顔を背けた。

「離せよ」

「何で？」

「何でって……宗からも何か言ってくれよ」

「喜んでるくせに」

「ないわ！」

必死に否定するも、宗には通じない。宗は遥斗が光を好きだということを知っている人物だ。どれだけ否定しても無駄だ。宗も、遥斗と同じく母子家庭で育っている。それが元で、中学時代に仲が深まった。父親が死亡したという状況は一緒だが、小学生までは父が健在だった遥斗と違い、彼の場合は父親と過ごした記憶がほとんどないらしい。

光の家は両親共に健在だが、自分たちだけで登校したいと彼女がお願いしたため、後から来るそうだ。また、光にデジカメを渡して記念写真を撮れるようにしてくれた。

「俺がそんなことされたら死んでもいいくらい嬉しいけどな」

「やんな。遥斗がおかしいねん」

光が軽く怒ったような声を出しながら腕を解いたが、不機嫌にはなっていない様なので遥斗は少し安心した。

彼女が不機嫌になるとどうなるか、既に何度も経験しているだけに、それだけはなんとしても避けたいのだ。

「宗は高校でも野球やんの？」

遥斗はふと気になった為、聞いてみた。宗は小学生の頃から軟式野球をやっていて、中学ではレギュラーだったはずだ。遥斗は帰宅部だったが、親友の勇姿を見るために何度か応援に行ったこともある。

遥斗たちの中学はそれほど強くはなかったが、3年生にとっては最後である夏の大会では京都市内でベスト16か8くらいまではいった記憶がある。あと一回で府大会にいけたのに、と宗が悔しがっ

ていたのでおそらくベスト8だろう。京都市から8校も府大会にいけないことぐらいは遥斗にでも分かる。

「やんで。もちろん硬式を。綾北はそんなに強くないけどな」

「そっか」

綾北 綾波北高校は普通の公立校。甲子園出場の経験もなかったはずだ。宗の実力なら最上級生になったらレギュラーになれるかもしれない。また応援にも行こうかと遥斗は思った。

「遥斗は野球しいひんの？」

「俺が？ するか。あんな難しそうやし」

光の問いに少し笑いながら遥斗は答えた。

運動神経は自分でもそこそ良い方だと思っっているが、中学時代も帰宅部だった彼には、部活に入るつもりなどなかった。

「もしかして遥斗、覚えてへんの？」

「何を」

遥斗の返答に光は少し驚いたような顔をした。だが、遥斗には野球部に入るなどと彼女に言った覚えは無かったので、仕方がない。

「じゃあ……5歳のとき一緒に流れ星見たんは？」

見たような記憶もあるが、見てない気がする。もともと遥斗は記憶力に自信が無かった。

「見た気もするけど……見たっけ？」

「うん。そこで遥斗は流れ星に約束したんやで」

「約束？ 遥斗が？ 何で流れ星に約束なんかしてんねん」

宗が笑いながら言ったが、遥斗は少し思いだしてきていた。たしか小学校に入学する前。さつき光が5歳のときと言っていたからそうなのだろう。確かに流れ星に約束をしていた気がする。

「そういえばしてたな……どんなんやつけ？」

「やつぱり覚えてへんか……」

光は呆れたような顔をつくってため息をついたが、すぐに遥斗の方を向いた。

「甲子園に行く。って言ったんや」

「甲子園？ 遥斗がけ？」

宗が驚いたような声を出した。しかし1番驚いているのは当の本人である遥斗だった。

「甲子園ってあの甲子園？」

我ながら馬鹿な質問だと遥斗は思ったが、光は真面目そうな顔で頷いた。

遥斗が歩きながら思いついていると、少しだけだがあの時の様子を思い出した。あの年は、遥斗が初めて甲子園を見た年だった。そのあまりの迫力とかつこよさに感動した記憶がある。

それでも流れ星に約束なんかをするだろうか。

「甲子園……言ったような、言っていないような」

「言ったの！」

光の声と顔と態度があまりにも真剣なので、遥斗は少し驚いた。

彼女は、さつき彼の腕に絡みついた時みたいに、関西人らしくノリで行動することが多い。だがそういうときは決まって顔が笑っていたりして、真剣ではないことが誰でも分かる。今回みたいに声も顔も態度も真剣なときは、真剣な話のときだけだ。

「遥斗も小さい頃は野球少年やったんやな」

「いや、俺はお前と違って野球なんかしたことない」

「でも甲子園って……」

「昔の俺がどうかしてたんやろ」

その言葉を自分自身にも言ってみるが、どうも腑に落ちない。今まで遥斗は嘘をついたり、約束をやぶったことは1度も無かった。

「最近の綾北野球部の成績分かる？」

いきなり遥斗がその様なことを言ったからか、宗は少し戸惑ったような顔をしたが、すぐに口を開いた。

「去年の夏は初戦敗退。ここ5年は4年前……俺たちが小6の時のベスト4を除いて、全部初戦負けやな」

「4年前はベスト4までいったんか」

意外だった。まさか地元にある無名の公立校が、ベスト4まで勝

ち進んでいたなんて遥斗は思っていなかったからだ。

「そのときは、ウラベっていう凄いピッチャーがいたから。プロからもちよつと声掛かったくらいや。まあ大学に進学しはったけどな」「もったいないな」

素直な感想だった。遥斗は、プロになれる実力がある選手というのは全員が、高卒でプロに行くものだと思っていたからだ。

「ヨシムネは何でそんなに知ってるの？」

「まあ地元の高校やし。公立校の躍進って結構話題になるしな。4年前に準決で負けた相手はあの双葉やし」

双葉高校は遥斗でも知っていた。15年前にできたばかりの私立校だが、甲子園出場11回。うち準優勝1回・ベスト4が3回という素晴らしい成績を残している、最近では間違いなく京都府1位の高校だ。

その双葉に負けたのなら仕方ないと遥斗は思う。4年前、双葉高校は甲子園ベスト8まで勝ち進んでいたはずだ。

「スコアは？」

「双葉との？ たしか……0 2だったかな」

宗の答えに遥斗は驚いた。まさかそんなに接戦だとは思わなかったのだ。

「あれ？ そのウラベって人が2年のときも初戦負けやったん？」

「せや。そのときはウラベは外野やったから」

「外野？」

余程驚いたのか、今まで黙って話を聞いていた光が言った。それに対し、宗が頷く。少し顔が得意気になっているが、そんなに知っているのは十分凄いのだから遥斗は気にしなかった。

「たしか新チーム始まってすぐに、エース候補が怪我して……急遽ウラベが練習試合で投げたら意外と良くて」

「監督はそれまでウラベって人が凄いピッチャーなことに気づかへんかったんか？」

「しゃあないやろ。打てへん走れへん。肩強いだけの選手やったら

しいし」

「そっか……今はその人どこの大学に行ってるの？」

「たしか……導龍大学の4回生。結構新聞にも載ってるんでウラベという人は大学でもなかなか活躍しているらしい。」

「よし、甲子園に行こう」

不意に遥斗が呟いたからか、光も宗も遥斗の顔を覗き込んだ。

「電車で？」

「違うわ。そういう意味じゃなくて……」

「車で？ たしか甲子園って車で行ったらあかんかった気が……」

光に続き宗までも自分を馬鹿にするような言い方をするので、遥斗はわざとらしくため息をついた。

「野球でに決まってるやろ」

「野球部にも入らへんのに？」

「入るよ。もちろん」

遥斗の返答が余程おかしかったのか、宗が急に立ち止まった。

不思議に思い遥斗が後ろを向くと、宗は自分が立ち止まったことに気がついたかのように慌てて小走りで遥斗の隣に戻ってきた。

「どうしてん。宗らしくないぞ」

「悪い。でもお前……甲子園やぞ。綾北は1度も出たことないんやぞ？」

「まあでも約束しちゃったみたいやし。なんとかなるって」

「なんとかかってなあ……」

なおも言葉を続けようとした宗の口を押さえたのは光だった。その後、彼女は両手を合わせて軽く頭を下げた。

「生まれて初めて、遥斗がやる気を出してん。お願い。黙って野球部に入れたって」

「いや、まあ……入部許可すんのは俺やないし。それにやるからには甲子園目指すんが普通やしな」

「ホンマ！？ 遥斗、良かったやん！」

宗の言葉を聞いて、光はまるで子供のように喜んだ。遥斗は色々

と言いたいこともあったが、光が喜んでいるので黙っておいた。

野球部に入るくらいでこんなに喜ばれるなら、中学のときから入っとけば良かったと、遥斗はひどく後悔している。

「私もマネージャーやろっかな」

「は？ ……何でまた」

いきなり光が言ったので遥斗は声が裏返ってしまったが、慌てていつもの声に戻した。

光は中学1年のときから吹奏楽をしていて、高校に入っても続けたいと話していたのを遥斗は以前に聞いていた。

「何でつて……遥斗が野球部に入るから」

「でも、吹奏楽は……」

「ヨシムネってキャッチャーやんな？ 遥斗の指導よろしく」

そんな簡単に決めてしまったていいのかと遥斗はさらに聞きたかったが、スルーされてしまったので言いそびれてしまった。

「教えんのは構わんけど、もしかして遥斗、投手やるつもり？」

「もちろん」遥斗はすぐに答えた。

「やるのは構わんけどさ……簡単にエースなれると思うなよ」

宗も、今度は遥斗の言葉を聞いて笑ったりしなかったが、その目は真剣なものだった。

「分かっている。素人が簡単にエースなれたら怖いわ。だから努力すんねん」

「例えば？」

「えつと……」

例えば自分は何をどう努力するのだろう。遥斗は自分自身に聞いてみたが、答えはすぐには出てこなかった。

「な？ 素人は何を努力したらいいかも分からへんねん。とりあえず今度ボールを受けてやるから、一緒に課題見つけようぜ」

いつも悪魔に見えていたというわけではないが、今日の宗が遥斗には天使に見えた。たしかに、素人の遥斗には何をすればいいのかわからない。良い友達を持ったと、遥斗は改めて思った。

「やっとやな」

宗が呟いたので前を見てみると、見覚えのある門と校舎があった。会話に夢中で気がつかなくなったのだろう。その門には、『綾波北高等学校』と彫られたプレートがはめ込まれていて、保護者と来た生徒が写真を撮られたりしている。

「3人で写真撮ろ！」

光がデジカメを取り出して言った。光を真ん中に、遥斗と宗が両隣に並ぶ。

「いくぞ」

宗がデジカメを持った腕を真っ直ぐに伸ばし、レンズを3人に向けてける。これから始まる高校生活に対して希望を抱きながら、遥斗は真っ直ぐとカメラのレンズを見た。

2・綾北野球部

会心の当たりで、打球が飛んでいく。それがレフトの頭を越したことを確認し、松永中はマウンド上の寺島駿に頭を下げてバッターボックスから出た。

「ナイスバッティン」

「最後だけな」

副キャプテンである海田和也に苦笑いで返すと、中はバットをケース　黄色の、ビール瓶を入れるケース　に戻す。すぐにキャッチャー道具を付け始めると、高い金属音が聞こえた。

中がグラウンドに目をやると、和也の打球が右中間をやぶるのが見えた。

「海田さん、調子いいすね」

「せやな。でも、長続きはせえへんぞ」

背中から河北亮の声が聞こえたので、中はプロテクターを付けながら答えた。

「ですね。海田さんのバッティング練習ではあんまり安定しないのが問題……ですよね。試合では打つのに」

中が亮を見てみると、苦笑いしながらグラウンドを見ていた。中もそっちに目をやると、悔しそうにしながら和也が戻ってきていた。金属音が聞こえなかったので、空振りしたのだろう。

「ナイスバッティン」

「最初だけな」

中の皮肉に、和也は苦笑いで返し、すぐに自分のグラブを持って、ポジションへと向かっていった。

「お手柔らかに」

バッターボックスに入った亮が中に向かって言う。その6文字に深い意味が込められているのだろうが、中はそれに対し無言で答える。亮も返事が無いのは承知だったのだろう。既に視線はマウンド

上の駿に向いていた。

半分実戦形式であるこのバッティング練習は、エースの駿と2番手の村井俊之介、3番手で2年生の藤澤翔也が投げて、野手がポジションにしっかりとつく。打者は10球、投手と真剣勝負をする。和也のように最後が空振りでもそれで終わりだ。

右バッターボックスで投手を見て集中している亮を見ながら、中はカーブのサインを出した。

駿が頷き、振りかぶる。ゆったりとした動きで足が上がり、ボールが手から離れた。亮がバットを振ることもなく、ボールは中のミットに収まった。

「入ってる」

「分かってますよ!」

中は亮の様子を観察しながら、座ったままでボールを駿に返球した。

亮は変化球が打てない。そして克服できない。だから2年生ながら4番を打てるパワーがあるのに、打たせてもらえないのだ。

そのことをよく知っている中は、大抵、亮への初球にカーブを要求する。打てないなら打てるようになればいい。少なくとも、直球しか打てない打者は試合で使えない。

駿にカーブを投げさせる理由は、少しでも亮の目を変化球に慣らすことと、冬場に成長してMAX140?ノhの直球を武器とする駿の変化球に少しでも磨きをかけることだ。この2つを同時に満たすため、中は駿に変化球を多く投げさせる。

結局9球中、亮はレフト前ヒットが2本。内野フライが2本。内野ゴロが3本。空振りで見逃しが1回ずつだった。

2本の安打はいずれも直球を打ったもので、5球投げられた変化球は見逃し・ファーストゴロ・ショートフライ・空振り・サードゴロだった。特にスライダーを空振りしたときの彼のスイングは、キヤッチャーから見ても酷いものだった。

「河北、どっちがいい?」

「決まっていますよ。真っ直ぐで」
「了解」

亮の返答を聞いて、中は迷わずカーブのサインを出す。それに対し駿は頷いて、投球動作に移った。

悪いな。河北

中は心の中で呟くと、キャッチャーミットを構えて、ボールを待った。

「なっ……」

絶対に直球だと思っていたのか、亮は豪快に空振りし、尻餅をついた。彼が慌ててこちらを見てきたので、中は少しニヤリと笑って駿にボールを返す。その仕草に亮はムカついたのか、立ち上がりユニフォームをはたくと少し中を睨んだ。

「直球がいつて言ったじゃないですか」

「そう言われて直球投げる馬鹿がどこにいるんや。お前に直球投げたら絶対打たれるんやから」

「え？ それってどういう……」

「そのまんま。真っ直ぐをお前に投げたら絶対打たれるから曲げたんや。そうでもせえへんとお前を打ち取れへんからな」

中の言葉を聞いて、亮の顔に少し笑顔が見えた。彼が単純だということを知っている。

「そ、そうですね。まあ寺島さんの直球はもう余裕です」

その割には結構打ち取られていたと中は思ったが、それを言うては何の意味も無いので口にはしない。

「そういうこと。まあ次は変化球も頼むで」

亮は機嫌を良くしたのか中の言葉に頷くと、駿に頭を下げて、バッテリーボックスから出た。

「単純やな……」

ついつい中は呟いていた。

自分のファーストミットをはめた亮は、バックネットの裏に2人の生徒が立っていることに気がついた。

新入生か？

すぐに彼は思った。2人のうち1人が坊主で、2人もまだ制服をきていたからだ。もう1人は長髪で、野球部に入りそうではないが、坊主頭の友人だろうというのは容易に想像できた。

「どうした？ 見学か？」

「えっ……あ、はい！」

坊主頭がすぐに返事をしてきた。その仕草が初々しくて、亮は少し嬉しくなる。新2年生である亮にとって、彼らは初めての後輩になるのだ。

そういえば今日が入学式だったことを亮は思い出した。ちなみに始業式は明日なので、亮たちにとっては今日が春休み最後の日ということになる。

入学式はもう終わったのだろうか。少しだけ疑問に思った亮は、坊主頭に聞いた。

「今日って入学式やなかった？ もう終わったんか？」

「はい、先ほど。僕たち硬式野球部に入ろうと思ってますので、見学にと。」

『僕たち』？

『たち』ということは、坊主頭の友人である長髪も入部しようと思っているのか。雰囲気からしてサッカー部あたりかと、亮は勝手に思っていたのだが、改めなければいけなくなつた。

「名前はなんていうんや？」

亮は坊主頭と長髪の両方に聞いた。心の中ではいえ、いつまでも髪型を、名前代わりとして使うのは嫌だったからだ。

彼の問いには、まず坊主頭が答えた。

「ヨシダソウといいます。大和中出身で、捕手志望です！」

ハキハキとした口調で坊主頭　ヨシダ　は答えた。吉田という選手には聞き覚えがある。確か、何度か見学に来ていたはずだ。

動きが良かったため、よく覚えている。おそらく、目の前のヨシダがその吉田だろう。ユニフォームを着ていないと雰囲気が変わり、彼が自己紹介するまで気がつかなかった。

「吉田ね。お前は？」

「カミヤマハルトです。投手志望です」

亮が、長髪 カミヤマ の声を聞いたのは初めてだったが、意外と丁寧に答えたので彼は少し驚いた。

「ヨシダとカミヤマやな。俺は河北亮。2年やけどファーストのレギュラーや。まあ、吉田はもう知ってるか？」

彼は後半を強調して、簡単に自己紹介した。しかし、目の前にいる2人の1年生は何故か、少し怯えたような顔をしている。

「どうしてん。1年先輩やけどそんなビビらんでええで」

「いや、あの……そうではなく……」

吉田がはつきりしない口調で言う。亮が不思議に思っていると、急に肩を叩かれた。

「松永さん……」

亮が振り返ると、そこには笑顔を作った中が立っていた。そしてやっと、吉田とカミヤマが怯えていた理由が分かった。

先ほどまで中は険しい顔をしていたのだろう。そう思うと亮には、今の彼が作っている笑顔も非常に怖く思えた。

「楽しそうやな。練習サボってまでするくらい楽しいことなら、俺も混ぜてくれよ」

「いや、その……決して練習をサボっているわけでは……。後輩に對して、うちの野球部を説明してまして……」

まだ怖い笑顔のまま中にビビりながら、亮は答えた。説明していたというのは嘘で、ただ単に雑談をしていたただけだなんて、キャプテンである中には言えない。

「説明なら俺がする。それに、多分こいつらは見学に来ただけや。とりあえず練習風景を見てもらっただけで十分やろっ？」

中の言うとおり、吉田とカミヤマは練習の見学に来ている。簡単

なものならともかく、詳しい説明をするのは入部してからでも十分だ。

「そ、そうですね……」

「分かったらさっさと守備につけ！」

急に笑顔ではなくなつた中の声を聞き、亮はすぐに1塁へと走つた。

「どうやったん。部活見学って」

行きと同じメンバーで帰っているとき、水原光が聞いてきたので、神山遥斗は少し考えてから答えた。

「うーん……。もつと暑苦しいと思つてたんやけどな。良い意味で、思つてた感じと違つた」

「だよな。えーと……何ていつたつけ……そう、カワキタさんや。あの人はおもしろかつた」

遥斗の言葉に吉田宗も同意する。遥斗は、今日話しかけてきた先輩部員の名前など覚えていながつたが、記憶力が凄い宗は覚えていたらしい。

遥斗が、そのカワキタという人物について覚えていたのは、ゴツいということだけだつた。

「光はどうやった？ 一応吹奏楽部の見学に行つたんやろ」

「普通に良かつたんやけど……やっぱり野球部のマネージャーやると思つ」

「マネージャーか……中学のときはおらんかつたから、なんか変な感じするな」

中学で野球部に参加していなかつた遥斗は、詳しいことを知らなかつたため、マネージャーがいると思つていた。しかし、宗によると中学でマネージャーという存在はいなかつたみたいだつた。

「でもいいんか？ マネージャーって結構大変らしいで」

「誰に言つてんの？ 幼なじみで私の体力知らんとか言わせへんで」

光にそう言われて、遙斗は彼女が中学のときに、1500m走で学年1位だったことを思い出した。同じクラスの女子生徒が教えてくれたのだが、確か2位とかなり差があったはずだ。

中学のときは、遙斗と同じ学年で陸上部に入っている女子が1人しかいなく、その女子も短距離が専門だった。

「水原なら大丈夫やつて。問題は遙斗や」

「せや。遙斗帰宅部やったやろ。体力とかヤバいんちゃう」

「お前中3のとき、1500m6分くらいかかってたやろ。高校野球ナメたらあかんぞ」

2人に言いたいことが、遙斗には2つあった。

1つ目、遙斗は中学1年のときから毎朝走り込んでいる。さすがに帰宅部では体力がヤバいと思ったからだ。

2つ目、中3のとき走った1500mのタイムなんて遙斗は全く覚えていなかったが、少なくともあのときは力を抜いて走っていたことを覚えている。あんなものに全力を注ごうとは、遙斗は思わなかった。

プライドのこともあり、2人にそれを言うために遙斗は口を開いた。

「はいはい。冗談はいいから」

「遙斗は昔から口だけは達者やからな」

遙斗の言い訳ともとれる言葉に、宗も光も、少し馬鹿にしたような言葉で返した。少しムカついた遙斗は仕方なく口を開いた。

「ここから俺の家までなら500mくらいやと思う。2往復で勝負しようや。それやつたら文句ないやろ」

「2往復ってことは2キロか……まあいいやろ。制服やけどそれはお互い様やしな」

やる気になったのか、宗は持っていたカバンを地面に置いた。それを見て遙斗も自分のカバンを地面に置く。しかし中身も大してなかったなので、あまり軽くなっただとはいえない。

「制服でいいの？」

「いい」

光が聞いてきたが、遥斗はすぐに答えた。宗も頷く。

「光、頼む」

「……？ 何を？」

「スタートの合図や」

彼女はやつと分かったのか、遥斗の言葉を聞いてから、位置について、と言った。

それを聞いて慌てて遥斗と宗が構える。

「よーい……ドン」

光の言葉を合図に遥斗は走り出した。宗もほぼ同時に走り出したようだ。

遥斗は、宗が思っていたよりも早かった。2キロという距離も考慮して、宗は全力で走っているわけではないのだが、それでも隣を遥斗が走っているのには驚いた。

走っている車の数も少なく、信号も無いので、スムーズに走れる。1分半ほどで、遥斗の家が見えた。

「遥斗、しんどくないか」

「余裕」

表情1つ変えずに遥斗が答える。まだ数100mしか走ってないからなのか、2km走っても変わらないのか、今の宗には分からなかった。

「クソっ……」

ラスト500mをきつても、遥斗は宗の横を走っていた。その表情にはまだ疲れが見えない。宗は焦った。

「じゃあお先に」

遥斗はそう言ってペースを上げた。まだ遥斗の家を出てから100mほどしか走っていない。つまり残りの距離は400mくらいあるということだ。

力を抜いてたんか……

宗はそのことにやっと気がついた。しかしそれに気づいたからといって、宗には今の遙斗と同じ速さで走る力は残っていなかった。

「俺の勝ちやな」

「ああ……完敗……や」

走り終わった宗は、苦笑いしながらそう答えるしか出来なかった。

3・将来の好敵手

「早速やけど、今からみんなに自己紹介をしてもらおう」

始業式が終わり教室に戻ってきた、神山遥斗たち1年A組の担任、長嶺博之が唐突にそう言った。

昨日は入学式が終了した後、新1年生らはすぐに帰宅しなければいけなかったので、自己紹介なるものができなかったのだ。遥斗と吉田宗は、少し野球部の練習を見学したが、それくらいなら問題なかった。

壁に掛かっている時計を見ると、帰宅予定時間まで、1時間以上あった。こういうことをするためだろう。顔見知りの人物も多いので、自己紹介するというのも変な感じが遥斗にはしたが、知らない生徒もいるので、この自己紹介は仕方のないものだ。

「じゃあアンドウから頼む」

「俺からかよ……吉田って奴からじゃあかんの？」

アンドウと呼ばれた、遥斗の左に座っている出席番号1番の男は挑戦的にそう言った。

「いや、まあ駄目じゃないが……吉田、どうだ？」

まだ20代前半と思われる長嶺からは威厳などは全く感じられなかった。アンドウと呼ばれた男子から言われ、仕方なく宗に助けを求めるその姿は、気の弱い学生のようなだった。

名字が『よ』で始まる宗は、A組の名簿で1番最後。おそらくアンドウは、名簿の最後から始めると言いたいのだろう。

宗は何の文句も言わずに立ち上がると、教壇へ歩き出した。それを見たアンドウは満足そうな顔をして、自分の椅子に座った。長嶺もホッとしたような顔で、教室の端へ行った。

「名前と出身中学、あとは適当に自己紹介してくれ」

教壇の真ん中に立った宗は数秒だけ考えていたが、やがて口を開いた。その表情から、彼が珍しく緊張しているのが、1番前の席に

座っている遥斗には分かった。

「大和中学出身、吉田宗。好きな教科は体育と数学。硬式野球部に入るうと思っています。こんな感じで良いですか」

宗は、簡単に自己紹介を済ませると長嶺の方を見た。長嶺は頷いて、宗を席に座るよう促す。それを見て、宗は自分の席へと戻った。その後も、自己紹介は出席番号の最後から順番に、滞りなく行われていく。そして32番、水原光の番になった。

「水原光です。大和中学出身で、うちのクラスでは井口さん、神山君、谷本さん、中村さん、森君、吉田君と同じです。硬式野球部のマネージャーになるうと……」

「彼氏いんの？」

光の自己紹介を遮って、遥斗の左から声が聞こえた。それはアンドウのものだった。

そのあまりにも酷い態度に、遥斗は彼を睨んだ。するとそれに気づいたのか、アンドウは逆に遥斗を睨みつけてきた。「なんや。文句でもあんのか」

「大ありやな」

「どこがや。じっくり説明してくれや」

「まず……」

「ストップ！ 遥斗もアンドウ君もそこまで」

教壇に立ったまま2人のやりとりを眺めていた光が、遥斗の言葉を遮った。「彼氏はいません。これでいい？」

アンドウはそれを聞いてニヤリと笑うと、勝ち誇ったような顔を遥斗に向けた。遥斗はそれを無視して、カバンから昨日もらったクラス名簿を取り出した。アンドウの名前を確認するためだ。

安藤克也、A組の名簿1番にはその名前が書かれていた。

遥斗は絶対に彼を克也とは呼ばないことを心に誓うと、カバンに名簿をしまった。

「じゃあ次がラストだな。安藤、頼む」

さすがに、今回はやらなければいけないと思ったのか遥斗には分

からなかったが、彼は文句を言うことなく教壇に向かった。先ほどのことがあったため、遥斗は克也を少し睨みつけたが、彼は気にする様子もなく自己紹介を始めた。

「三笠中学出身。とりあえず硬式野球部に入ろうと思う……」
「は!？」

克也の言葉に、遥斗は大きな声を出してしまった。克也が怪訝そうな顔をする。

「人には色々というくせに、自分は人の自己紹介中断させるんやな」「うっ……そ、そんなことより硬式野球部に入るってどういうことや」

「どういうことも何も……そのままの意味やけど」

こんな奴と2年間半も一緒に野球をしなければいけないのか。しかし、遥斗には克也を野球部に入れさせないことなどできない。そもそも、そんなエゴが通用するわけがないのだ。

とりあえず遥斗は心を落ち着かせた。克也は体格ががっしりしている。奴がキャッチャーならいい。どうせ宗には負けるだろうし、バッテリーを組むことなどないだろうからだ。

「ポジションは？」

「俺のけ？ そついやお前も野球部やったな。それにしてもせつかちやな、お前。どうせ入部者挨拶で分かるやろ」

「今、知りたい」

遥斗の言葉に、克也はわざとらしくため息をついた。しかし、遥斗はどうしても早く知りたいのだ。

ピッチャーとかなら最悪だが、幸いにも奴は体があっしりしている。キャッチャーである可能性は高い。

「じゃあないな、教えてるわ。ピッチャーやピッチャー」

「なっ……お前もピッチャーなんか……」

「お前もって」そう言っつて、安藤は遥斗の体をじっくりと見た。「お前もピッチャーなんけ？」

「悪いか」

「悪かねえけど……お前ヒヨロイからな」

それに対して、遥斗は何も言い返せない。体が細い投手はたくさんいるが、やはりがっしりしている方が良い。

しかし、黙りこんだ遥斗をフオローするかのようには後ろから声が聞こえた。

「遥斗は体細いけど、力も少しはあるし。体力はお前よりもあるで」「えっと、ヨシヤマやっけ。何を根拠に俺がこいつに負けるって言うてんねん」

「俺は吉田。で、その質問の答えは直勘。お前、体力無さそうやし」
遥斗は慌てて宗を見た。宗が感情的になるのを、遥斗はあまり経験したことがなかったからだ。

「勘って……いい加減やな、お前」

「お前ほどじゃないけどな」

宗と克也の視線がぶつかる。

教室全体に異様な空気が漂う中、空気を読まずに口を開いたのは長嶺だった。

「はい、お疲れみんな。安藤も席に戻っていいぞ」

まさかの乱入に、克也は少し啞然とした表情を浮かべていた。しかし、これ以上議論しても仕方ないと判断したのか、何も言わずに自分の席へ戻った。

「よし、一日お疲れさん。明日から授業が始まるから、昼飯がいるぞ。そうそう、部活の入部届も明日から受け付けられるから。このクラスは硬式野球部に5人も入るらしいな。甲子園目指して頑張ってくれ」

長嶺はそう言うと、時間割も印刷された学級通信　これにより、彼のネーミングセンスを遥斗は疑うことになった　と、入部届を配った。

入部届は冊子の様になっており、各クラブのアピールが書かれていた。最後のページが入部届になっている。

長嶺の号令によって解散されると、遥斗は宗と光に声をかけて、

帰路についた。

「珍しいな、宗。お前が感情的になるとか」

「うーん……、何でやるうな。まあお前は俺に昨日勝ったから、体力あるんは事実やし」

「あいつ嫌い。うちに彼氏いるかなんて関係ないやんな」

帰りながら、克也について話しながら3人は歩いていった。遥斗だけではなく、他の2人も彼に好意を持っていないことが分かったので、遥斗は少し楽になった。

あの長髪で挑発的に人を見下す姿を思い出しただけで、嫌になる。

「遥斗、あいつには負けんなよ」

「せや。負けたらあかんで。今日ヨシムネに教えてもらっんやろ？」

「ああ。帰って着替えたらな」

遥斗は今日、近所にある公園で宗にピッチング指導してもらった。

彼の野球経験なんてキャッチボールくらいで、キャッチャーに向かって投げるといっのは初めてだったので、少し楽しみだった。

それに、明日には入部届を出す 母親の許可もとった 予定

だ。少しでも上手くなっておきたいと思うのは、当然のことだった。

しかし遥斗は少し思うことがあったので、足を止めて口を開いた。

「宗、お前の家にバリカンある？」

「あるけど……」

「練習の前に、貸してくれへん？」

「お前……まさか……」

「剃る」

遥斗は表情を変えずに答えた。

「いや、まあ野球部入んのやったらいつか剃らなあかんけど……」

「だから今日剃る」

「遥斗……。水原からも何か言ってくれよ」

「良いんちゃう？ 遥斗が剃りたいんやったら」

宗が光に助けを求めたが、彼女は笑顔でそう答えた。たとえ光が遥斗を説得しようと、彼の意見は変わらない。

遥斗は、手を胸の前で合わし、軽く頭を下げた。

「貸すのは良いんやけどさ……。後悔すんなよ？」

「分かってる」

交差点に差し掛かると、遥斗は足を止めた。本来なら、宗だけが別れるのだが、今日はバリカンのこともあるので、遥斗は宗について行く。

「光、俺の家の机にオニギリがあるから、1時に武蔵公園まで持ってきてくれへん？」

「分かった。どうせ見に行くつもりやったし。じゃあ後で」

走っていく光の後ろ姿を見送って、遥斗は宗と共に歩き出した。

4・素人の投球

「どうや、坊主頭は」

「まあ、何というか……酷いな」

深く考えてから行動しなければいけないと、吉田宗に剃ってもらった自分の坊主頭を見ながら、神山遥斗は思った。

時計を見ると、12時45分を指していた。集合時間まで、あまり時間は無い。

「遥斗、グラブ持ってないやろ？」

「ああ」

「分かった。中学のときに使ってた内野手用グラブ貸すわ。いいやろ？」

「もちろん。早く行こうぜ」

宗を促して、駆け足で武蔵公園へと向かった。宗の家からそこまでは、歩いて10分ほどかかるが、走ったため5分もかからずに着いた。

「遥斗、ちょっと下がって。まずキャッチボールからや」

グラブを遥斗に渡しながら、宗が言った。遥斗は頷くと、後ろに5歩ほど下がった。

遥斗が止まると、宗が軽くボールを投げてきた。いつも遥斗は、軟式ボールでしかキャッチボールをしていなかったので少し緊張していたが、硬式ボールも普通に捕れたので少し安心した。

「そのグラブは軟式用やから俺は軽く投げるけど、遥斗は普通に投げるよ。でも、肩が出来るまで本気では投げんでいい。軽くな」

遥斗は頷きながら、投げ返した。

「もうやってたんや。あれが遥斗の坊主か……意外と似合ってるやん」

後ろから水原光の声が聞こえたので、宗はボールを遥斗に投げたから振り返った。

そこには、袋を持った私服姿の光が立っていた。袋には、おそらくオニギリが入っているのだろう。

「まだ、キャッチボールやけどな。あと、その言葉は遥斗に直接言つてやれ」

「ムリムリ」

「何でや……。まあ、どっちでもいいけど」

そう言いながら、遥斗を呼ぶ。とりあえず投球練習は昼飯を食つてからでいいだろう。

宗は、遥斗から手渡しでボールを受け取ると、近くにあったベンチに座った。遥斗と光も隣に座る。

「ヨシムネ、遥斗のピッチングどう？」

「だからまだキャッチボールやって。食い終わったらやる。見てくやる？」

「当たり前やん。見いひんかったらただのパシリやし」

光は自分が持ってきた、遥斗のオニギリを指差しながら言った。

遥斗は苦笑いしている。

遥斗が昼食を食べ終わった。すぐに動くのも良くないので、宗はストレッチしながら時間を潰した。

「宗、やるう」

「よし」

宗が携帯電話で時間を確認すると、ちょうど1時半になっていた。これから暑くなる時間帯だが、仕方ないだろう。宗はキャッチャーミットを手にとった。

遥斗は先ほど地面に引いた線のところまで小走りで向かっている。宗から、ちょうどバッテリー間の距離になるように引いてある。

「いくぞ！」

遥斗が左脚を後ろに引きながら振りかぶった。そのまま左脚を上げ、体が横向きになる。キレイなフォームだ。中学生時代に宗が教

えた成果だろうか。

宗はそのまま遙斗が投げるのかとおもったが、彼はその態勢を保ったまま口を開いた。

「宗、言つときたいんやけど」

「なんや」

距離が離れている　投手と捕手の間は18・44mある　ため、自然と声を張る。　た

「俺、今日はストレートしか投げへんし」

宗は、その言葉に苦笑いするしかなかった。初めて硬球を投げる素人に変化球なんて投げられるはずがない。彼は返事をせずに、キャッチャーミットを構えた。

中断されていた遙斗の投球フォームが再開され、その右腕からボールが放たれる。それは真っ直ぐに宗のミットへと向かっていき、すぐに乾いた革の音がした。

「おお」

後ろから聞こえるのは光の声。確かに、構えた所に投げられたのは凄い。遙斗が素人だということを考えれば尚更だ。しかし、遅い。良く見積もっても時速100?を少し越えるくらいだろう。

とりあえず、宗はボールを遙斗に投げ返した。

再び、全く同じフォームで遙斗が2球目を投げた。今回は何か話すことはなかったが、相変わらずフォームはきれいだった。

「スゴい……」

後ろで光が呟いたのが宗には分かった。確かにスゴい。また構えた所にボールが来た。相変わらず球速は遅いが、これから延びるだろう。

その後30球ほど続けたが、そのほとんどが宗の構えたミットに来た。

宗は立ち上がるとボールを遙斗に投げて、彼に近づきながら言った。

「もう終わろうか」

「え、もう？ まだ全然疲れてないで」

「右腕は悲鳴をあげてるわ。ホンマはこんなにやるつもりもなかったんやけどな。とりあえずお前は今まで全然投げてなかったんやから、今日いきなりやるのもマズい」

遥斗は納得できない様子でいたが、しびしびといった表情で頷いた。野球に関して、宗の言うことに逆らう気はないようだ。

クールダウンも終わり、光にも声をかけて公園を出た。

「遥斗スゴかったわ。後ろから見て感動したもん」

「アホか。全然ボールも速くないし、あんなんじゃエースとか程遠いわ」

光が遥斗を褒めたが、彼は照れたようにしながら否定した。

「あっ」

「どうした？」

しばらく歩いていると、不意に遥斗が立ち止まった。つられて、宗と光も立ち止まる。

「ユニフォーム……どうしよ」

「ユニフォーム？ 明日の練習で使うやつか」

宗の言葉に遥斗が頷く。中学時代は帰宅部で、野球部に入ることでも昨日決めたくらいなので仕方のないことではあるが、あまりにも初歩的な質問に宗は呆れた。

しかし、それを遥斗に言ったところで得することはないので、何かないかと考える。思い浮かんだのは、宗自身のユニフォームだった。

宗が中学時代の前半に使っていたユニフォームなら余っているし、比較的小柄な遥斗ならそれを着ることもできるだろう。そのことを伝えると、遥斗はホッとしたような顔をして、宗に頭を軽く下げた。

「悪いな。あとで取りに行くから」

「おう。気にすんな」

そこでちょうど交差点にさしかかった。ここで、宗と2人は別れる。

「じゃあ、あとで」

「おう。水原はまた明日な」

「うん。また明日」

2人と別れた宗は、自宅に向かって歩き始めた。だいたい10分ほど歩けば着く距離だが、やはり1人で歩いていると少し寂しい気持ちは湧いてくる。

持ってきているボールを右手で弾ませながら歩く。季節が春になっ
ているということもあり、桜の木をずいぶんと見るようになった。
毎年この時期になると、宗はテンションが上がる。桜が好きだか
らなのか本人にも分からなかったが、桜を眺めているとやる気が起
きるのは事実だ。

周りの景色を見ていると、10分というのはあっという間だった
ようで、すぐに自宅が見えてきた。この時間なら母親が幼稚園から
弟の弘樹を連れて帰ってきているだろう。

家の前にある郵便受けを覗く。何も入っていないので、やはり帰
ってきているのだろう。

宗はカバンから自宅の鍵を取り出すことなくドアを開けた。

「ただいま」

宗は家に帰ると、いつも通り挨拶をして2階にある自分の部屋へ
向かった。

カバンから白紙の入部届を取り出して1階に降りると、まだ4歳
の弘也が駆け寄ってきた。

「お兄ちゃん、お帰り」

「ただいま。母さんは？」

「ゴトーに買い物やって」

弟の口から、近所にあるスーパーマーケットの名前が出てきた。
これでやっと疑問が解けた。

宗は、母もすぐに帰ってくると思ったので、弘也を抱きかかえて
リビングに向かった。

テーブルの上に入部届を置くと、すぐに弘也が反応した。

「お兄ちゃん、それ何？」

「入部届……って言っても分からんよな。大事なもんや」

「にゅーぶとどけ……何で大事なん？」

何でといわれると、難しい。4歳にはなかなか説明できない。

宗はそれに答えずキッチンへ行き、冷蔵庫からアイスを2本取り出して顔の高さまで上げた。弘也はそれを見て笑顔になる。彼の質問が答えにくいとき、宗はいつもアイスで話を逸らす。1年中使える技なので、かなり重宝していた。

弘也にアイスを渡すと、やはりそれに集中して食べ始めた。

「旨いか？」

「うん、おいしい」

年が離れているせいか、宗は弟である弘也を憎らしいと思ったことが一度もない。

笑いながらアイスクリームを食べている彼の頭を撫でていると後ろから声が聞こえた。

「ただいま。これ何？」

声の主である母親は、テーブルを見ながら言った。おそらく入部届のことだろう。

宗は弘也の頭を撫でるのを止めて立ち上がると、紙の上部に書かれている『入部届』という文字を指差した。口で言っても良かったが、アイスクリームを食べているので止めておいた。

「ああ、入部届か」

「母さんの名前と判子だけでいい。あとは俺が書くから」
「了解」

宗は母親にボールペンを手渡し、代わりに買い物袋を受け取る。それをリビングまで持っていき、ついでにアイスクリームの棒も捨てた。

「はい」

「サンキュー」

母親の名前と、判が押されているのを確認して宗は2階へと上が

った。明日の練習で使うユニフォームを遥斗が取りにくるので、用意しなければいけない。

ちょうどユニフォーム一式を出したところで、玄関のチャイムが鳴った。

宗がユニフォームが入った袋を持って1階に降りると、母親の声が出た。

「神山君来てるけど、何で？」

「ユニフォームあげるんや。中学の時に使ってた小さくなったやつ。練習用な」

「何でユニフォームなんかあげんの。別にいいけど、どうせ神山君からしたら必要ないのとちゃう？」

一瞬、母が何を言っているのか宗には分からなかったが、しばらく考えて、彼女に遥斗が野球部に入ることを伝えてなかったの思いついた。

遥斗を外ですつと待たせるのも悪いので、とりあえず宗は母親の言葉には答えず、玄関へ行ってドアを開けた。

「ほい。これがユニフォーム。もう使わへんからお前のもんにしていいし」

「悪いな。助かるわ」

ユニフォームが入った袋を受け取った遥斗が言う。

「じゃあ、と言って宗はドアを閉めようとしたが、思い出したことがあったので、もう一度ドアを開けた。

「どうした？」

「名前。ユニフォームに薄く俺の名前が残ってるから、吉田の上から濃く神山って書いていてくれ」

「ああ、分かった。じゃあまた明日な」

宗は今度こそしっかりとドアを閉めた。

「で、どういうこと？」

「遥斗のこと？ 野球部に入りたいけどユニフォームが無いから、俺の古いやつをあげたんや。問題ないやろ？」

「問題はないけど……。神山君、初心者なんやろ？ あんたがちゃんと教えてあげや」

「分かってるって。あいつは上手くなる」

そう言つと、宗は再び自分の部屋に向かった。入部届の空白箇所を埋めるためだ。

クラスと氏名、希望するクラブ名、意気込みなどを書いていく。数分で書き終わらせることができた。

1階に降りて弘也の遊び相手をしていると、母親が声をかけてきた。

「神山君、どこのポジションすんの？」

「ピッチャー。今日、少しだけ受けてみた」

「どうやった？」

「球は遅かったけど、それ以外は良かったよ」

お世辞ではない。

毎朝走っているためか、しっかりとした足腰。片足の状態で、一切ぐらつかずに会話が出来たので、合格点だ。

精密機械のようなコントロール。8割ほどのボールが構えた所に投げられた。

そしてあのスタミナ。筋力的には厳しいかもしれないが、体力的に考えると練習には難なくついていけるだろう。伸びしろは大量にある。ひよっとしたらひよっとするかもしれないと、宗は思った。

5・入部

「1……2……3……」

「9人や。数えんの遅いぞ」

「あ、悪い。でも初日から9人が……最終的には20人くらいかな」
河北亮が呟くのを聞きながら、綾波北高校野球部2年生の岸本俊輔は並んでいる新1年生を見る。彼らは帽子を取っているのによく分かるが、全員が坊主頭だ。

同じ中学校だった吉田宗と千葉優希は知っているが、あとの7名は彼が知る選手ではなかった。

しばらくは、左胸に書かれている名前を見ながら接しなければいけない。

「今は9人いるみたいやけど、最終的にはもつと増えそうか」

キャプテンである松永中が、一番端にいる、左胸に安藤と書かれた1年生に訊いた。安藤がはい、と答える。少し満足そうな顔をしながら中は続けた。

「じゃあ取りあえず自己紹介からしてもらっわ。安藤から、名前と出身中学、志望ポジションとアピールポイントを言ってな」

「安藤カツヤです！ 三笠中学出身です！ 志望ポジションは投手で、アピールポイントは球の重さです。よろしくお願いします！」

1歩前に出て自己紹介したカツヤは、頭を下げるとまた後ろに下がった。

次は神山という、俊輔が知らない生徒だった。

「神山ハルトです！ 大和中学出身で、投手志望です！ アピールポイントはスタミナとコントロールです！ よろしくお願いします！」

そう言って、ハルトは後ろに下がった。俊輔と同じ大和中学出身のようだが、彼はハルトのことを知らなかったのだので、おそらくクラブチームで野球をしていたのだろう。

ユニフォーム越しの体は細く見えるが、アピールポイントにスタミナというくらいなので筋肉質なのだろうか。中学時代も投手だったであろうし、それでスタミナがついているという可能性も高い。神山が後ろに下がると、その隣にいる宗が一步前に出た。彼は中学時代、一緒にプレーしたこともあるので俊輔はよく知っていた。

「大和中出身、吉田宗です！ ポジションは捕手で、肩には自信があります！ よろしくお願いします！」

宗のポジションが捕手というのを聞いて、3年生の何人かがキャプテンである中を見た。おそらく同じ捕手だからだろう。余裕からか、彼は苦笑いしている。

宗は俊輔たちの代でも2年生ながら正捕手だった。その実力を一緒にプレーした俊輔は十分に分かっている。なかなか良い争いが見れるかもしれないと俊輔は思った。

1年F組の、優希が挨拶を終えた。これで、今日練習にきている新1年生の挨拶は全て終わった。

少しホツとした遥斗は、左隣にいる宗を見た。クラス毎の名簿順に並んでいるため、本当は彼らの間に2人が入るのだが、今日の練習には来ていない。

宗には、全く緊張している様子が見られなかった。坊主頭の上級生を見るだけで緊張している遥斗との違いに、彼は少し驚いた。

「はい、挨拶おつかれさん。俺がキャプテンのマツナガアタル。ポジションはキャッチャーな」

「俺は副キャプテンのカイダカズヤ。ポジションはサード」
そう言って、おそらく3年生であろう2人の上級生が挨拶した。

そして、アタルは一度手を叩いた。挨拶終了の合図だろうか。話は練習メニューに移った。しかし、遥斗が理解できた単語はキャッチボールのみだった。

今日の練習メニューを全て言い終わると、アタルは1年生の方を

ざつと見渡した。

「えーと、まずはキャッチボールやけど……1年には2年がついてやれ。できるだけ同じポジションの奴としろよ」

その言葉とほぼ同時に、2年生と思われる選手が動き出した。

どうしていいか分からず、遥斗がその場でキョロキョロと辺りを見渡していると、いつの間にか1人の2年生が目の前に立っていた。

「あつ……えつと……」

「ピッチャーやんな。俺はイトウ、ピッチャーやし。よろしく」

イトウと名乗ったその2年生は笑顔でそう言った。遥斗の緊張をほぐそうとしてくれてるのが分かったので、彼は少し楽になった。

「よろしくお願いします」

「じゃあ、早く行こうぜ」

イトウはそう言うのと、軽く走り出した。遥斗もそれについて行く。すると、克也と1人の上級生が、それぞれ10メートルほど離れて立っているのが見えた。

その隣に並べばいいのだろうと遥斗は判断した。克也の隣に並べなければいけないのは嫌だが、そうしなければいけないのなら仕方がない。

遥斗らの後にも次々と1年生と2年生のペアが並んでいく。キャプテンであるアタル以外の部員が全員並んだとき、カズヤの音が遥斗に聞こえた。何を言ったのかはよく分からなかったが、周りの様子を見ると、キャッチボール開始の合図だったようだ。

遥斗がイトウの方を見ると、既にボールが手から離れていた。遥斗は慌ててそのボールに集中した。

近づいてくる中を見ながら、白波瀬花梨は心の内で舌打ちした。

走ってくるのならいいが、歩いてくるのだからたまらない。

「遅い。向こうに2人も待たせてんの忘れてないやんな」

「忘れてねえよ。それより、もしかしてカリリン怒ってる？」

「次そう呼んだら殺すから。で、向こうで待つてるマネージャー希望の子はどうすんの？ もう呼んできてもいい？」

馴れ馴れしく嫌なあだ名で話しかけてくる幼なじみを彼女は睨みつけると、バックネットの後ろで練習を眺めている2人の女子生徒を見る。2人とも、マネージャー希望の新1年生だ。

キャプテンである中の指示があるまで待機と言っているから、花梨が中が何も言わない限り、絶対にそこから動かないだろう。

「カリリ……睨むなよ。まあ、花梨が好きに教えてくれ。俺も練習せんとあかんし」

「分かった。じゃあ、もう戻っていいよ」

花梨がそう言うと、中は走ってグラウンドに行った。彼女は、来るときも走れと言いたかったが、やめておいた。

まずは、新入生の世話だ。彼女はバックネットの裏に小走りで向かった。

花梨が近づいてきたのに気付いたのか、1年生2人がほぼ同時に振り向いた。

「マネージャー希望やんな。私は白波瀬花梨、3年生。他にも2人いるんやけど今は仕事中。後で会ったときにでも挨拶しといて。じゃあ君から名前お願い」

「は、はい。1年A組のミズハラヒカリです」

「1年C組、スガモトマスミです」

やはり緊張しているのだろう。2人とも何回か声が裏返った。しかし、緊張するなというほうが無茶である。

「じゃあ、今から簡単に説明するからこっちに来て」

「はい！」

素直な1年生を後ろに引き連れながら、花梨はグラウンドに目を向けた。そこでは、まだキャッチボールが続いている。

もう彼女が綾波北高校に入学して2年が経った。長いようで短く、短いようで長い2年間だったが、充実していたのは確かだ。

甲子園に出場するのは厳しいかもしれない。そんなことは分かっ

ている。しかし、そういつた具体的な目標がある以上は頑張っても
らわねばならない。

中、負けたらぶん殴るよ。

花梨は心の中で呟いた。

入部して最初の土曜日、遥斗は宗と一緒に近所のスポーツ用品店
へ行った。グローブをはじめ、必要な備品を買うためだ。

「宗、こつちこつち！」

「気持ちは分かるけどテンション高すぎや。少し抑えろ」

「え？ ああ、悪い」

周りからの視線を感じて、遥斗は口を閉じた。こんなところで目
立って得することは何もない。

目の前に並べられているグローブを眺めながら、宗が来るのを待
つ。これらの値段は、どれも1万円を越えている。遥斗は軽く驚い
た。

宗にお年玉の残りを全て持って来いと言われたため、遥斗の財布
には3万円近くが入っているが、これだけグローブが高いからだろ
う。

「遥斗、何でそんなん見てんねん」

「そんなんって……。今日はクラブ買いに来たんやろ？」

「ああ。でもそれは軟式用や。硬式用はこつち」

そう言うと宗は、反対側の棚を見る。確かに、今遥斗が見ている
棚の上には軟式用という文字が書かれていた。

彼が後ろを見ると、そこにも多くのグローブが置かれていた。棚
の上には硬式用という文字も書かれている。

しかし遥斗は、あることに気がついた。

「宗、値段が……」

「値段？ ああ、これね。3万5千円か……確かに高いな。ま、こ
こは品揃えが良いから値段くらいは……」

「そうじゃねえよ。これだけじゃない」遙斗はそう言うと、宗が評価を下したグローブの隣に置かれているグローブを指差した。それは2万8千円と表示されている。「あれもこれも全部高いって」「硬式用グラブなんてこんなもんや。質によって上下するけどな」「そ、そうなん……?」

「ああ。オーダーなんてヤバいぞ? 高いのやったら7万くらいする」

そう言って笑う宗の横で、遙斗は少しへこんでいた。事前に調査していなかった彼は、もつと安いと思っていたのだ。

彼の所持金は3万円弱。もちろんグローブに全部使うわけにはいかないの、買えるものはある程度限られてくる。

「宗、言いくいんやけどさ……俺、今日3万しか持ってきてない」「そっか。じゃあ……これとかどうや? グラブなんて好みの問題やからさ、安くても気に入るのがあると思うで」

宗はそう言うと、黒色のグローブを遙斗に差し出してきた。

早速、遙斗は渡されたグローブを左手にはめてみる。あまり多くのグローブを使ったことがないが、比較的しっくりくるように感じた。

値段を見てみると、2万2千円と記されていた。やはり高いが他のものに比べると安く、十分買える値段だった。

「どう?」宗が遙斗の様子を伺うように口を開く。

「うん、いいよ。しっくりくる」

「よし。まあ、他のも一応確かめてみてくれ」

宗に言われて、遙斗は一応全てのグローブ 余裕で買えないもの以外だが をはめてみた。しかし、最初のものより良いものは無かった。

「決めた。これにする」

「優柔不断じゃなくて良かったわ。よし、さっさと終わらせよう」

そう言うと宗は違うコーナーへと向かう。他にも買わなければならないものがあるからだ。

グローブ以外に必要な備品も全て選び終わりレジで会計を済ませたのは、彼らが店に来てから約1時間が経った頃だった。この1時間で、遥斗の財布はかなり軽くなった。

しかし、スパイクなど宗が奢ってくれたものも多い。会計後の彼曰わく、遥斗が野球をするのが嬉しいからだそうだ。

「今日はありがとうな。スパイクとかの金も払ってくれて」

「気にすんなって。その代わり手入れは怠んなよ。さっき言った通りに、使った日はそのままにしとくな」

「分かった」

遥斗は宗から、グローブとスパイクにする手入れの仕方を教わっていた。さすがに、そのための道具は遥斗自身が金を払った。

「ところでさ、水原とはどうなん？」

「なっ……いきなりなんやねん」

いきなり宗がそんなことを言ったので、遥斗の声は少し裏返ってしまった。

「水原は野球好きやし、うまくいけば高校生活中に付き合えるんちゃうか」

「バーカ、無理や。あいつは俺のこと幼なじみとしか見てないし」

「今は、やる？ 3年もあつたら変わるわ。私を甲子園に連れていって……みたいな」

ニヤニヤしながら言う宗を、遥斗は睨みつけるが、あながち冗談でもないような気がした。

もしかしたら、と期待してしまっている自分がいることに、遥斗は気づいた。

「ま、安藤に負けんようにな。あいつ多分上手いぞ」

「当たり前やろ」

遥斗はそう言いながら、地面に落ちている小石を蹴る。小石は排水溝へ一発で入った。

6 - 1 . 紅白戦 (1)

「亮司、何cmやった？」

「188」

中学生時代からの親友である千尾啓太に答えると同時に、瀬高亮司は持っていた紙を彼に見せた。そこには身長など、今日の身体測定で出た結果が全て記録されている。

「マジや……。まだ俺と30cm以上も差があるやんけ」

「妬むな妬むな。背が高いつても良いことばかりやないんやぞ？」

「例えば？」

「目立ちすぎたり、ストライクゾーンが広がったり」

「贅沢な悩みだこと……」

落ち込む啓太を慰めながら歩いていると、前方から知っている顔がいくつか並んで歩いてきた。

亮司はすぐに、同じ1年生の野球部員だということを思い出した。確か、名前は神山遙斗、吉田宗、千葉優希だったはずだ。3人も大和中学出身なので、中学からの友人なのだろう。

入部して3日も経っている。最初の日は9人しか来てなかったが、今では19人の1年生が入部していた。しかし、3日も経つとほとんどの部員は顔と名前が一致していた。次の日曜日には、早速春季大会の一次戦が始まる。

向こうもこちらに気付いたのか、優希が先に口を開いた。

「よっ。瀬高と千尾やつけ。お前らも全部終わったんか」

「ああ。”も”ってことはお前らも終わったんやな。早く提出して部活行こうぜ」

啓太が先ほど亮司が渡した紙をヒラヒラさせながら言うと、他の4人も頷いた。

指定された教室の提出ボックスなるものに、記録用紙を全員が提出すると、彼らは急いで、各々のカバンが置いてある自分の教室に

向かった。

遥斗と宗がA組、亮司がB組、啓太がD組で優希がF組だ。教室に着いた亮司は、急いでカバンからユニフォームを取り出す。身体測定をすぐに終わらせたので、教室には誰もいない。少し寂しい気持ちもあつたが、早く着替えるには最高の環境だった。

着替え終わった亮司がカバンを持って教室を出ると、ちょうど隣のA組から遥斗と宗が出てきたところだった。

「千尾と優希は、まだ？」

「ああ」

宗の問いに亮司が答えたとはほぼ同時に、それぞれの教室から啓太と優希が出てきた。2人とも、もちろんユニフォームを着ている。

「早く行こうぜ。先輩が来る」

「分かってる。多分あと15分くらいでグラウンドに出てくると思うので」

宗の言葉に、5人は自然と走るスピードが上がった。

亮司らがグラウンドに出ると、既に3人の1年生が来ていた。彼らは、グラウンドに白線を引いている。

整備もされ、綺麗なグラウンドに2本の白線が引かれている。試合前の光景だ。

午前中に身体測定があり、午後からも授業はないのだが、3年生は学年集会があるため練習に参加できない。そのため、綾北野球部では毎年、この日に1年生対2年生の紅白戦を行っていた。

亮司らが急いでいたのは、試合の準備をしなければいけなかったからである。やはり、それはいつもの練習前に行く準備よりも時間がかかってしまう。

亮司らの後にも次々と1年生が集まっていき、全員で効率よく作業を進めたため、亮司が思っていたよりも早くに準備は終了した。

「おっ、いいねえ」

「去年の俺らよりも綺麗やな」

亮司たち1年生が準備運動をしていると、ソロソロと2年生が校

舎から出てきた。

彼らに挨拶をすると、体操もある程度終えていた亮司たちは円陣を組んだ。まとめ役は、A組の宗になっている。

全員を見渡して、宗が口を開いた。

「オーダーは俺が考えた。あくまでも独断と偏見やから……意見があつたら言ってくれよ」

そう言つて宗がメンバー表をみんなに見せた。

? 捕 吉田 宗
? 中 千葉優希
? 三 豊田 一
? 一 瀬高亮司
? 左 田中 聡
? 投 安藤克也
? 右 松田賢之
? 二 千尾啓太
? 遊 市橋政哉

「良いんじゃないか? まっ、どうせほとんどが軟式上がりで大差無いやろっし」

「ああ。自分を先頭打者に置くことは自信あるってことやろ。今日の指揮は任せる。で、良いよな?」

最初に言つた安藤克也の言葉に豊田一が頷きながら同意し、他の1年にも促した。彼ら2人は中学時代から硬式で野球をやっていたらしく、遥斗のような素人が見ても上手いのが分かる。

遥斗は、自分がスターティングメンバーに入っていないが反抗しなかつた。まだ実力が足りないのは自覚している。

「分かつた。向こうも3年がいらない今日はチャンスや。ベストメン

バーで来ると思う。安藤、無失点で頼む」

そう言つて、宗は克也を見る。克也も口は笑っているが、目は真剣な顔で少し頷いた。

「遥斗、いいか？」

円陣が解かれた後、宗が遥斗の前にやってきた。遥斗は、飲んでいたスポーツドリンクを口から離して、宗を見る。

「当たり前のことやけど、この試合は全員が出る。せやけど遥斗はまだ全然分かんやろ？」

「ああ」

「やから、代走で使う。分かるな？ ピンチランナーや。今お前が出てもアピールの面では逆効果やし……」

「せやろな。初心者丸出しになると思う」

苦笑いしながら遥斗は答える。野球部に入ったとはいえ、何回かキャッチボールをしたくらいで、ほとんどが練習の手伝いだ。そんな状態では、投球も打撃もままならないだろう。

すると、宗が再び口を開いた。

「1つだけ、この試合を見る中でやってもらいたいことがある」

「何？ スコアは書けへんで」

「安心しろ。違う……。ランナーのリードの仕方を見といてほしい。形をずっと見て、遥斗のリードがきこちなくないようにしてほしい」
「なるほど、分かった。努力はする」

遥斗が笑顔を作つて答えたのとほとんど同時に、審判を務める西村雄吾監督がグラウンドに現れた。

「集合」という西村の声で、ホームベースを挟んで1年・2年がそれぞれ並ぶ。1塁側が2年、3塁側が1年だ。

何人かの選手は並ぶときに、ベンチからグローブを持ってきていたため、遥斗も持つてこようとした。だが、持ってきているのがスタメンだけだということに気づいたので、ベンチに置いておいた。

遥斗にとっては初めての情景だったので、ドキドキしながら並んでいた。

「では、今から紅白戦を開始する。イニングは7回まで。その他は通常と同様に行く。小沢と吉田、先攻後攻を決める」

西村がそう言うと、2年生のキャプテン的存在である小沢昇平と、宗がそれぞれ1歩前に出た。

2人がジャンケンをした結果、宗が勝った。彼は後攻を選択し、後ろに下がった。

「よし、じゃあ2年が先攻で始める。礼！」

「お願いします！」

西村の掛け声と同時に全員が頭を下げる。遥斗も見様見真似で頭を下げた。そして、スタメンに選ばれた9人がグラウンドへと走っていく。

遥斗はそのとき初めて、何故グローブを持って並んでいたのか分かった。後攻になっても、ベンチに戻らなくて良かったためなのだろう。持ってこなくて良かったと思いつつながら、遥斗はベンチへと向かった。

【両チーム スターティングメンバー】

先攻 2年生

順	位置	名前
1	二塁	岸本俊輔
2	左翼	道淵 賢
3	遊撃	林 真史
4	中堅	小沢昇平
5	一塁	河北 亮
6	三塁	高野翔馬
7	捕手	小畑 潤
8	右翼	幸本星二
9	投手	藤澤翔也

後攻 1年生

順位 位置 名前

- | | | |
|---|----|------|
| 1 | 捕手 | 吉田 宗 |
| 2 | 中堅 | 千葉優希 |
| 3 | 三塁 | 豊田 一 |
| 4 | 一塁 | 瀬高亮司 |
| 5 | 左翼 | 田中 聡 |
| 6 | 投手 | 安藤克也 |
| 7 | 右翼 | 松田賢之 |
| 8 | 二塁 | 千尾啓太 |
| 9 | 遊撃 | 市橋政哉 |

ロージンバックを右手で軽く弾ませると、克也はホームベースの先で座っている宗をジッと見た。

克也は、今日の先発投手は遙斗だと思っていた。彼と吉田は仲が良さそうだったからだ。

だからといって、自分の投球が遙斗に負けているとは思わない。彼がすぐにノックアウトされて、自分が登板するのだろうと思っていた。

「プレイ！」

西村の音がグラウンドに響く。

どういうつもりや、吉田。

克也は右手でボールを握り、グローブと一緒に胸の前で構える。宗からストレーターのサインが出されたのを確認すると、彼は大きく振りかぶった。

克也を火だるまにしようと宗は思っているのだろうか。しかし、そう簡単に打たれるわけにはいかない。

負けず嫌いな克也にとっては、この試合も勝ちたい。そのため、

軟式上がりの捕手である吉田の方が足手まといになる可能性も充分にあるのだ。

俺をリードできるか？

足を上げると、流れるようにそのまま前に踏み出す。

残念やけど、無理や

今の彼には、バッターボックスに立つ岸本俊輔すら見えていなかった。

克也の手から離れたボールは、ホームベースの少し手前でワンバウンドした。ショートバウンドとなったボールを、宗が膝を地面につき、プロテクターで止める。

当然ながら西村の手は拳がらない。

「ボール！」

「……止めたか」

予想外の出来事に、克也は思わず呟いた。宗の反射神経を確認するために、わざとワンバウンドするボールを投げたのだが、まさか体を使って止めるとは思わなかった。

今はランナーもいないためボールが後ろに逸れても、それほど問題は無い。しかし彼はわざわざ体を使ってボールを止めた。

気に食わへんな……

立ち上がり、ユニフォームでボールについた砂を拭いている宗を見ながら、克也は思った。

「緊張せんと、落ち着いてな」

拭き終わったのか、宗がそう言いながらボールを克也に投げ返した。まるで宗にコントロールされているような感じがし、克也は思わず唾を呑み込んだ。

こんなことではダメだ。あいつのリードは無視する、と心の中で言い聞かせる。

こういう感覚は初めてだ。中学時代の捕手とは気が合った。どんな捕手でも、彼にはかなわないだろう。それは目の前にいる宗も同じだと克也は信じていた。

次は内角高めのストリートにする。バッターボックスの俊輔はバットを長めに持っているため、打ちにくいコースだ。それに、先ほどのボールで低めに目を向けさせている。

しかし、決断した彼が一応宗のサインを見ると、そこには信じられない光景があった。

「外角低めやと……？」

宗からのサインは、克也が考えていたのと全く逆、外角低めストリートだった。克也はとりあえず頷くと、振りかぶった。

お前のリードには……

克也は左足を上げる。それを前に出すとともに、右腕を後ろに引く。

従わねえよ！

目標地点は内角高め。そこ目掛けて、克也は思いっきり腕を振った。

ボールは彼が狙ったところへ真っ直ぐ向かっていく。そして岸本のバットが動き出す。

岸本が間違いなく空振りすると思え、克也がガッツポーズを作ろうとしたとき、甲高い金属音が鳴り響いた。

「セカンド！」

克也は慌てて声を出す。打球は一二塁間を抜けようとしていた。克也はなんとか、セカンドを守る千尾が走り出すのを目で捉えた。

6 - 2 ・紅白戦（2）

打球が自分の所へ飛んできたのに気づいた啓太は、慌てて左へ走り出した。

なんとかギリギリで打球の正面に回り込み、グローブを下ろす。しかし、ボールは彼のグローブに入らなかった。

弾いた。彼がそう気づいたときには、すぐに周りから声が聞こえてきた。

「啓太！ 後ろや！」

一番近くにいる亮司の声が聞こえる。それを聞いた啓太は、慌てて後ろを見た。幸い、ボールは数メートル先にある。

急いでそれを取りに行き、グローブは使わずに右手でそのまま拾う。

「千尾、投げろ！」

今度は安藤の声か。元々1塁へ投げるつもりだった啓太は、すぐにファーストの亮司へ体を向けて送球した。

ボールは亮司の胸からは少し逸れたが、彼が動かずに捕れる範囲だった。

「アウト！」

西村のジャッジが聞こえる。本当に間一髪だった。1塁ベースを駆け抜けた俊輔が、悔しそうにしている。

硬球で生まれて初めて受けた生の打球。緊張と経験不足により弾いてしまったが、アウトを取れたことは喜ぶことだった。

「ドンマイ」

アウトになったため、俊輔がトボトボとベンチに向かって歩いてみると、ベンチの近くで小畑潤とキャッチボールをしている藤澤翔也が声をかけてきた。彼らは今日の先発バッテリーだ。

「ああ、ホンマ最悪や。打ち損じた」

「どう？ あいつのボールは」

「アピールで言ってた球の重さは、1年にしては良い方かな。多分お前と同じか、ちよつと上くらい」

先ほど打った感覚を思い出しながら俊輔は答えた。

「それで何で打てへんかったんや。好きなコースやったやろ？」

「好きどころやない。小学生の頃から大好物や」

「じゃあ何でやねん」

「さあな。俺にも分からん」

苦笑いしながらそう言くと、俊輔はベンチへと戻った。

打席には2番打者の道淵賢が入っている。彼は俊輔らと同じ、大和中学出身だ。

「吉田、あいつの苦手も昔と変わってないぜ……。お前なら分かるやろ」

聞こえるはずもない、捕手の宗に向けて呟く。何故、彼は俊輔が内角高めを好きだと知っていながら投げさせたのか。俊輔は全く理解出来ないでいた。宗のことだから絶対に甘い球は投げさせないと思ってしまった分、詰まらされてしまった。

どちらにせよ次は打つ。俊輔はベンチに座りながら、マウンド上の克也を見つめた。

「アウト！」

西村の声が聞こえる。これで2アウトだ。

2番打者の賢はセンターへのライナーだった。完全に真芯で捉えられたが、優希の真正面だったため打ち取ることができた。

「ナイスピッチ！ 2アウトや！」

マスクを外して、宗が叫ぶ。そして内野手は後ろを向き、外野手とアウトカウントの確認をする。

キャッチャーが構えた所と逆のボール　　いわゆる逆球　　を真

芯で捉えられた克也は複雑な心境だったが、とりあえず周りに合わせようとした。

「吉田、外野はどうする？」

「え？ ああ、そうやな。外野はバツク！ 2アウトや、長打警戒！」

サードを守る一言葉の言葉を聞き、宗は慌てて叫んだ。外野手は全員5、6歩だけ後ろに下がる。

彼も緊張しているのだろうか。初めてバッテリーを組む克也には全く分からなかったが、今の様子を見るとそれは十分考えられることだ。それに、おそらく宗にとって硬球で試合をするのはこれが初めてだろう。

その緊張している捕手にリードされているということが、さらに克也を苛立たせた。

3番打者の林真史が右バッターボックスに入る。身長は185cmくらいあるだろうか。その威圧感は、それまでの2人と比べても凄まじかった。

宗のサインは内角低めのカーブ。しかし、克也はグローブの中でストレートの握りを作った。

お前のサインを無視しても……

そのまま克也は振りかぶる。外角高めへ渾身のストレートを投げ込むつもりだ。

もしかしたら宗は捕れないかもしれない。球種までサインと違えば、それは間違いないだろう。

俺は2アウト取れてんだよ！

克也の右手からボールが離れる。綺麗にバックスピンがかかったそれは、宗が構える所とは全然違うところへと向かう。

投げ終わった体勢から、真史のバットが動き出したのが克也には見えた。刹那、甲高い金属音がグラウンドに鳴り響いた。

「レフト！」

おそらく、レフトを守る田中聡以外の全選手がそう叫んだ。しか

し無情にも打球は、後退していた聡の頭を、低めのライナーで越えていく。

レフトが狭く作られている綾北のグラウンドに助けられ、打球はすぐに壁に跳ね返る。しかし、聡からの返球がショートの手橋政哉に返ったときには、2塁ベース上に真史の姿があった。

「タイム！」

西村が叫び、マスクを取った宗が小走りで克也に向かってきた。おそらく宗がタイムを要求したのだろう。

内野陣もそれに合わせてマウンドへと集まってくる。克也は誰にも聞こえないくらい小さな音で、舌打ちをした。

「何だよ」

「サインの確認や。今のはカーブのサインやったぞ。まあ終わったことはしゃあないけどな」

不機嫌な克也を真正面から見て宗が言う。わざとだということには、やはり気付かないのだろうか。

「何やねんお前ら。これが初バッテリーってのも分かるけどさ、もつと息合わせろ」

「何やと？」

一の言葉に、克也は彼を睨みつけた。まあまあ、と亮司がなだめる。

「瀬高の言うとおりや、喧嘩はやめとけ。安藤、コントロールは良くないけど、ボールは走ってるから気にすんな。問題は次のバッターや。小沢さんはチームでも3番を打ってるバッターやから要注意やと思う。安藤、甘い球だけは投げるなよ？ とにかく2アウトやあと1人、いこうぜ」

宗はそう言って戻っていった。他の内野陣も自分たちのポジションへと戻っていく。

克也はロージンバックを軽くはたいた。

相手は1つ年上なのだ。これまで打たれているのも、克也がリードを無視しているからではない。どこに投げて、どうせ打たれる

だろう。

そう判断した克也は、今までとは違い宗のリードに従おうと決めた。どうせ打たれるなら、コントロールの良さを評価してもらえ方がいい。

「お願いします！」

右バッターボックスに入った昇平が、ヘルメットの鍔を軽く上げながら言った。こういう礼儀正しいところが、レギュラーである理由の1つであつたりするのだろうか。

宗からのサインを確認して、克也はセットポジションに入った。この試合で初めてのセットポジションだ。首を右に向けてランナーを牽制しながら左足を上げる。あとはいつもと同じように腕を回し、ボールを放った。

内角の少し甘い球だったが、昇平はバットを振らず、ボールを見送った。キャッチャーミットにボールが収まり、乾いた音がグラウンドに響く。

「ストライク！」

西村が腕を上げ、ストライクを宣告する。

宗は立ち上がり、目でランナーを牽制しながら、克也にボールを返した。彼が構えた所にボールが来たからか、吉田がボールを捕ったとき、少し頷いたように克也は見えた。

克也へ返されるボールを見ながら、小沢昇平は先ほどの投球を頭の中で再生した。比較的甘い球だったが、彼は全く打とうとしなかった。苦手なコースだったからだ。

1年生のボールなので何でも打てば良いのかもしれないが、明後日には春季大会が控えている。ここで自分のスイングを崩すのは避けなかった。

バッテリーのサイン交換が終了したのか、克也がもう足を上げている。そしてすぐに第2球目が投じられた。

低い……

昇平の判断通り、ボールはホームベースの手前でワンバウンドした。キャッチャーの宗が体を張ってボールを止める。もちろん2塁ランナーの真史は動けない。

今のはカーブだろうか。ボールのキレは、1年生としては十分だと昇平は感じた。

第3球目もカーブだった。これも外角に外れる。カウントは1ストライク 2ボールになった。

次はストレートだろうか。1球目に見たストレートの軌道を、再び頭の中で再生する。打てない球では決してない。

セットポジションから克也が第4球目を投じた。

ストレート、もーらい！

昇平は口元を緩めると、高めのボール目掛けフルスイングした。

真芯で捉えた打球は、3塁側のファウルグラウンドをライナーで飛んでいった。そのまま、グラウンドに植えられた木に直撃する。

「ファウル！」

西村が両手を広げてコールする。打球の行方を見ていた昇平は、そのコールを聞いて舌打ちをした。彼の感覚的にはバックスクリーンへ一直線に打球が飛んでいるはずだった。もちろん、綾北のグラ

ウンドにバックスクリーンは無いが。

「昇平、肩に力入ってるぞ！」

「シングルでいいから！ 力抜いて！」

ベンチから声が聞こえる。力が入りすぎているのは、昇平自身も感じたことだ。バッターボックスを外して、2回素振りをする。いつものスイングを取り戻し、再びバッターボックスに入った。

彼が構えた瞬間、既にセットポジションに入っていた克也の左足が上がった。もう投げなのか、と昇平が思ったときには、克也の手からボールが離れていた。

打ちにいった昇平だが、上げた左足を地面に下ろしたところでやめた。ボールが低い、と判断したのだ。

低い、ボー……

ボールがホップしたと感じたのはそのときだった。しかも遅い。既にボールはキャッチャーミットの中に収まっていた。

「ストライク！ バッターアウト！」

西村の声が聞こえる。その後、2年生側のベンチからはため息、1年生側のベンチからは歓声が聞こえた。

小さくガッツポーズを作った克也が、マウンドから降りていくのが見える。彼の周りには、野手陣が喜びながら集まっていた。

それを見ながら、昇平はバッターボックスで立ち尽くしていた。

「気にすんな。ホンマにギリギリやったわ。守備、頼むで」

キャッチャー道具一式を体に付けた潤が、昇平のグローブを差し出しながら慰めてきた。潤の隣には、スタメンに入っていない伊藤和成がいる。ヘルメットを受け取りに来たのだろう。

「ああ、サンキュー」

昇平は潤からグローブを受け取り、和成にヘルメットを渡す。一度だけため息をつく、彼は自分のポジションであるセンターへと走った。

本来なら、あのボールは見逃すようなものではない。だが、その前のボールが遅いストレートだったため、もっと沈むと判断したの

だ。

しかし実際は、それよりも10km/h近く速いボールで、ノビもあった。あのバッテリーにしてやられたということになる。

1年生相手だと思いきや油断していると、足元をすくわれるだろう。

昇平が見逃し三振をしたのは、高校に入って初めてのことだった。

「昇平、いくぞ！」

レフトを守る賢の声が聞こえ、昇平は慌てて我に返った。今は外野手間でのボール回しの最中だ。

賢から受け取ったボールを、今度はライトを守る星二に投げる。

肩の調子は良さそうだ。

「ラスト！ ボールバック！」

キャッチャーの潤が声を張る。ラストとというのは、投球練習のことだ。

昇平は、再び賢から回ってきたボールを、今度は自分たちのベンチへと軽く投げた。

1番打者は、さっきのキャッチャーのようだ。確か名前は吉田宗と聞いたはずだ。

「お手並み拝見……」

翔也が投球モーションに入る。滑らかな動きからボールが投げられた。

すぐに、宗のバットが動きだしたのが昇平には分かった。そして、甲高い金属音がグラウンドに響く。打球は三遊間を抜けて、レフト前のヒットとなった。

「そうか、そういうことか……」

苦笑いを浮かべながら昇平は呟いた。なかなか認めたくないことだが、この試合は油断して掛ければ勝てないかもしれないということが、彼にはようやく分かった。

2番の優希が送りバントを決めた。1死2塁というチャンスなり、

一はバッターボックスへと向かう。

1、2番が軟式出身のコンビなので、二死走者無しという場面になると彼は予想していたのだが、嬉しい誤算になった。

宗のバッティングはなかなか良いものだった。おそらく中学でも上位打線を打っていたのだろう。硬球の打ち方もできていて、とても軟式上がりとは思えない。

優希のバントも同様だ。一が見た感じでは、マウンド上の翔也は本格派の投手ではないが、それでもそのストレートは120km/hを軽く越えている。そのボールに対して、初球がファウルだったとはいえ、2球目でバントを決めたというのは素晴らしい。

「じゃ、俺の番やな……」

呟きながら、バッターボックスに入る。足元を均して、ピッチャーの翔也を睨みつけると、気持ちが静まってきた。

彼にとつて、この試合は久しぶりの実戦となる。さらに、相手は上級生だ。若干の不安はある。

しかし同時に、一は野手で唯一の硬式出身者だ。軟式出身者が作ったチャンスを潰すわけにはいかない。

ふう、と一息つくくと、彼は打つ構えに入った。

翔也の投球フォームは正面から見ると、かなり綺麗なものだった。体を柔らかく使うことができている。

そのままの流れで投じられたボールが、キャッチャーである潤のミットに収まる。スピードはやはり120km/h前後といったところだろう。

「ストライク！」

西村の腕が拳がる。おそらく、コーナーギリギリのはずだ。コントロールもある程度高いのかもしれない。

潤からの返球を受け取った翔也は、すぐに投球モーションへと移った。テンポも早いのか、と一は顔を歪める。

そして投じられた2球目はスライダーだった。またもやギリギリのコースだったが、西村の腕は拳がらない。一からすると、見送っ

たというよりも、手が出なかつたという表現に近いので、ラッキーだった。

3球目もスライダーで、2球目とほぼ同じコースだった。これもボールとなり、カウントは1ストライク 2ボールになった。

翔也が、首を少しだけ傾げた。ギリギリのコースに投げて、2球連続ボールになったからだろう。

ストレート……か？

翔也の様子を見て、一はそう思った。

ストレートなら打てると、一は思っていた。スライダーのキレは、やはりレベルの違いを見せつけられているが、ストレートはそうでもない。

幸い、1球目にストレートを見ている。

もし、スライダーなら仕方ない。空振りしても、まだ2ストライクだ。

さあ来い、直球！

翔也がモーションに入り、彼の右腕から4球目が投じられた。

ボールは先ほどよりも勢いがある。左足を踏み込ませながら、一は口元を緩ませた。

よし……ストレート！

一はバットの真芯でボールを捉えた。打球は見事なピッチャー返しとなり、痛烈なゴロが翔也の横へ飛んでいく。

セカンドの俊輔とショートの実史が反応良く動き出した。さらに、打球に近い真史が飛び込む。しかし、打球はそのグローブを掠めて、二遊間も抜けていった。それを見た一は1塁ベースを駆け抜けずに、回り込んで踏んだ。

彼が打球の場所を確認すると、ちょうどセンターの昇平が、定位置の少し前で捕ったところだった。

そして2塁ランナーの宗を見ると、彼はとつくに3塁ベースを蹴って、ホームベースへ向かって走っていた。

ランナーコーチがグルグルと腕を回しているのを見て、宗は3塁ベースを蹴ると、迷わずホームベースへ向かって走った。

視線を左に向けて打球を確認すると、それはちょうど二遊間を抜けたところだった。余裕で生還できるだろう。

しかし、宗は顔をホームベースへと戻すと、これまで通り全力で走りつづけた。いくら余裕だからといって、力を抜く必要はない。それに、遥斗が自分たちの走りを参考にするのだ。下手な走塁はできない。

もし、先制点をこのまま取ることができれば、この試合で勝つ可能性も見えてくる。

上級生から点を奪ったことで1年生チームには勢いが生まれ、下級生に点を許したことで2年生チームには焦りが生まれる。

野球において、初回の攻防というのはかなり重要だ。試合の流れにおいて、およそ四割を占めるといっても過言ではない。それは、この試合でも同じだった。

宗がホームベースまで残り10mという所まで走ったとき、急にごよめきが聞こえた。刹那、潤のミットにボールが収まった。

「なっ……」

慌てて宗は回り込もうとしたが、彼がベースに触れる前に、潤のミットが宗に触れた。

「アウト！」

倒れ込みながら、宗はぼんやりとその声を聞いていた。

アウト？

意味が分からなかった。余裕で生還できたはずなのに、何故自分はアウトになっているのだろうか。

「吉田、すまん……。まさか小沢さんの肩があんなに凄いとはいわなかった……」

慌てて駆け寄ってきた、3塁ランナーコーチの杉山正和が申し訳なさそうに言った。宗は、ゆっくりと立ち上がり首を振る。

「あれは仕方ないわ。杉山のせいじゃない……。気にせんと戻れ」
正和には何の罪も無い。おそらく、センターの昇平が強肩を見せつけたのだろうが、宗もそれは予想できなかった。

彼はベンチへと戻り、すぐにキャッチャー道具を装着しようと、その前でしゃがみこんだ。

「吉田、ちよつといいか？」

宗がレガースを足に装着しようとする、いつの間にか隣に立っていた克也が、不意に宗に言った。宗は顔だけを上に向ける。

「ああ。何や？」

「少し、教えておきたいことがある。立ってくれ」

疑問に思いながらも、宗はレガースを地面に置いて立ち上がった。克也の表情は、いつになく真剣だった。

7-1・アクシデント(1)

「ストライク、バッターアウト！ チェンジ！」

瀬高亮司を三振に打ち取り、藤澤翔也はロージンバッグを拾ってベンチへと戻った。

ストレートを1球だけファウルにされたが、スライダーにはバットを当てさせなかった。

「全く……。化け物かよ」

自分のスपोर्टドリンクを一口飲みながら、翔也は小沢昇平を見て思わず呟いた。

昨年の紅白戦でも強肩を見せ、いきなりレギュラーを奪った昇平だが、やはり何度見ても、彼の肩は凄いと翔也は思う。投手である自分も、あのようなボールを投げることができたら、どんなに良いことが。

とはいえ彼は、自分が持つ2種類のスライダーに絶対的な自信を持っていた。

「お疲れ」

マネージャーであり、翔也の彼女でもある野々宮真弓が笑顔を向けてきた。彼女はこの試合のスコアを付けている。

「ああ。吉田と豊田には打たれたけどな……」

「翔也は、後半ほど調子良いタイプやから大丈夫やって」

「サンキュー。良い慰めや」

笑いながらそう言い、スपोर्टドリンクが入ったペットボトルをベンチ内の椅子に置くと、彼は隣に昇平が立っていることに気がついた。

「ナイスプレー。助かったわ」

「翔也こそナイスピッチ。でもお前、油断してたんちゃうけ？ あいつら、1年やと思って油断してたら足下掬われんぞ」

真剣な表情で昇平が言う。翔也はそれに対して頷いた。

実際に打席に立った昇平の感想だ。かなりの説得力がある。それに、翔也自身も打たれたことにより十分理解しているつもりだった。「ま、頑張ってくれよ。野々宮もスコアお疲れさん」

昇平は翔也と真弓にそう言つと、バットを持ってベンチから出て行つた。素振りをするのだろう。よっぽど先ほどの三振が悔しかったようだ。

それにしても、俺が油断してる……ねえ

昇平の言葉を思い出し、翔也は思わず苦笑いした。

確かに、まだ縦のスライダーを投げていないとはいえ、彼は油断しているつもりはなかった。縦のスライダーを序盤に投げないのはいつものことだ。つまり、さっきのは十分本気だったのだ。

悔しいのは、お前だけじゃねえよ。昇平

彼はグローブを持つと、近くにいた林真史に声を掛けた。

「悪い、ちよつとキャッチボールに付き合ってくれ」

バッターボックスの横で素振りをしていた河北亮は、安藤克也の投球練習が終了したのを確認して、バッターボックスに入った。

「お願いします！」

ヘルメットの鍔を触り、審判と、投手である克也に言う。おそろく実際に聞こえている発音は「しゃーっす」なのだろうが、気にしない。

克也が、吉田宗のサインに頷いて振りかぶる。

彼の、今まで打席に立った4人の打者に対する初球は、全てストレートだった。全体的にもストレートの方が圧倒的に多い。この亮の打席でも、それだけを待っていていいだろう。

そして、克也の右腕からボールが放たれる。しかし、ボールは真つ直ぐではなく途中で曲がった。

「なっ……!?!」

予想もしなかった変化球に反応できず、亮のバットは空をきる。

まさか初球からカーブでくるとは、亮はまったく思っていなかったのだ。

「ストライク！」

「河北！ ボールをよく見る！」

「亮、スイングが乱れてるぞ！」

西村のコールと共に、ベンチからも声が聞こえる。おそらく横から見ると、バットとボールにかなりの開きがあったのが分かったのだろう。

いくら変化球が苦手な亮とはいえ、1年生の変化球を打てないようではレギュラーの位置すら危うくなってしまう。そんなことは百も承知だ。

亮は先ほどよりも、バットを少し短めに握った。キャッチャーである宗にバレないように、さりげなくだ。

2球目を投げるために振りかぶった克也を、亮は真っ直ぐ見つめる。さっきの空振りを見た後だ。次も変化球だろう。

次は打ってやるよ……直球でも変化球でもな！

克也の腕からボールが離れ、それに合わせて亮も、右足の方へ引いていた左足を前に踏み出す。

やはりボールに球威は無い。しかしその直後、バットを動かさそうとした亮の目には信じられない光景が映った。

回転が無いやと!?

ボールはベースの手前でワンバウンドし、キャッチャーの宗がプロテクターを使ってそれを止める。亮も、なんとかバットを止めた。「ボール！」

宗がナイスボール、と言いながらボールを克也へ投げる。その後、亮は宗に声を掛けた。自分の目に映ったあり得ない光景が、本当だったのかどうか確かめる必要がある。

「おい、吉田」

「はい」

宗がマスクを外す。彼はニヤニヤと笑っていた。おそらく、これ

から何を言われるかも分かっているのだろう。

しかしそう思いつつも、亮は聞いてしまっていた。

「今のボール、もしかして……」

「ええ、ナックルボールです。それも完璧な」

宗が、勝ち誇ったような顔をして言った。

再びマスクを被った宗は、すぐにサインを出した。要求したのは直球だ。

入学式直後に神山遥斗と行った練習見学のときに、亮が変化球を苦手としていることを知った。しかしいくら苦手とはいえ、高校に入学して間もない1年生の変化球は打てるだろう。そのための「秘密兵器」だ。

さっきのボールを見せただけで、今は直球でも打ち取ることができると宗は確信していた。

「吉田、今のは本当に……ナックルボールなのか？」

宗の耳元で西村が訊ねた。彼が話しかけてきたことに彼は少し驚いたが、それを態度に出さずに頷いた。

西村は何かを考え込んでいるのか、うーん、と呟いた。ナックルという珍しいボールを見て驚いているのだろう。

サインを出した宗ですら、ナックルボールをキャッチャーとして受けたことはなかった。むしろ、生で見るのもこれが初めてのことだった。

ワンバウンドしたので、彼は体を張って止めたのだが、かなり怖かった。強力な武器となるボールだが、キャッチャーが捕れないと意味がない。いつかは恐怖心を完全に無くさなければいけないと宗は思った。

しかし、それは今ではない。この試合で克也がナックルをあまり使えないことも、宗は分かっていた。克也に言われているからだ。

宗がタッチアウトになった後に克也が話しかけてきたとき、彼は

嫌な予感がした。彼が自分に対して良い印象を持っていないことは、宗も分かっている。リードにケチをつけられるのだろうと思った。

しかし、真剣な顔の克也からは予想外の言葉が出た。

「俺の球種、覚えてるか」

「球種？ ああ、試合前に確認したからな。スライダーとカーブやる？」

「試合前に確認した球種はな」

そう言っつて、彼は少し勝ち誇ったような顔をした。そしておもむるに、近くにあつたボールを手にする。

彼はそれを右手の中でしたらうと転がすと、変な握りをして宗に見せた。

ん？ その握りはまさか……

その握りは直球のものとは違つた。親指と小指でボールを真横から挟み、残りの指を上から突き立てている。

「おい、安藤。それってまさか……」

「ああ、ナツクルボールや」

そう言いながら、克也は突き立てている指でボールを弾いた。宗は慌ててそれを左手で捕つた。

「あつぶねえ……」

「良い反応や。ま、というわけでよろしく頼むわ。せやな、とりあえず今日のナツクルのサインは、2つ目のときに3本で」

「サインまで考えたんか……」

宗は苦笑いしながら、勝手に話を進める克也にボールを返した。

「そりゃあお前、ノーサインでナツクルなんか捕れへんやろ？」

「ノーサインじゃなくても無理やわ。ナツクルなんか生で見たことないねんぞ？」

「大丈夫や。さつき確認したけど、お前は反射神経良いみたいやから」

褒められているのだろう。しかし宗は、何故このタイミングで克也がナツクルのことを話したのか分からなかつた。何故彼は、試合

が始まる前に教えてくれなかったのか。

「で、次の回からはそれも使っていけばいいんやな？ 分かつ……」
「せやねんけどさ。注意点が2つある」

宗の言葉を遮り、指を2本立てながら克也が言った。ため息を吐いて、宗は克也を見つめる。

「1つ、フォームが他の球種を投げるときと全然違う」

「それはキツいな……。まあ仕方ないけど。で、2つ目は？」

「コントロールが……。悪い。狙った所には全然いかへん」

「それ、最悪やんけ……」

宗は再びため息を吐く。確かに、高校生という時期でナックルボールを投げられるというのは凄いなと思うが、ある程度のコントロールがあつてこそだ。

「ま、そういうことで。次の河北さんは一発が怖いから、しっかりリード頼むで」

「河北さん……？ そうか、5番は河北さんか」

克也の言葉を聞き、宗は練習見学で見たときに、亮が変化球を全然打てていなかったことを思い出した。

1年生の変化球では、簡単に抑えられないかもしれない。しかしナックルがあれば、投球に幅ができる。

「安藤、ナックルをいきなり投げられるか？」

「いきなり？ まあ、そりゃあ投げられるけど……お前こそ、いきなり捕れるけ？ 投球練習は全部ナックルにしようか？」

「いや、いい。それじゃあ意味が無いからな。よし、投げられるんやったら大丈夫や。俺がナックルのサインを出しても首を振んなよ」

「ああ……分かった」

少し緊張した面持ちで克也が頷く。それを見て宗も頷いて、地面に置いていたレガースを手取る。

キャッチャー道具を装着することは、少し時間がかかる。試合のテンポを早くするためには、攻守交代の時間を短くすることが大事だが、キャッチャーが遅れていては話にならない。むしろ、先に行

って投手を待っているぐらいがちょうど良いのだ。

「ストライク、バッターアウト！ チェンジ！」

両脚にレガースを装着したときに、西村の声が聞こえたので宗がグラウンドへ目をやると、4番の亮司がうなだれながらベンチへ帰ってきていた。三振だったのだろう。

チェンジになったため、宗は急いでプロテクターを頭から通す。

そして、マスクとヘルメットとキャッチャーミットを持って、守備位置へと走った。

7-2・アクシデント(2)

宗からボールを受け取った克也は、一度深く息を吸った。そして五秒ほど息を止め、吐き出す。昔から、緊張したときに彼が行うものだった。

ナックルがワンバウンドしてしまったのは自分に腹が立った。元々コントロールに自信が無いとはいえ、初球くらいはどうしてもストライクを取りたかった。

直球か……

宗が出したサインはストレート。克也は指をボールの縫い目に掛けた。

彼は今、宗が出すサイン通りに投げている。まだ彼を認めたくわけではないが、捕手を信じるのも良い投手の条件だと考えたからだ。

宗のリードで小沢から三振を奪ったということも、克也にとって驚きだった。中学時代にバッテリーを組んでいた捕手と比べればまだまだだが、宗はなかなかの捕手だということに克也が分かったことも、彼のリード通りに投げる一つの理由でもある。

克也の右腕からボールが離れ、宗が構えるミットへと向かう。コントロールは悪くない。そして亮のバットが動き出した。

甲高い金属音が鳴り響いたが、亮が打ち損じたのか打球はサードを守る豊田一の前へ力無く転がる。それを見て、克也は慌てて声を出した。

「サード！」

彼が呼んだときには既に一はダッシュしてきていた。硬式経験者らしいが、やはりその動きは先ほど見た千尾啓太のそれよりも無駄が無かった。

そして打球を取った一がファーストへと送球した。

「アウト！」

主審だけでなく全ての塁を判定する西村監督の声が聞こえ、亮はため息をついた。

打った球は得意のストレートだったはずだが、完全に詰まった打球になってしまった。間違いなく、その前に見たナックルが頭にあつたからだろう。

「ドンマイ。2球目のときに色々とゴタツいてたけど何でや」

「あいつの球種や。とんでもないもん投げおつた」

素振りをしながら話しかけてきた昇平に、亮は苦笑いしながら答えた。

「球種？」

「ナックルや。バッターボックスで見たんは初めてやった」

「その軌道が頭に残ってたからストレートでボテボテのサードゴロやった、と」

ニヤリと笑いながら言う昇平を軽く睨みつけながら、亮は頷く。そして自分も口を開いた。

「お前は見逃し三振やったけどな」

「うるせえ」

立場逆転。といつても、互いで相手の傷口に塩を塗りこんでいるだけなので、亮はこれ以上この話を続けようとは思わなかった。昇平も素振りを再開する。

彼のスイングはやはり鋭く、思わず感心してしまう。それを見ると、彼がスカウトからも注目されている理由が分かる。もちろん、バッティングだけではなく強肩を生かした守備も評価されているのだが。

「小沢、次は……」

「打て、やる？」

「よく分かつてるな。絶対に次は打てよ」

亮は苦笑いしながら自分の口でもう一度言う。見逃し三振については、やはり彼自身が一番悔しいのだろう。

「何年一緒に野球やってると思ってるんや。それくらい分かるわ」
一旦素振りを中断して昇平が言う。彼の額からは大量の汗が吹き出していた。

「たった一年や」

「一年も、やる？」

亮は、そう言う昇平を見てつい笑う。それにつられたのか昇平も軽く笑った。

「お前はどうか、河北」

「もちろん打つ。相手はこの前まで中学生やったんやからな」

「せや。でかいの一発打つたれ」

そう言いながら、昇平はバットを持ってベンチの中へと戻ろうとした。

「素振りはもう終わりか？」

「アホ。チェンジや」

「おいおい……マジかよ」

亮は慌てて自分もファーストミットを取るためにベンチへと戻った。昇平と話してたから気づかなかったのか。それにしてもすぐに攻撃が終わったのは驚いた。

「二者連続三振や。こりゃあいよいよ本格的にマズくなってきたぞ」

昇平が苦笑いしながら呟く。それを聞き、亮も頷いた。

次は必ず打つと心に誓いながら、彼は守備位置へ走った。

五番の田中聡がファーストゴロに打ち取られたのを確認して、克也はバッターボックスへと向かった。

宗や一は先程の回に安打を放っている。翔也が投げる球を絶対に打てないということはないはずだ。

「スライダーがキレてるわ」

「スライダーね……。了解」

走って戻ってきた聡が克也に耳打ちをし、彼は小さく頷く。

バッターボックスに入って足場を均すと、克也はマウンド上の翔也を見た。

翔也はテンポ良く、すぐに振りかぶってボールを投げってくる。克也は直球を待っていたのだが、ボールは途中で鋭く曲がった。

「ストライク！」

克也は見送ったが、西村の腕が上がる。しかし外角低めの良いコースだったため、バットを振っていたとしても、空振りするかポテポテの内野ゴロに打ち取られていただろう。そう思うくらい、翔也のスライダーはキレていた。

これが高校レベルか……

小さく息を吐いて克也は思う。

中学時代でもある程度相手のレベルが上がると、ノビやキレが凄いボールをどんどん投げ込んでくる投手がいた。しかし翔也のスライダーは、そういった投手とは比べものにならない。

同い年で唯一勝るとすれば、去年関東で観たサウスポーくらいだろうか。とはいえ打席で確認したわけでもないし、どちらにせよ自分のスライダーとは出来が違う。

たかが一年の差。しかし、されど一年の差だ。

先ほどのボールは、克也に一年の差というのを感じさせられた。

潤からボールを受け取った翔也は、またもやすぐに振りかぶった。打者に余裕を与えないつもりなのかもしれない。

克也もすぐに構え投球に備える。そして翔也の手からボールが離れた。

「くっ……」

外角のボールを克也は空振りする。翔也が放った直後に彼はストリートだと思ったのだが、ボールは滑るように曲がっていた。

聡の言葉を思い出す。バットを振って改めて認識したが、やはり翔也のスライダーはキレている。

スライダーに絞るか……

克也は目を瞑りながら考える。

おそらく翔也はスライダーに絶対の自信を持っているのだろう。だが、これ以上ノらせるわけにはいかない。そのためにはスライダーを何としても打つ必要がある。

翔也が潤のサインに頷き、すぐに振りかぶる。それを見た克也は慌ててバットを構えた。

「なっ……」

翔也が投げたボールが克也の胸元付近に向かってきた。彼は体を仰け反らしてそれを避ける。

仰け反らした拍子に落としたバットを拾い上げ、克也はマウンド上の翔也を見る。

さっきの球に対して克也は大きく仰け反った。おそらく次は同じコースのスライダーか、外角のボールが来るだろう。

さあ来い。

克也は心の中で呟きながらバットを構えた。

「なっ!?!」

翔也の腕からボールが離れる。しかし、それは克也が思っていたものよりも球威があった。

甲高い金属音が鳴り響き、打球がショートを守る真史へ向かって転がった。遥斗はボールの流れを目で追う。

綺麗な流れで、真史から一塁手の亮へボールが送られる。

「アウト」

監督の声が聞こえ、遥斗は思わずため息を漏らす。しかしすぐにベンチへ戻ってくる克也の様子がおかしいことに気がついた。

「宗、安藤がなんか変やぞ」

「え?」

ベンチ内で上を向きながら飲み物を飲んでいた宗が、遥斗の言葉に反応して克也を見る。

しかし宗はすぐに首を傾げると、遥斗の方を見た。

「どこが変なんや？ 別に普通やぞ」

「どこがっていうか……なんとなく」

「大丈夫やって、心配すんな」

宗はそう言うのと再びドリンクを飲み始めた。

ベンチに帰ってきた克也がバツティンググローブを外す。その様子を見ていた遙斗は、克也の手に驚き慌てて駆け寄った。

「どうしたんやその……」

手、と遙斗は続けようとしたが、克也の手が彼の口を塞いでそれを妨げた。

「誰にも言うな。特に吉田には絶対やぞ」

もの凄い気迫で克也は言う。遙斗はゆっくりと彼の手を口から剥がした。

「安心しろ。俺が宗に言っても、あいつはお前をマウンドから降ろしたりしねえよ」

「どういうことや」

「いつか分かる。とりあえず宗に言っという方が良い。お前の手、かなり赤いし」

遙斗に言われたからか、克也は慌てて手を隠した。今さら隠したところで意味など無いが、遙斗はそれを指摘しようとは思わなかった。

その時、1年生ベンチが盛り上がった。7番打者の松田賢之が1塁ベース上にいるので、彼が何らかの形で出塁したからだろう。

「とにかく、絶対に吉田には言うなよ。俺は降板せえへんからな」

「だから宗に言っても変わらへんって……」

遙斗はため息をつきながら、既にグローブを手に行っている克也を見た。

「安藤、とりあえず何でそうなったかだけは教えてくれ」

「直球に詰まって手が痺れただけや」

克也は自分のグローブをはめながら言う。その目は嘘をついているようには見えなかった。

「ストライク、バッターアウト！」

8番打者の千尾啓太が三振に倒れ、攻守が交代する。当然ながら、克也もマウンドへ向かおうとした。

「安藤！」

遙斗が慌てて呼び止めると、克也は不機嫌そうな顔で振り返った。

「なんや」

「いや、なんでもない……」

喉元まで出てきた言葉を遙斗は飲み込む。克也は首を傾げながらも、そのままマウンドへと走っていった。

自分が素人だから頑張つて完投してくれ、とは言えなかった。

マウンドに置いてあるボールを拾い上げ、克也は顔をしかめた。

やはり、まだ手が痛い。

投球練習をする前にマウンドの土を均し、捕手である宗を見る。投げる球種は事前に言っているので、克也はすぐに振りかぶってストレートを投げた。

「ちっ……」

指先に痺れるような感覚があり、彼は思わず舌打ちをする。しかし、投げられない程度ではないことも同時に分かった。

次はカーブの握りをグローブの中で作る。そしてまた、すぐに振りかぶつて宗に向かって投げた。

緩やかな軌道でボールが彼の構えるキャッチャーミットに収まる。

ナイスボール、と宗はすぐに投げ返してきた。

「ボールバック！」

投球練習が最後の1球になったので、宗がボール回しをしていた野手陣に向かって叫ぶ。それを聞いた野手陣は、ボールをベンチへと転がしていく。その様子を見ながら、克也はゆっくりとセットポジションに入った。

先ほどカーブを投げたせいで、指先の痛みがかなり増している。

この様子では変化球を多投するのは厳しいだろう。ナックルは論外だ。

「マズいな、これは」

克也は誰にも聞こえない程度の小さな声で呟く。

この試合以降、存分にボールを触ることができる機会は、しばらく無いだろう。こんなところで降板するわけにはいかない。

克也は痛みに耐えながら、クイックモーションで直球を投げた。

8 - 1 . 突きつけられる現実 (1)

左バッターボックスに入った幸本星二は足場を均すと、マウンド上の安藤克也を見た。

投球練習の様子を見ると、カーブのキレが先ほどの回までに比べて、あまり無かった。僅かな差だが、観察力に絶対の自信がある星二は確信していた。

「疲れか、それとも怪我が……」

考えながらバットを構える。どちらにしる、この打席はストレートだけに絞ろうと考えていた。

また、中継に入るぎこちなさから、ショートの手橋政哉はあまり守備が上手くないとも感じている。

克也程度のストレートなら、ショートに狙い打つことも難しくない。ベンチから見ている限りでは120km/h弱くらいだろう。3年生で綾波北のエースである寺島が、この冬場に成長してMAX 140km/hを投げられるようになったことを思えば、遅すぎるくらいだ。

克也が振りかぶり、その右腕からボールが放たれる。それは星二が予想した通り直球だった。

「もらいつ！」

ジャストミートした打球は痛烈なゴロになり、ショートを守る政哉へ向けて真っ直ぐ飛んでいく。

星二が1塁ベースへ走りながら打球の行方を横目で確認すると、ちょうどその時に政哉のグローブを弾いていた。彼が慌ててボールを拾いに行こうとするのが見える。星二はそこでボールから目を切り、1塁ベースに集中して走った。

「セーフ！」

彼がベースを駆け抜けてすぐに、西村雄吾の声が聞こえた。

「ボールショート！」

一塁のランナーコーチである楠田誓が言う。それを聞き、星二がシヨートの政哉を見ると、彼は申し訳なさそうにボールを克也へ渡していた。

「いやあ、ラッキー」

星二は口元を緩めながら、バツティング手袋を外して誓に渡す。そして、克也を見ながらリードをとった。

打席には九番の藤澤翔也が入った。克也は数秒だけ星二を見てからセツトポジションに入る。

星二は克也の足元をじっくりと見つめる。そしてその左足が上がった瞬間に、彼は二塁ベースへ向けて走り出した。

「逃げた！」

背後から、一塁手である瀬高亮司の声が聞こえる。星二が顔を少し左に向けて翔也を見ると、彼は少し驚いたような顔をしながらもボールを見送っていた。

それを確認した星二は、スピードを落とすことなく走りつづけた。もし翔也が打っていて、打球がライナーやフライになっていたら戻る必要があったのだが、今はその必要もない。

二塁ベースに二塁手である千尾啓太が入る。しかし、捕手の吉田宗から投げられたボールはレフト側に少し逸れた。啓太がそれをつたときには、もう既に星二は二塁ベースへ滑り込んでいた。

「ラッキーやねえ」

星二は口元を緩めながら、ユニフォームに付いた土を払った。

翔也にファーストへ進塁打をきっちり打たれ、打席には岸本俊輔を迎えた。宗は、内野手に前進守備をとるように指示した。

星二の盗塁を許したのは、完全に宗のミスだった。無警戒で送球も逸れてしまっているようでは、絶対にアウトにすることなどできない。

もし克也に牽制球を放らせるなどして星二の盗塁を阻止できてい

たら、今迎えているようなピンチは無かっただろう。

宗は自分自身に苛立ちながらも、自分のサインを待っている克也にサインを出した。とりあえず様子を見るために、1球だけボール球を要求する。

「ボール！」

外角高めにウエストしたボールに俊介は手を出さない。宗は三塁ランナーである星二を見ながら、克也にボールを投げ返した。

少し考えた後、今度は内角低めにストリートを要求する。内野手は前進守備の隊形をとっているため、内野ゴロに打ち取ることができれば大丈夫だろう。

克也がセツトポジションから一度だけ牽制球を放る。俊輔がスクイズの構えらしきものに移る様子はない。先輩の意地というのもあるだろうし、スクイズというのはなさそうだ。

克也の足が上がり、右腕からボールが放たれる。しかしそのボールは、宗が構えたコースよりも少し真ん中寄りだった。

「あっ……」

宗は思わず声を漏らす。その瞬間に、俊輔のバットがボールを捉えた。

「センター！」

宗の声が聞こえる。しかしそのとき既に、千葉優希は右中間へ走り出していた。俊介の打球はライナーとなって飛んできている。

優希は打球の角度や強さと風から落下地点をある程度予測し、全力でそこへ向かう。

走りながら、普通に向かえば確実に間に合わないと思っただけで彼は悟った。自分でも足が速い方だと思っただけで優希だが、何事にも限界はある。だが、そう簡単にヒットを許すわけにはいかない。優希は走るスピードを更に上げた。

地面を大きく蹴って体が宙を舞い、グローブをはめている左手を

前に伸ばす。グローブの中にボールが収まる感覚の直後、体が地面に叩きつけられた。

「バックホーム！」

星二がタッチアップしたのだろう。その声が聞こえ、優希はすぐに立ち上がる。3塁ランナーの星二が走り出しているのを目の端で捉えながら、セカンドの啓太へ送球した。

半身の構えからボールを捕った啓太が、すぐさまホームベースへと送球する。しかしそのボールは、ホームベースよりも数メートルだけ左にズレた。

その数メートルのズレは非常に大きく、星二はスライディングすらせずにホームベースを悠々と駆け抜けた。

センターのポジションからそれを見た優希は、思わず天を仰ぐ。先制点を許したことが残念でならなかった。

克也は宗のサインに頷くと、すぐに振りかぶった。

1点は失ったものの、状況は2死無走者。失った点を後から無かったことにすることはできないので、今は打者の道淵賢を落ち着いて打ち取ればいい。

カウントは1ストライク1ボール。2球とも直球だったが、この3球目もサインはストレートだった。

克也にとって今の、直球主体となっている宗のリードは非常にありがたい。直球でも僅かに手は痛い、カーブなどの変化球よりはマシなのだ。

いつもと同じフォームから、宗が構えるミットに目掛けて投げる。その直後、賢の腰が回り始めたかと思っただ瞬間に、彼のバットが動いた。

ボールが宗のミットに収まる前に、賢のバットがそれを捉える。

打球は勢いよくライトの頭を越えていった。

「ボール3つ！」

すぐにマスクを外した宗が指示を出す。それを聞いて、克也はサインドベースのカバーへと走る。

俊足の賢之がすぐ打球に追いつくが、そのとき既にバッターランナーの賢は2塁ベースの手前を走っていた。そのまま彼はベースを蹴って、3塁へと向かってきた。

賢之から啓太がボールを受け取る。しかし彼はそれを3塁へ送球はしなかった。

間に合わないと判断したのだろう。その直後に賢が3塁へ滑り込んだ。

「安藤、気にすんな。2アウトや」

啓太がそう言いながらボールを克也に渡す。克也は袖で額の汗を拭いながらそれを受け取った。

彼が言うとおり、今は2アウト。バッターさえ打ち取れば何も問題は無い。

そのバッターがな……

克也は苦笑いを浮かべながら思う。これから迎えるのは3番の林真史、4番の小沢昇平、5番の河北亮だ。彼らの威圧感は一歩半端ではなく、他の2年生らと比べても群を抜いていた。

真史がバッターボックスに入って足場を均す。その間に、克也は宗が出すサインを見た。

サインを確認し終わると、セットポジションに入り3塁ランナーの賢を見る。二死3塁という状況から考えると当然だが、リードはあまり大きくない。

首を左に向けて宗が構えるミットに集中する。外角低めのボール球。手のことを考えるとあまり球数を増やしたくはなかったが、ストライクだけで勝負していると間違いなく打たれる。真史にはそういう雰囲気があった。

克也は小さく息を吐くと、左足を上げて投球モーションに入った。

そして宗のミット目掛けてボールを投げ込む。

克也が投げたボールは宗が構えるミットに向かう。宗は構えた所からミットを全く動かさずにボールを捕った。

真史は平然と見送る。当然ながら西村の腕は拳がらない。

真史は見送った後も真つ直ぐと克也を睨みつけている。克也はそれに呑み込まれそうになる感覚を持った。

8 - 2 . 突きつけられる現実(2)

「ボール、フォアボール！」

4つ目のボールもストライクゾーンから大きく外れ、結局克也は真史に四球を与えてしまった。

宗はたまらず、タイムをとってマウンドに駆け寄った。

「らしくないぞ。どうしたんや」

「何でもねえよ。こんなことで一々タイムとるなって」

「でもボールが乱れてきてるし……」

「うっせえな。大丈夫って言ってるやろうが」

聞く耳を持たない克也を見て、宗は苦笑いを浮かべる。これ以上言っても埒があきそうにないので、とりあえず彼はボールを克也に差し出した。

最初、克也は右手でそれを受け取るうとしたが、何を思ったのか途中でそれをひっこめて、結局左手にはめたグローブで受け取った。その様子に宗は少し疑問を持つも、それ以上特に気にすることもなく、集まってきた内野手に指示を出した。

「林さんが盗塁してきたら刺しにいくから、千尾がベースに入ってくれ。場合によったらサードに投げるかもしれんし、豊田はちゃんと見といてくれよ」

「分かった」

「暴投すんなよ？」

指示を受けた啓太と豊田一がそれぞれ答える。

「よし、とりあえず安藤は甘い球を投げんようにな」

宗はそれだけ言うと、自分の守備位置である本塁へと走った。

「っしあ！ しまつてごう！」

宗はダイヤモンドを向いてそう叫ぶと、今まで外していたマスクをかぶった。そして腰を降ろすと、すぐにカーブのサインを出した。
ん？

気のせいだろうか。克也が頷くまでに少し間があった。サインが見にくかったのかも知れない。

理由は何にせよ間の後に克也は頷いたので、宗は特に気にすることなくミットを構えた。

克也がセットポジションから左足を僅かに上げ、クイックモーシヨンで投げた。

やばっ……

ボールの軌道がかなり低い。指に引つかかったのか、叩きつけられたようになっていいる。宗はボールがワンバウンドするだろうと判断した。

宗は慌てて膝をつき、ホームベースの手前でワンバウンドしたボールをプロテクターで止める。しかし、横に回転がかかっていたこともあって、プロテクターに弾かれたそのボールは宗の右に転がっていった。

「逃げた！」

瀬高亮司の声が聞こえる。1塁ランナーの真史が2塁へ走ったのだろう。宗はすぐにボールを拾いにいった。

転がっているボールを素手で掴み、真史の位置を確認する。

刺せる……！

真史は既に1塁ベースより2塁ベースの方が近い位置にいたが、宗はノーステップで2塁ベースにいる啓太へ送球した。

「ほう……」

宗が投げた直後に監督が呟いたのが、打席にいる昇平には分かった。

昇平自身も、宗が投げたボールに驚いた。それは低い弾道で、セカンドベースに入った啓太に向かっている。2年生チームのレギュラー捕手である小畑潤よりも良い送球だと思った。

「滑れ！」

昇平は真史に聞こえるように声を張る。それが聞こえたのか、真史はベースの手前から滑り込んだ。

しかし彼が滑り込む直前に、宗が投げたボールは2塁ベースへと届いていた。タイミングは完全にアウトだ。

だがセカンドを守る啓太が、宗からの送球を取り損ねた。ボールはセンターの優希に向かって転がるが、バックアップに入っていたシヨートの政哉が、すぐにそれを拾い上げる。これでは、3塁ランナーの賢はスタートを切れない。

「ガツチリ捕れよ！ 普通に捕ってたらアウトやぞ！」

「まあそう言っな。とりあえず落ち着け」

啓太に怒鳴る克也を宗がなだめる。啓太が落とした原因は、自分が干尾にとつて速すぎるボールを投げたからということに気づいているのかいないのか。どちらにせよ、宗の表情を見る限り、啓太のミスでイラついてはいないようだ。

宗がマスクを被って座る。二死2、3塁という状況で、試合は再開された。

2球目もボールで、カウントは0ストライク2ボールとなった。

マウンド上の克也がロジンバックに手をやるのを見ながら、昇平は足場を均す。そして一度だけ深呼吸をすると、すぐにバットを構えた。

狙い球はストレート。もし外れたとしても、そのときはそのときだ。まだ1ストライクで、チャンスはまだ2球残る。

セットポジションから克也が3球目を投じる。その動きに合わせて体重を右半身に移していた昇平は、ボールが克也の手から離れると体重を前　左半身　へと一気にかけ、腰を回してバットを振った。

克也が投げたボールはストレートだったのだらう。昇平が振ったバットは真芯で白球を捉えた。

「レフト！」

1年生達が叫ぶのを聞きながら、昇平は1塁ベースへと駆け出し

た。

打球は緩やかな弧を描きながら、レフトを守る田中聡の頭を越えていく。だが、弾道が少し高すぎた。この角度では地面に着いた後に高く跳ねて、あまり転がっていきそうにない。おそらく3塁まで行くのは厳しいだろうと、昇平は走りながら思った。

昇平が1塁ベースを蹴って2塁ベースへ向かった直後、打球が地面に落ちた。やはりそれは高く跳ね上がり、あまり地面を転がらない。

昇平が2塁に達したとき、ボールが内野へ戻ってきた。

まずいな……

2塁にいる昇平を見ながら、一は心の中で呟いた。

ランナーは一掃され2点が追加されている。この回だけで3点を奪われていて、流れは完全に向こうにある。ここらで流れを断ち切らないと、一気にビッグイニングへと繋がってしまう。

「切り替える、安藤。2アウトや」

「……………」

一の声に反応したのか克也はこちらを見たが、特に何も言うことはなかった。

「……」

元から愛想の良い人物だとは思っていなかったが、ここまで余所余所しいと、今後が心配になる。

一の言葉に、何でもいから返答してくれば良かったのだ。そうすればナインの雰囲気はもっと良くなっていただろう。だが、今の1年ナインが醸し出している雰囲気は良いとは言えない。むしろ、最悪だ。

その中で1人、全く沈んだ様子の無い人物がいる。

「2アウト！ 内野は落ち着いて1つ、外野は一本4つな」

安心して見られるのは吉田くらいやな……

ホームベースの一步前で野手陣に指示を出す宗を見ながら一は思う。

彼の指示は「内野手はゴロを捕ったらファーストへ送球し、外野手は内野の間を抜けてヒットとなった打球を捕ったらバックホームがあるということを頭に入れておけ」というものだが、冷静にそれを指示できているため心配はいらないだろう。

宗の指示に野手の全員が返事をし、彼はマスクを被って座った。少し前まで最悪だった雰囲気は僅かに持ち直した。宗が一呼吸置いたからだろう。

打席に入った亮がバットを構える。サードの位置から見ても、その威圧感はかなりのものだ。

一が横目で克也の様子を窺うと、彼は初回や2回のように堂々としていないのが分かる。それは先ほどからだ、まだ戻らないのだろうか。

吞まれてんじゃねえよ

目の前の地面を軽くスパイクで均しながら、心の中で克也に言う。余所余所しいのならそれでも構わないが、それなら孤高に、マウンド上では堂々としてもらいたい。中途半端というのが、1番質が悪い。

克也がセットポジションに入る。少し2塁ランナーである昇平のことを気にしながらも、牽制を挟むことなく、ホームへ投げた。

刹那、打撃フォームの途中で上げていた左足を降ろした、河北のバットが動きだす。

来るっ！

亮の左足が少し外側に開いていたからか、一はそう思った。そして、すぐに金属音がグラウンドに鳴り響く。亮はバットの真芯でボールを捉えていた。

彼の打球は痛烈なライナーで三塁線を襲う。やはり予感当たった。一は地面を蹴り、右横へ思いつき飛びこんだ。

グローブにボールが入る感触がし、地面に身体が叩きつけられる。

久しぶりの実践ということもあり、試合での打球に飛び込んだのも久しぶりだ。

だが、ボールは絶対に落とさない。それはかつてから培ってきた癖のようなものでもあり、絶対に変わらない。そして、ボールが入ったグローブをはめている左腕を、一は倒れたまま頭上に掲げた。

「アウト！」

西村の声が聞こえる。またそれと共に、仲間からのナイスキャッチという声も聞こえた。

そのとき、一は前に誰かがいることに気がついた。足が見えたのだ。試合用ストッキングを履いていることから、2年生だということとが分かる。1年生はまだ試合用ユニフォームを受け取っていないので、今日の試合は練習用ユニフォームで行っている。

左腕を下ろして、両腕を使って体を起こすと、それが誰か分かった。

「小沢さん……」

「ナイスキャッチ。良い動きしてんな、お前」

「あ、ありがとうございます」

昇平は少し表情を緩ませながらそう言うと、既に受け取っていたグローブを左手にはめて、センターのポジションへと走っていった。「ナイスキャッチ」

急に声が聞こえたかと思うと、隣に克也がいた。グラブを閉じて、その手をこちらに延ばしている。

一は自分も同じようにして、克也のグラブと自分のグラブをタッチさせる。そして口を開いた。

「相手に吞まれんなよ。らしくないぞ」

「……吞まれてへんわ」

克也はそれだけ言うと、小走りでベンチへと引き上げていった。

「お前なあ……」

もつと素直になれよ、と続けて言いたかったがやめておいた。

ふうと一息つくくと、一も走ってベンチへと帰った。ナインの暖か

い出迎えがあり、少し気分を良くしながら、スポーツドリンクを一口飲む。

隣で克也もスポーツドリンクを飲んでいる。その様子を見ながら一は改めて、おそらく彼が自分たちのエースになるのだろうと思った。

克也は克也なので、彼の性格にケチをつける必要なんてないではないか。そう思えるようになったのだ。

投手の性格や考えを理解し、信用する。そして投手から信頼される。それが野手というものなのだろう。

「お疲れさん」

ペットボトルのキャップを閉めると、克也の背中を軽く叩きながら一は言う。彼が何か返事を言う前に、一はベンチの中でも前の方に行った。

「市橋！ 絶対打てよ！」

この回の先頭打者である政哉に声をかける。彼に対してはもちろんだが、自分自身にも気合いを入れるための言葉だ。

さあ、反撃開始や！

8 - 3 ・突きつけられる現実(3)

「ストライク、バッターアウト!」

5番の聡が空振り三振に倒れ、1年ベンチにいる何人かからため息が聞こえた。

翔也がノってきたのだろう。一が思ったようには試合は運ばれず、3回・4回と三者凡退に打ち取られていた。一も、この回に三振を喫している。

「よし、切り替えて守備行こう!」

「おう!」

へこんでいる空気を少しでも良くするため、守備へ向かう前に一は声を掛ける。それに多くの野手が反応したため、2イニング連続三者凡退の影響は薄れたのかと思われるかもしれないが……。

そんなわけねえよな……

サードの守備につき、苦笑いしながら一は思う。皆、口で必死に雰囲気をよくしようとしているが、心の中は沈んでいるに違いない。それは彼自身も同じだ。

ファーストの亮司を見ると、ショートの前で政哉へゴロを転がしていた。

インニング前に行われる投球練習の時間に、内野手はファーストが転がしたゴロを捕り、それをファーストへ送球するといった動作を行う。

だが先ほど、セカンドの啓太が処理にもたついて時間がかかっていたため、自分のところへもゴロが来るかは微妙だった。

「あつ!」

政哉の音が聞こえたのでそっちを向くと、彼はボールを弾いていた。啓太から2人連続となっている

まずいな……

集中力が切れかけている。一はそこに危機感を持ち始めていた。

投球練習が終わり、最後にもう一度素振りをする、俊輔は右バツターボックスに入った。

先ほどの4回は無得点であったが、8番打者の星二が何球も粘り、克也に10球ほど投げさせてフォアボールを選んでいった。結局、次の打者である翔也がアウトになってしまったため得点は奪えなかったが、克也の球威はかなり落ちてしていると予想できる。

俊輔の予想は当たっていた。

初球、克也が投げたボールは内角低めのカーブだった。だがキレが無い。俊輔のバットはそれを簡単に捉え、打球は三遊間を真つ二つに破ってレフト前ヒットとなった。

ボールが内野に帰ってきて、俊輔は回り込んでいた位置から1塁ベースへ戻る。

「ナイスバツティング」

「ありがとう」

1塁のランナーコーチである誓と言葉を交わしていると、2番打者の賢が打席に入った。

俊輔は視線をベンチに移す。この試合のサインは昇平が出しているためだ。彼が打席や塁上にいるなどで出せないときは、翔也が出している。

昇平の右手が鼻に触れ、そして胸に触れた。これがキーだ。この後に触れた箇所が、サインとなる。

昇平の右手は胸に触れた後、左腰に触れた。そして、そのまま取り消しのサインが出ることなく、数秒後に昇平はサインを出すのをやめた。

盗塁とか、無茶言うなよ……

昇平にサインを理解したことを伝えるため、俊輔はヘルメットの鍔を触る。1年に気づかれぬよう表情は変えないが、心の中で大きくため息をつく。

宗の肩は中学時代のと看から何度も見てきている。それに、先ほどもその強肩を見せられている。

アウトになつたらダサイよな……

そんなことを考えながらも、俊輔はいつもと同じようにリードをとつた。

サインを確認し終わった克也が、一度俊輔の様子を確認してからセツトポジションに入った。その様子を見ながら、俊輔はふと思う。

あいつの牽制、見たか？

答えはNOだ。克也はこの試合、一度も牽制球を放っていない。どんなものなのか一度は見たい。その方が対策がしやすいからだ。

俊輔は少しリードを広げる。明らかに大きすぎるリードだ。だがやはり、克也の牽制を一度は見ておきたかつた。当然、俊輔は体重を左足に乗せて、すぐに帰塁できる状態にある。

しかし克也が牽制球を放る様子はなかつた。どう考えてもおかしい。そんなに自分の足が警戒されていないのかと、俊輔は逆に心配した。

その直後、克也の左足が上がつた。俊輔は慌ててスタートを切る。体重を左足にかけていたわりには、抜群のスタートが切れたと彼は感じた。

「逃げた！」

一塁手である亮司の声を背中に聞きながら、俊輔はスピードを上げた。数歩走つたところで目線を僅かに本塁へ向ける。

よしっ！

克也のボールがショートバウンドしたようだ。これではほほ確実に2塁はセーフになるだろう。

セカンドベースに入った政哉がグローブを構える。宗が送球したのだろうか。

さすが宗だ。投球がショートバウンドでもランナーを刺そうとするところが、彼らしい。

だが、政哉がボールを取る前に俊輔はベースへ滑り込んだ。そし

て素早く立ち上がる。

「セーフ！」

宗からの送球を受けた政哉が俊輔にタッチするも、当然ながら西村は腕を横に広げた。

悔しそうにしている宗を一度だけ見ると、俊輔は視線を昇平に移した。彼は俊輔の方を見ながら頷き、そのまますぐにサインを出し始めた。

次のサインは『普通に打て』だった。

打席にいる2番打者の賢は今日好調なので、盗塁も無しで打たせたら良かったのではないかと俊輔は思うが、昇平はおそらくダブルプレーを恐れたのだろう。賢はあまり足が速くない。さっきの3塁打は、2年生の全員が驚いていた。

「内野、1つずつな」

宗が野手に指示を出しているのを聞きながら、俊輔はもう、軽くリードをとった。

賢の打球が目の前に飛んできて、ライトを守る松田賢之は慌てて前に走り出す。

ゴロで一二塁間を破った痛烈な打球を見て彼は、2塁ランナーの俊輔はホームへ向かわないだろうと判断した。逆に、これで3塁を回られたらかなりの屈辱だ。自分の肩が弱いと判断されるのだから直後、彼はその屈辱を味わう。

「ボール4つ！」

誰かの声が聞こえ、賢之は一瞬だけランナーの状況を見る。俊輔は3塁ベースを回っていた。

くそっ……！

グローブをはめている右手を下ろして打球を掴むと、賢之はホームベース目掛けて送球した。

賢之が投げたボールは、誰のカットも受けずに直接宗の元へたど

り着いた。低い軌道でワンバウンド送球。自分でも驚くくらいの良いボールだった。

だが僅か数十センチメートルだけ、ボールはホームベースから左ランナーが来る方向とは逆にずれた。当然、宗のキャッチャーミットはそれを捕りにいき、ブロックも甘くなる。その間に、少し回り込んで滑った俊輔の左手がホームベースに触れた。

「2つ！」

啞然としていた賢之も、政哉から聞こえたその声を聞き、セカンドベースを見る。打った賢が、1塁ベースを回って2塁ベースへ走ってきていた。

吉田がすぐに送球する。しかし、監督である西村の手は横に広がった。

「ちつ……」

盛り上がる2年生ベンチを横目に、一は地面を蹴った。俊輔は予想以上に速かった。あの当たりで生還されるとは、全く思わなかった。さらに賢にも隙をつかれて2塁ベースを陥れられている。

これで4点差。残された攻撃イニングは3回だが、それで4点を奪うのは非常に難しく思えた。

さらに、まだ無死2塁とピンチが続く。今の克也の状態と、これからクリーンアップを迎えることを考えると、もう1、2点は覚悟した方が良さそうだ。

なんでピッチャー替えへんのや……

明らかに、マウンド上の克也はへばってきている。ボール球がはつきりし、甘い直球を痛打されるといいうのは、試合の序盤にはあまり見られなかったものだ。

うちの学年にはピッチャーが2人しかいない。いずれは野手からコンバートされる者が出るかもしれないが、今は克也と神山遥斗の2人しかいないのだ。

だが、2人もいるとも考えられる。克也を遙斗に替えればよいのだ。おそらく宗は軟式上がりへの遙斗に、いきなり硬球で投球させたのを嫌っているのだろうが、今はそんなことを言っていられる状況ではない。

一がベンチにいる遙斗を見ると、その視線は2塁ランナーの賢に注がれている。

やる気充分やないか……。何で神山を使わへんねん……

心の中で呟いた言葉は、もちろん宗には届かない。

そして試合は進み、打席には3番打者の真史が入った。

打席に入った真史が、ゆっくりとした動作で構える。一には、それがいかにも打ちそうな構えに見えた。

克也がセットポジションに入ったのに合わせて、一も姿勢を少し低くする。

克也は賢をじつと見ながら足を上げ、視線を吉田に移してボールを放った。一もそれに合わせてグラブを下ろし、打球に備えた。

克也がボールを投じた直後、真史のバットが動き出す。それはボールを真芯で捉え、打球は三塁線へ痛烈に向かってきた。

来た……！

一は右に足を運んで横へ飛ぶ。しかし、痛烈なライナーで向かってきた打球は彼のグローブに当たったものの、その中には収まらず、軌道を変えて3塁ベンチの方へゆっくりと転がっていった。

「くそっ……」

一は慌てて立ち上がると、急いでボールを拾う。だがバッターランナーである真史は、既に1塁ベースのすぐ近くまで到達していた。2塁ランナーの賢は動いていない。一は目でランナーを牽制しながら、ボールを持ってマウンドの近くまで行った。

「ナイスサード」

打球を止めたことに対してだろう。グローブを一の方へ出しながら、克也がそう言った。そのグローブにボールを入れて、一は口を開く。

「お前、どつか痛いんか」

「は？ 何でそんなこと訊くんや……別にどこも痛くねえよ」

「……そうか、ならいい」

ふと思ったことを口にしたのだが、どうやら凶星かもしれない。何故そのようなことを訊いたのか、それは普通に考えれば、克也が打たれたことからなるはずだ。しかしわざわざそれを尋ね返すということは、彼の中に怪我をしているのがバレたのではないかという焦りが生まれたからではないのか。

しかし、だからといって一には何もできない。宗から止められているのか、遥斗は投球練習すらしていない。これでは急にマウンドへは上がれない。彼のやる気が伝わってくるだけに、一は齒痒かった。

とにかく克也には、この自分で蒔いたピンチを抑える義務があるのは確かだ。一は1度だけグローブを叩くと、自分の守備位置へ走った。

8 - 4 ・突きつけられる現実(4)

嫌なバッターが続くな……

打席に入った昇平を見ながら、克也は額の汗を右の袖で拭う。彼には先ほど打たれているため、甘い球を投げるわけにはいかないのは十分に分かっていた。

初球、外角低めに克也は直球を投げるが、際どく外れる。そして2球目も高めに外れ、カウントは0ストライク2ボールとなった。

「安藤、楽にいけ」

一塁手の亮司が声をかけてくる。克也が視線を向けると、1塁ベンチの前にあるネクストバッターズサークルに、5番打者の亮がいるのが見えた。

河北さんと勝負でもいつか……

小沢を歩かせると無死1、2塁が無死満塁になる。得なことなど一つも無いが、昇平に長打を打たれるよりも、今日不調である亮の方が抑えられそうだ。

3球目を高めに外すと、克也が投じた4球目は外角に大きく外れた。これで無死満塁。宗がタイムをとってマウンドに向かおうとしているのが見えた。

「いい。来るな」

宗を止め、克也はグローブを上げる。わざと出した四球だ。タイムをとる必要などない。

宗もマウンドに集まることを諦めたのか、ボールを克也に放ると自分の守備位置へと戻った。

克也はボールをグローブの中で軽く転がすと、本塁の方を見る。右打席には既に、亮が入っていた。

こちらをじっと見てくる亮から視線を逸らし、克也はロジンバツクを手にする。右手でポンポンと弾ませ、その後それをマウンド上に落とす。そして再び亮を見たが、彼はまだこちらを見ていた。

宗からのサインを確認してセットポジションに入る。彼から出されたサインはカーブだ。グローブの中でその握りを作ると、克也はすぐに左足を上げた。

3塁ランナーを目で牽制しながら、克也はボールを離す。だが、直後に彼は違和感を感じた。彼がその違和感の正体に気づくのに、時間はかからなかった。

しばらく投げていなかったカーブ。限界に近い指先。それらが克也の感覚を狂わせたのだ。

……曲がない!?

手首はしつかり捻ったつもりだった。だが、実際にはボールが変化をする様子もなく、ほとんど棒球のスローボールのようなものが打者へと向かっている。

一瞬、克也は亮がそれを見逃してくれることを期待した。だがその期待はすぐに砕かれた。

上げていた左足を下ろした亮の腰が回り、バットが動き出す。思い切り振り抜かれたバットはボールを真芯で捉えた。

「レフト!」

甲高い金属音がグラウンドに響いた直後、マスクを取って宗が叫ぶ。しかし、打球がレフトの頭を越えることは誰の目にも明らかだった。

くそっ……

聡の頭を越えていく打球を見ながら、克也は唇を噛む。そして、ゆっくりとした足取りでホームへカバーに向かった。

打球が聡の奥で地面に落ちたのを確認したのか、それまでベースについていた、3塁ランナーの賢と2塁ランナーの真史がスタートを切る。1塁ランナーの昇平も、ハーフウェイの位置からスタートを切った。

負けやな……これは

賢がホームベースを踏んだのを見て、克也は心の中で呟いた。

これで5対0。さらに真史も3塁を蹴り、ホームへ向かってきて

いる。昇平ももうすぐ3塁ベースに到達しようとしている。彼までもがホームインしたら7対0だ。

肝心のボールは、ようやく追いついた聡によって遊撃手の政哉へ送球されたところだった。

手さえまともやったら、もつと抑えられたのに……

真つ赤になっっている自分の右手を見る。これのせいで失投したのだ。いつも自分の右手には感謝しているが、今日ばかりは恨めしかった。

真史がホームインする。これで6対0。ボールは三塁手の一に渡っていた。聡が打球を捕った位置がホームから遠かったため、間で中継をする野手が2人入っている。しかし昇平はもうホームベース目前だ。7点目も確実に入るだろう。

しかし、そう思っていた克也の目に、信じられない光景が映った。一が矢のような送球を見せ、本塁上で昇平と宗のクロスプレーになったのだ。

必死にブロックした宗だが、体格差もあって、やはり弾き飛ばされる。克也は慌てて駆け寄った。

「おい、大丈夫か！」

「大丈夫や……」

宗はそう言うと、ミットを上に掲げた。その中には、ボールがしっかりと収まっている。

「アウト！」

主審である西村の腕が上がる。2年ベンチからはため息が聞こえ、昇平も悔しそうにしている。

克也は宗のミットからボールを取ると、彼が起き上がるのを手助けした。地面に、頭につけていたヘルメットが落ちている。昇平と衝突した際に落ちたのだらう。先ほど起きたプレーの激しさを克也は認識した。

「お前……」

ヘルメットを拾って宗に渡しながら、克也は小さく呟いた。小さ

すぎて聞こえなかったのだろう。宗はそれに反応しなかった。

「サンキユ。安藤、ボールのキレが無くなってきてんぞ。しんどくなってきたやるうけど、あと少し踏ん張ってくれ。バツクも守ってくれるから」

「ああ。分かつてる……」

克也はそう答えると、マウンドへと向かう。

「何やねんあいつ。かつこよすぎやる……」

自分は何をしているんだろう。投手のくせに、誰よりも早く勝負を諦めていた。周りは誰も諦めていないのにも関わらずだ。

「違う……。俺の力はこんなもんじゃない……」

打席に入った高野翔馬を見ながら、克也は小さく呟く。そして先ほどまでよりも強い視線で、宗からのサインを見た。

サインを確認し終えると、克也はグローブの中でストレートの握りを作った。宗が構えるミットだけを見て、1球目を投げ込む。

「ストライク！」

内角に決まり、西村の腕が上がる。左打席に立っている翔馬はバツトを振らなかった。むしろ、彼は少し体を引いていた。

2球目の外角低めのストレートも彼は見送ったが、再び西村の腕が上がった。

ギリギリのコースだったからだろうか。西村がストライクとコールした後、翔馬が一瞬だけ彼の方を見たように克也は見えた。

「焦ってんな……」

たった2球で追い込まれた翔馬は、明らかに動揺しているように見えた。今日ここまで結果が出ていない彼なら、少々ボール球でも振ってくれるのは容易に想像できた。

案の定、克也が投じた高めのボール球に、翔馬のバツトを空を切る。克也は右手で小さくガッツポーズを作った。

「ナイスピッチ！」

「ええぞ安藤！」

野手からの声を聞きながら、克也はすぐに気持ちを切り替える。

まだピンチは続いているのだ。

打席には7番の小畑潤が入り、宗からサインが出された。克也はセツトポジションに入ると一度だけ2塁ランナーの亮を見て、すぐに潤に対しての初球を投げた。

その直後、彼のバットが動き出す。甲高い金属音が鳴り響き、克也目掛けてライナーが飛んできた。

やばっ……

打球に対し、克也は咄嗟にグローブを出す。直後に重い衝撃をそれに感じるが、彼はボールを落とさなかった。

「アウト！」

西村のコールを聞き、克也はホッとひと息をつく。捕ることができたものの、打球が痛烈だったため少し驚いていた。

ともあれこれで3アウトチェンジだ。克也はボールをマウンドに置くと、ベンチへ小走りで戻った。

「ナイスキャッチ」

「ヒヤヒヤさせんなよ」

ベンチから声を掛けられる。声からして、杉山正和と萩原治だろう。克也は彼らに対して少しだけ笑うと、ベンチに置いてあるスपोर्टドリンクを飲んだ。

「安藤が笑ったとこ、初めて見た……」

「そうか？」

驚いたような顔をしている宗に克也は答える。だが、今思えば確かに入部してから笑ったのは僅か、もしくは初めてだったと自分でも思った。

慣れない環境で、笑えるだけの余裕も無かった。だが今笑えたというのは少し気持ちに余裕が出たからだろうか。

点を取られたのに……か？

彼は自分の問いに自分で答える。6点も取られて、気持ちに余裕があるはずない。

「なんか、変わったな安藤」

「は？ 変わった？」

「まだ会って数日やけどさ。今日の安藤は、ちょっと雰囲気違うように感じるわ」

宗の言葉に、克也は首を傾げる。自分のどこが変わったのだろうか。

だが、そう言われて嫌な気はしなかった。

9 - 1 . 主役は遅れてやってくる (1)

「ピッチャー替わったみたいやな」

「ああ。あれは伊藤やな」

隣で呟く、軟式野球部キャプテンである西垣竜二に松永中は答えた。

学年集会が終わったため、彼らは教室から試合を眺めていた。3年生は今日休みなので帰ってもいい。そして中は、帰ったら白波瀬花梨とティーバッティングを行う予定だった。

だが、少し試合を見ていたかったので、教室に残っている。

校舎の3階から窓を通して見ているので、ときどき今誰が打っているのが分からないときもある。だが、伊藤和成のようなサウスポールの投手は二年生で他にいないため、遠くから見ても彼だと分かった。

「良いピッチャーやな」

投球練習を見てか、竜二が呟く。

「まだまだ。メンバー入りには遠いわ」

「そうなんか……。春季大会にも入らなさそうか？」

「そうやな。藤澤……。さっきの右ピッチャーは入るやろうけど」

「硬式は厳しいなあ」

竜二が苦笑いしながら言う。だが、軟式には軟式なりの厳しさがあると思っていた。

「春季大会はどう？ どこまで行けそうや」

「一次戦は相手に恵まれてる。うまくいけば二次戦に出られる」

今回の春季大会は、京都府の北部を3、南部を12のブロックに分け、それぞれの勝ち上がった15チームと、選抜に出場した双葉の16チームが二次戦に出場する。

綾波北高校は一次戦の相手に恵まれており、二次戦に出場できる可能性も十分に高かった。

「でもさ。二次戦に出ても1回勝たないとシード権をとれへんのかな？ 相手はどこが来そうなんや」

窓から試合を見ながら竜二が言った。試合は5回裏、1年生の攻撃が終了したところだ。三者凡退で終わっていた。

二次戦に出場するのは16チーム。シード権を得られるのは8チームなので、二次戦の初戦に勝てば夏季大会のシード権を得られる。シード権を得た8チーム同士は、夏の大会で準々決勝まで当たらない。決して1回戦が免除されるという制度ではない。

「二次戦の初戦は……ちよつとキツいかな」

「どこや。丹染か？ 山城工か？ それとも宇治西か？」

「全部違う」

竜二が挙げた高校は、どれも甲子園出場経験がある所で、いつもベスト8には入る実力を持っている。だが、綾北の二次戦初戦は違う高校と当たる。

中は苦笑いしながら、竜二に次の高校名を口にしよう促した。

「他に強いところは……もう双葉くらいしか思い浮かばへんわ」

「……………」

「は？ まさか……………」

「そのまさか。二次戦初戦の相手は双葉や」

苦笑いしながら言う中につられたのか、竜二も顔をひきつらせながら苦笑いを浮かべた。

「双葉か……ドンマイやな」

「まあ当たって砕けてくるわ。その前に一次戦で3回勝たなあかなけどな」

試合を見ながら中は話を進める。6回表、2年生の攻撃が始まっており、先頭打者の幸本星二が左打席に入っていた。

彼は2球で簡単に追い込まれたがその後粘り続け、マウンドにいる1年生の投手は優に10球以上を投じた。

「粘るな。あのバッター」

「守備側からすれば、あいつはかなり嫌なバッターやな。メンバー

には入ってへんけど、かなりの確率で出塁する」

中がそう言った直後、星二は4つ目のボール球を見送った。

中は、言った通りだろという顔を作って竜二を見る。竜二も、なるほどという顔で頷いた。

「1年生相手にヒドいことすんなあ」

「まあメンバー外の2年生からすれば、この紅白戦は数少ないアピールの場所やからな。みんな必死や」

竜二に説明しながら、中はグラウンドに目をやる。ちょうど、9番打者の和也が打席に入ったところだった。

初球から、彼はバットを振る。打球はセカンド正面のゴロとなった。

セカンドの1年生が前に出てきてボールを捕球する。中が、ダブルプレーかと思ったとき、ボールの持ち替えを失敗したセカンドの右手からボールがこぼれた。

「あつ……」

竜二が声をあげる。セカンドが慌てて拾うも、間に合わない。オールセーフで無死1、2塁となった。

投手がセカンドからボールを受け取る。彼らは何か言葉を交わしていた。

「焦ったみたいな……」

「ああ。もつたいないプレーや」

続く1番の岸本俊輔が送りバントを決め、1死2、3塁で道淵賢に代打の楠田誓を迎えた。

「こりゃあ2点くらい入るかもな」

竜二が呟く。しかし、中は首を振った。

「いや、無得点やるな」

「何でや。流れからして絶対に入るやる」

「むしろ、流れからして入らへんねや。見てみる、ピッチャーを。さっきまでの回とは雰囲気が違うやろ」

中はマウンドを指差す。投手はこのピンチにも表情が穏やかで、

少し笑っているようにも見える。

「確かに違うけど……。それでも点は入るやろ」

「まあ見てるって」

自信たっぷりには中は言う。その後彼は何も言わずに試合を眺めた。誓がたつた4球で三振に倒れた。竜二がこちらを見てくる。

「ま、まだツーアウトやからな。次は3番打者やる？」

「ああ。林は良い選手やぞ。能力的には、レギュラーの寺重と大差ない」

「なら点が……」

「見てたら分かることや。黙って見とこうぜ」

中がそう言い、2人が視線をグラウンドに向けたそのとき、教室のドアが勢いよく開いた。そこに立っていたのは、中がよく知る女だった。

「げ、花梨……」

「よう白波瀬。旦那を引き取りに来たんか？」

教室に入ってきた女。花梨に竜二が声をかける。旦那というのは中のことだろう。

花梨はつかつかと歩いて来ると、中の目の前に立った。

「西垣ごめん。中、借りてくわ」

「どうぞ自由に。煮るなり焼くなり襲うなり、好きにやってくれ」

「竜二、お前な……」

「中は黙ってて」

花梨にそう言われ、中は慌てて口を閉じる。彼女は特に怒っているようでもなかったが、怒っていないなくても怖いのが彼女だ。

花梨は一度だけため息をつく、教室にある時計を指差した。

「ティーバッティング、何時からする予定やった？」

「……………」

「喋っていいよ」

「……………2時です」

「今は？」

「……2時20分です」

「何でここにいるの？」

「それは……。今日は紅白戦やし……。どういふ感じになってるか気になるし……」

そこまで言つて、中は花梨の顔色を窺う。彼女は完全に無表情になつていた。

かなり怖くなつた中は、カバンを手にして立ち上がる。

「ごめん竜二。帰らなあかん」

「ああ。俺はもう少し見てから帰るわ」

「西垣バイバイ。中、早く！」

花梨に促され、中は急いで教室の出入り口へ向かう。そこで、彼は一度竜二の方を見た。

「林、どうやった？」

「……三振」

竜二の言葉を聞いて中は少しだけ笑うと、竜二に手を振つて教室から出た。

「優希。お前のところに代打を出してもいいか？」

ベンチでキャッチャー道具を外し終わった吉田宗は、隣でヘルメットをかぶろうとしてゐる千葉優希に言った。

6回裏。1年の攻撃は、9番の市橋政哉から始まる。2番打者である優希は、この回に必ず打席が回ってくる予定だった。

彼は頭にかぶりかけていたヘルメットを戻し、手にはめていたバツティング手袋を外しながら宗を見る。宗から見て、彼が怒つてゐるようには見えなかつた。

「俺が出続けるわけにはいかへんし、もちろんいいよ。代打を出されんのは慣れてるからな」

「ごめんな。萩原を代打に出すから、そう伝えといてくれ」

自嘲気味に笑う優希に手を合わせると、宗はネクストバッターズサークルに入る。宗と優希は同じ中学出身で、中学生生活の3年間、共にプレーしていた。優希は決して打力が無いわけではなかった。しかし彼は緊張しやすく、チャンスの場面ではよく代打を出されていた。

「ボール、フォア！」

政哉がフォアボールを選ぶ。1塁ベースへ走っていく彼を見ながら、宗は打席へと向かった。

宗が”それ”に気づいたのはそのときだった。彼が下を向くと、右足に履いているスパイクの靴紐がほどけていたのだ。

彼は思わず口元を緩めた。

あれは中学1年生の頃だった。当時入部したてであった宗だが、練習試合の2試合目には、たまに代打などで出させてもらっていた。その日も代打を告げられたのだが、打席に入る直前に靴紐が解けていることに気がついた。結び直そうかと思つたが、モタモタしていると先輩や監督に怒られるかもしれない。宗は、そのまま打席に入った。

中学生活初本塁打はそのとき生まれた。

その後も靴紐が解けたまま打席に入ったときには、必ずヒットを打っている。所謂ジंकウスというやつだ。

だが、自分で解いたときは何故か打てない。厄介なジंकウスだが、今は自然に解けた状態だ。

宗は、もちろん靴紐を結ぶことなく打席に入る。6点差なので小細工は必要ない。打つだけだ。

初球や。初球を打つ。

マウンドの和成を見ながら、宗はバットを構える。彼との対決は初めてだ。

セットポジションの和成が右足を上げて投球モーションに入る。それにあわせて、宗も体重を右足に移した。そして、その左手からボールが離れる。

外角の直球！

ある程度予測していたコースにボールが来たため、宗は思い切つてバットを振った。

「センター！」

内野手から声があがる。打球は和成の頭をライナーで越え、センターの前でバウンドしていた。

9 - 2 . 主役は遅れてやってくる (2)

「ストライク。バッターアウト！」

優希の代打で出た萩原治が粘りながらも三振に倒れる。それを確認して、豊田一はバッターボックスへと向かった。

途中で治とすれ違う。彼は何かを呟いたが、一には聞き取れなかった。ただ、彼の様子からして謝ったというのは理解できた。

治はよく粘ったと、一は評価していた。急な代打で必死にボールへくらいつき、和成に10球ほど投げさせたというのは上出来だ。

なんとかして繋がなあかな……

一は深呼吸すると、一度だけバットを振って打席に入った。

「頼むぞ豊田！」

「右方向やぞ！ 絶対フライ上げるなよ！」

ベンチから聞こえる仲間の声を吸収して、一はゆっくりと構える。何故かは分からないが、今なら打てそうな気がした。

サインの交換が終わり、マウンド上の和成がセットポジションに入る。そして彼の右足が上がり、投球モーションに移った。

左腕から繰り出されたボールは、一の胸元付近に向かってきた。彼は一瞬だけ焦ったが、上半身を少しだけ後ろに逸らして避けた。

いきなりのブラッシュボールか。次はどうくる？ 外角か？

頭の中で色々と考えながら、一は再びバットを構える。カウントは0ストライク1ボール。和成は既にセットポジションに入っていた。

和成の足が上がり、一もそれに合わせて右足に体重を移す。そして和成の左手からボールが離れた。

低めのボール。一がバットを振ろうとした瞬間に、ボールが曲がった。彼は慌ててバットを止める。

「ボール！」

ショートバウンドしたボールを捕手の小畑潤が体で止める。彼の

近くでボールは止まったため、ランナーが進塁するのは無理だ。

ハーフスイングをとられなかったことに少しホッとしながら、一は再びバット構える。

「ごちゃごちゃと考えてたらあかん……。来た球を打つ。それだけや。」

思考をリセットさせ、和成の投球に集中する。カウントは0ストライク2ボールであるため、一に有利だ。ファーストストライクを積極的に狙うことだけ考えた。

和成の足が上がる。そして投げられた3球目に、一の体は反応した。

カウントを取りにきたのだろうか。まるで球威が感じられない。いくら下級生とはいえ、こんな舐めたボールを投げられては腹が立つ。

しかしそれを口にするわけにはいかない。だが、バットでならいくらでも自分の思いをぶつけることができる。

舐めんな！

外角のストレートを逆らわずに弾き返す。打球は強烈な速さで一塁間を破って、ライト前へ転がった。

一の打球が速すぎたため、2塁ランナーである政哉は3塁で止まった。つまり一死満塁の状況で、4番打者である瀬高亮司に回ってきたのだ。

打席に入った亮司は、これまでになく緊張していた。この試合、1年生チームが作った最大のチャンスだ。このチャンスを生かすことができれば、まだ試合は分からない。だが、ここで自分が凡退してしまうと……。

今日はここまでノーヒットだ。不吉な考えが頭を駆け巡る。

気づけば、マウンド上の和成が既に投球モーションへ移っている。そしてすぐに初球が投げ込まれた。

「ストライク！」

全く反応できずにストライクを取られた。これは非常にまずい。今は打席に集中せねばならない。

集中して迎えた2球目は外角に外れ、カウントは1ストライク1ボールとなった。

よし、今の伊藤さんはコントロールがそんなに良くない。もしかしたらフォアボールだって……。

そう考えたのがいけなかったのだろう。3球目は見事にストライクゾーンへボールが決まったため、これで彼は追い込まれた。

まずい……。三振なんて絶対に嫌やぞ……。

亮司は一度だけ唾を呑み込む。今は、打てる気が全くしなかった。しかしそのとき、ベンチから声が聞こえた。それは静かな、しかし大きい声で、打席にいる亮司にもしっかりと聞こえた。

「瀬高！」

「安藤……？」

声のした方であるベンチを見ると、安藤克也が手招きをしていた。亮司は意外な声の主に驚くも、タイムをとってベンチへと向かう。

それまでベンチに座っていた克也は立ち上がると、亮司の肩に手を回して、彼の耳に口を近づけてきた。

「三振してこい」

「……は？」

克也の口から出た言葉に、亮司は思わず素っ頓狂な声をあげる。

彼は克也の顔を見るが、真剣な表情だったので、どうやら冗談ではなさそうだ。

「中途半端なスイングしてピッチャーゴロになるよりマシや。三振しても、二死満塁のチャンスは残る。いいな、思いつき振ってこい。それで三振しても文句はないわ」

克也はそう言つと、亮司の背中を思いっきり叩いた。正直かなり痛かったが、口にはしない。

亮司は小走りで打席に向かうと、一度ぺこりと頭を下げた。

を構えた。

和成の足が上がる。亮司は心の中で、フルスイングと唱えた。

ストレート！

和成から投げられたボールに対し、亮司のバットが動き出す。しかしその直後、ボールが曲がった。

スライダーだ。亮司は慌ててバットの軌道を修正する。ボールがバットの根元に当たったのを亮司は感じたが、そのままバットを振り抜いた。

「シヨート！」

誰かの声が聞こえる。打球はシヨートの後方にフラフラっと上がっていた。

亮司の打球は、克也が思ったよりも伸びていった。おそらく彼がバットを振り抜いたからだろう。

シヨートを守る林真史が懸命に追ってジャンプしたが、グローブがボールに届くことなく、打球はシヨート・センター・レフトの間に落ちた。

2塁ランナーである宗は、二三塁間の中間地点でハーフウェイの態勢をとっていたが、ボールが落ちる少し前に、3塁方向へとスタートを切った。

良いスタートや

ベンチから見ながら克也は思う。宗は足が速いということ、この試合を通じて分かっていった。打球を処理する人物によっては、ホームインも狙える。人物によるとは、強肩である小沢昇平が捕れば無理ということだ。

克也は固唾を呑んでグラウンドを見つめる。どちらかといえば、レフトを守る誓の方がボールに近い。この回から守備についている彼の肩力は分からないが、おそらく昇平よりは弱いだろう。

既に3塁ランナーコーチである杉山正和が、宗をホームへ向かわ

せている。誓が捕るか、それとも昇平が捕るか。
克也がじつと見つめる中、誓が打球を捕った。

「よしっ」

克也は思わず呟く。誓がすぐにホームへ送球するが、滑り込んだ宗の左手が先にホームベースに触れた。

「セーフ！」

西村雄吾のコールが聞こえ、1年ベンチが沸く。これで2 6。
まだまだ試合は分らないと、克也は自分に言い聞かせた。

「遥斗！」

スライディングしてからすぐに立ち上がった宗が、ベンチへ戻りながら大きな声を出す。ホームインしたからか、珍しく興奮しているように見える。

名前を呼ばれた神山遥斗は、何事かと宗に近づいた。

「どうした。何かあったか？」

「遥斗、今すぐ走れるか」

キャッチャー道具を装着しながら宗が言った。それに対して遥斗は頷く。1回表から常に、すぐ動けるようにしていた。

遥斗にとって今日の出番は代走だけだ。いつ呼ばれるか分からないため、それくらいの準備をしておくのは当然だった。

「もちろん」

「よし、じゃあ瀬高に替わって1塁ランナーに入れ。選手交代は俺が言っとくから、遥斗は全力で1塁まで走れよ」

宗の言葉に遥斗は頷く。そしてすぐに動きだし、帽子を脱いでヘルメットをかぶる。

西村の後ろを通り、宗に言われたように1塁ベースまで全力で走る。ベース上では、先ほどヒットを放った亮司が待っていた。

「ナイスバツティング」

「どん詰まりやけどな。神山、ミスしてもいいから思いっきりやれ

よ

「ああ」

亮司と会話を交わし、遥斗は1塁ベース上に立った。初めての試合ということで緊張はしている。だがそれ以上に、自分が野球の試合に出ているという感動の方が強かった。

「遥斗、1アウトな。ライナーバックやぞ」

この回から1塁ランナーコーチになっている優希の声を聞きながら、遥斗はギリギリとリードを広げる。彼が発したライナーバックという単語の意味は分からなかったが、おそらくライナーが飛んだら塁に戻れということなのだろう。

リードの仕方はこれでいいのだろうか。見よう見まねでしているが、自信がない。だが、今は他に集中するべきことがある。

マウンド上の和成が真つすぐこちらを見ている。確か左投げ投手の牽制は、右足を踏み出してするものだったはずだ。まだ慣れていないため、慎重に動かなければ牽制で刺されてしまう。

和成が右足を上げた。そしてそのまま、それをホームベースの方へ踏み出す。牽制は、来ない。遥斗は少しリードを広げる。遥斗が見た限り、ランナーは投手が投げるとリードを広げていたためだ。5番打者である田中聡のバットが動き出し、直後に金属音が鳴り響く。ライトへ高いフライが飛んだ。

この場面、俺はどうすべきなんや

どうすればいいのか全く分からない。遥斗は、救いを求めて優希の方を見る。

「ハーフウェイや、遥斗」

優希が救世主になることはなかった。彼は確かに教えてくれたが、遥斗には「ハーフウェイ」の意味が分からなかったのだ。

9 - 3 ・ 主役は遅れてやってくる (3)

ライトを守る星二が打球を取る。それと同時に、タッチアップの構えを見せていた2塁ランナーの1が、3塁へスタートを切った。

打球が伸びたのもあり、3塁がセーフになるのは間違いない。ネクストバッターボックスにいる克也はそう思った。

だが、星二の送球を中継したセカンドの俊輔は、サードへ送球した。当然、それはセーフになる。

「翔馬！ セカンドや！」

俊輔が大声で、サードの高野翔馬を呼んだ。それを聞いた克也も、視線をセカンドベースへ向ける。

神山！？

セカンドベースの手前に遥斗がいた。タッチアップでもしたのだろうか。

翔馬がセカンドに送球する。ライトフライで1塁ランナーを2塁に進ませるなんてありえない失態だ。なんとしても避けなければならぬだろう。だがボールが俊輔に渡るより早く、遥斗がセカンドベースに滑り込んだ。

「セーフ」

西村が腕を横に広げる。沸き上がる1年ベンチ。それらを感じながら、克也は立ち上がると、ヘルメットを外した。

俺の出番も、終わりやな

「荷田！ 代打や。俺と交代」

克也は、ベンチの奥で素振りをしている荷田春樹を呼ぶ。彼は一瞬驚いた様子を見せたが、すぐに走ってきた。

克也は春樹を打席に向かわせる。その直後、キャッチャー道具を装着し終わった宗が、克也に詰め寄ってきた。

「というわけで、俺は降板。七回のマウンドには神山を……」

「何勝手なことやってんのや！」

小声で、しかし力を込めた声で宗は言う。表情から察するにどうやら怒っているようだ。克也はわざとらしく肩を竦める。

「何でそんなに怒るんや。ええやる別に。それに、俺1人で投げきるわけにはいかんやろうが」

「確かにみんなを使うべき紅白戦で完投させるのは良くない。でも遥斗は……」

「野球初心者、やる?」

克也の言葉に、宗の目が開かれる。

まさか克也がそれを言い当てるとは思っていなかったのか。だがそれは、遥斗の動きを見ていたら簡単に分かることであった。

「気づいてたんか……」

「アホか。あんなリードの仕方見てたら誰でも気づくわ」

「なら何でや。遥斗が初心者って分かって何で登板させんねや。しかも次は小沢さんからやぞ」

「関係ないわ。ここで投げといたら今後のためにもなるやろ。それに……」

克也は宗に自分の右手を開いて見せる。真っ赤になっているそれを見た彼は、再び目を見開いて克也の顔を見た。

彼のリアクションを克也はおもしろいと思いつつ、右手を引く込める。

「……いつからや」

「2回裏で凡退したときに、変な打ち方したみたいや。それからずっとこれや」

「何ですぐに言わんかった……」

「怪我程度でマウンドを降りれるかよ」

「は? でもお前、今はマウンドを降りるって……」

「事情が変わったんや。あ、荷田の野郎打ちやがった」

克也は話を変えるかのようにグラウンドへ目をやる。それにつら

れ、宗もグラウンドに目を向けた。

克也の代打として出場した春樹の打球は、ふらふらっと上がり、ライトである星二の前に落ちようとしていた。

遥斗の足なら還れる。

遥斗は3塁を回ってホームに向かう。なるほど、確かに克也の言う通りだ。彼のベースランニングは明らかに素人のものだった。星二もなかなかの強肩であるため、ホームインするのは無理かもしれない。

しかし元々の足が速いため、彼はその後で一気にスピードを上げた。タイミングは際どい。

「神山、滑れ！」

次打者である本田健一郎 7番松田賢之の代打 が指示を出す。それを見たのか、遥斗は滑り込む態勢に入った。だが、何かがおかしい。

「吉田、多分あいつは頭からいくぞ」

「あの馬鹿野郎……」

宗が唇を噛みながら呟いたのとほぼ同時に、遥斗はホームへへっドスライディングをした。

「やっぱり初心者……か」

隣で克也が呟く。宗はため息をつき、それを返事の代わりにした。

「セーフ！」

西村の声が聞こえ、遥斗は心の中でガッツポーズを作った。これで4対6、試合はまだまだ分からない。

彼はすぐに立ち上がると、ユニフォームについた土を手で払いながら、宗らが待つベンチへと戻る。そして、宗が険しい顔をしていることに気づいた。

怒ってる？ 何でや……

考えても分からない。怒られるのはあまり好ましくないが、何か

理由があるのだろうから、聞いておくべきだろう。遥斗はヘルメットを外し、宗の前に立った。

「俺、何かミスした……？」

「ミスというか、これは俺が事前に言わへんかったことが原因やけど……」

「お前、さつきヘッドしたやろ」

宗の言葉を遮り、彼の隣にいた克也が言う。遥斗はこのとき初めて、克也が宗の隣にいたことに気がついた。ヘッドとは、ヘッドスライディングのことだろう。それくらいは分かる。

「してもいいやろ。別にホームベースやからってヘッドスライディングしたらダメって決まりがあるわけやないし……」

「あんな、遥斗」

宗が遥斗の右手を掴む。今まで知らなかったが、宗の力はなかなか強かった。共に野球を続けていると、これからも親友の新たな一面を知るときがくるだろうか。

「どうした……？」

「投手は基本的にヘッドスライディングをするな。もしこの右手でボールを投げられへんようになったらどうするんや」

「そういうこと……か」

「分かったか？」

「ああ、次からは気をつける」

宗の言葉に遥斗は頷く。なるほど、確かに投手としての自覚が足りなかった。

彼は一言謝った後、ドリンクを飲むためにベンチ内に戻ろうとした。とりあえず呼吸を整えなければならない。だがその前に、宗の口が開いた。

「遥斗、次の回から登板するぞ」

「今、何て言った……？」

「遥斗、次の回から登板するぞ」

宗は全く同じ言葉を口にする。遥斗は一度克也の方を見て、再び

宗に問う。

「こいつは？ 安藤は降板するんか？」

「アホか。俺のところは荷田を代々として送ったやろ。俺はもう試合に出れへん」

「そういうことや。投手はもう遥斗しかおらん」

克也と宗が共に答え、遥斗をジッと見つめてきた。

正直、投げたいという気持ちはある。だが、まだ初心者の自分に務まるのか、自信がなかった。それでも投げるしかない。今はそういう状況だった。

「……分かった。抑えられへんかもしれんけど、やってみる」

「頼むぞ。どんなに打たれても気にするなよ。思い切つて投げたらいい」

宗が言い、キャッチャーミットで軽く遥斗の胸を叩く。不思議とそこから力のようなものが送られてきた気がした。

自分に力は無い。それは遥斗も自覚している。だが、宗のリード通りに投げれば、自分でももしかしたら抑えられるのではないかと思う。宗にはそれだけの雰囲気があった。

そして、遥斗の右肩に何かが触れる。それが克也の左手だと気づくのに、時間はかからなかった。

「打たれたら殺す。絶対に抑えてこい」

安藤はそれだけ言うと、遥斗に背を向けて離れていく。その背中からは、途中で降板しなければならぬ悔しさがにじみ出ているようだった。納得している様子を見せてはいたが、怪我がなければ完投していたであろう彼は、やはり心の底に投げたい思いがあるのだろう。それを必死に抑えているにすぎないのだ。

宗とは全く違う言葉であったが、それもまた頼もしいものであった。何故かは分からないが、安藤の雰囲気が悪くなったと感じている。それも影響しているのだろうと遥斗は思った。

「よし、しっかり打たれてくるわ」

克也に向けて声を出す。一瞬彼が振り向いたが、その口元は少し

緩んでいた。それは彼ができる精一杯のエールと遥斗は捉えた。

そして、宗からボールが渡される。キャッチボールをするのだから。

時間もあまりないため、遥斗はすぐに宗とのキャッチボールを開始した。

10球ほどキャッチボールしたところで、健一郎が三振にたおれたためチェンジとなった。だが、この回に4点を奪ったため、ベンチから守備に向かう1年生メンバーの表情は明るかった。

この流れを自分が断ち切るわけにはいかない。遥斗は気合いを入れるために自分の頬を軽く叩くと、マウンドへと走った。

「神山、楽にな」

「相手は小沢さんや。打たれても気にすんなよ」

政哉と一がマウンドに寄って声をかけてくれた。遥斗はそれに対して強く頷いて答える。彼らの声は非常に心強かった。

マウンドに置いてあるボールを拾い、宗を見る。彼はすでに座っていた。遥斗も、すぐ投球練習に入る。

宗が構えたところにボールを投げ込む。スピードが無いのは自覚している。だからせめて、彼が構えたところに寸分変わらず投げたかった。

「ナイスボール。気楽にな、気楽にな」

投球練習を終えて内野のボール回しが行われ、最後にボールを受けたファーストの春樹が、ボールを遥斗に投げながら言った。遥斗もボールを受けた後で頷く。

「遥斗」

「うわっ」

すぐ近くに宗がいた。思わず変な声を出してしまったが、遥斗はすぐに普通の声で尋ねる。

「どうした？」

「一応確認を。遥斗は直球しか投げられへんよな？」

宗の言葉に遥斗は頷く。中学時代にしたキャッチボールで、たま

に軽くカーブを投げていたが、こんな真剣な試合で使える代物ではない。数日前に公園で投球練習をしたときでさえ自重したくらいだ。今日はストリートだけでなんとかするしかない。

「よし、分かった。遥斗は俺が構えたところに全力で投げてください。遥斗の肩を軽く叩き、宗は戻っていき。」

目の前にも頼りになる奴がいる。遥斗は1度だけ小さく息を吐くと、打席に入ろうとしている昇平を見た。

抑えられるとは思わない。だが、抑えたい。チームのみんなのために何としても彼を抑えたいと、遥斗は思った。

宗がマスクを被って座る。当然ながら球種のサインは出ない。彼は、昇平の膝元、内角低めにキャッチャーミットを構えた。

遥斗は大きく振りかぶり、投球モーションへと移る。実戦で投げる初めてのボールだ。宗が構えたミットに向かって全力で投げる。

リリースされたボールは真っ直ぐに、宗が構えるミット目掛けて走る。昇平はバットを動かすことなくそれを見送った。

「ストライク！」

西村の腕が上がる。ホツとした。宗が、ナイスボールと言いながら遥斗にボールを投げ返す。

「ナイスピッチ！ 神山、ええぞ！」

「俺のところに打たせる！」

周りのチームメイトが声をかけてくれる。マウンドというのは孤独な場所なのだ、以前宗に言われたのだが、そんなことはない。すぐ近くにたくさん仲間がいるのだから、孤独とはとても思えなかった。

2球目も、宗は内角低めに構える。2球続けても大丈夫なのかと少し思ったが、遥斗は事前の指示通りに頷いた。

9 - 4 ・ 主役は遅れてやってくる (4)

次は外角だろうか。打席に立つ昇平は、投球モーションに入った遙斗を見ながら考えた。さすがに、あの程度のボールを2球連続で同じコースに投げてくるとは思えない。

ストレートは速くない。むしろ遅いくらいだ。変化球はまだ1度も見ていないが、おそらく大した変化球は投げられないのではないかと彼は考えていた。

遙斗がボールをリリースする。昇平は、彼が外角に投げてくるものだと思っていたのだが、実際は違った。内角低め、初球と全く同じコースだった。

「何やと!？」

咄嗟に腰を回して対応する。幸い球速は遅いため、振り遅れることはない。だがバットのヘッドが外回りのため、ヒットにするのは難しいだろう。

上から振り下ろしたバットでボールを捉える。昇平はそこで手首を返し、ボールは3塁側のファールゾーンを転がっていった。

「ちっ……」

一度打席を外して素振りをする。落ち着かねばならない。苛立つてはいけない。

「ナイスボールや、遙斗」

西村から新しいボールを受け取った宗が、声を掛けながら神山にボールを投げた。

まさか2球続けて同じコースに投げてくるとは思わなかったが、このキャッチャーの考えることだ。もっと思考を柔軟に使う必要があるだろう。

おそらく、あの投手はコントロールが良い。宗にとってはリードのしがいがあるということだ。

「柔軟に……」

昇平は僅かに笑いながら呟くと、再び打席に入った。

昇平が打席に入った。宗は、反射的に彼の足元に目をやる。打席内での立ち位置を変えているかもしれないからだ。それにより、当然リードも考えなければならぬ。

だが、彼の足は先ほどまでと全く変わらない場所にあった。どうやら、立ち位置を変えるために打席を外したわけではないらしい。

予定通り、外角低めのボール球で大丈夫そうやな。

単純なリード。だが、遅い球を2球連続で同じコースに投げたことで、昇平も多少は考えているはずだ。そして、単純なリードが生きる。

昇平の顔付近でキャッチャーミットの音を鳴らし、外角低めに構える。遥斗のコントロールは抜群に良い。きっと打ち取れるはずだ。「ほう……」

そのとき、不意に西村が呟いた。何事かと思ったが、その理由はすぐに分かった。バッターボックスに立つ昇平の構えが変わったのだ。

ゆらゆらと体を揺らしながら、バットを体の前に構える。落合博満や中村紀洋で知られる、神主打法のようだ。

いや、少し違うか……？

昇平の神主打法は、従来のそれよりもバットの位置が明らかに低かった。普通、バットの高さは顔の辺りであるのに対し、彼は、腹の辺りにバットを構えている。

何か狙いがあるのだろうか。一般的に神主打法は、長打力と引き換えにバットコントロールが難しくなると言われている。

だが、今のカウントは2ストライクだ。わざわざバットにボールを当てにくくする打者が果たしているだろうか。いや、いないだろう。

遥斗は、既に振りかぶっている。昇平の構えは気になるが、今か

らミットを動かせば、彼は戸惑うだろう。それは避けたい。

遥斗のモーションに合わせて昇平が左足を上げる。普通ならば、それと同時にバットを後ろに引きトップを作るのだが、小沢のそれは明らかに普段と違っていた。

テイクバックが小さい……。長打は捨てたんか？ でも、こんな打ち方で打球が飛ぶわけないやろ……

遥斗の右腕からボールが放たれる。それは、宗が構えた所に真っ直ぐ向かってきた。

昇平のバットが動き出す。とはいっても、動く距離はほとんどない。直後に、それはボールを捉えた。

そんな打ち方で飛ぶわけない。これで1アウト……

打球は、宗も目で追いきれない速度で飛んでいく。かろうじて右方向に飛んだのが分かった宗は、慌てて顔を右に向ける。白球が、セカンドを守る千尾啓太目掛けてライナーで飛んでいた。

「セカン……」

宗が声を出そうとした瞬間、啓太のグローブをボールが弾いた。衝撃が強かったのか、彼のグローブはその左手から地面に落ちていた。

後ろに転々と転がるボールを啓太が急いで拾う。だが、昇平は既に1塁ベースを駆け抜けていた。

なんてパワーや。腕だけでグローブを吹っ飛ばした……。いや、腰の使い方が上手いから打球が飛んだんか……？

宗は唇を噛み締める。絶対に打たれないと思っていたのに打たれた。これはかなり屈辱的だった。

あれこそ、理想的なコンパクトスイングだろう。向こうが上だったと認めざるをえない。

「良いボールやったぞ。ナイスピッチ！」

遥斗に声をかけると、彼は頷いた。その表情からは、あまり気にしている様子は窺えない。

それでいい。宗はマスクを被りなおすと、ホームベースのすぐ後

るに、再び座った。

「やっちまった……」

グローブをポンポンと叩きながら、啓太はため息をついた。

真つ正面のライナー。いくら打球が速くて少し高かったとはいえ、捕らなければいけない打球だ。マウンドにいる遙斗にとって、この試合最初の打者でもあった。絶対に出してはいけないランナーだったのだ。

「千尾、気にすんなよ。あれは無理や」

ファーストを守る春樹から掛けられる言葉が、余計に辛い。だが、啓太はそれを顔に出さないようにして頷いた。今は悔やんでいられない。まだまだ考えることはたくさんあるのだ。

「盗塁されたら俺が入るし」

「無いとは思いつけど、バントきたらダッシュ頼むぞ。ベースカバ―は俺が入る」

ショートの政哉やファーストの春樹と声を掛け合う。ミスしたことは仕方ない。今は、これ以上ミスをしないうために最善を尽くすのみだ。

カウントが0ストライク2ボールになった。遙斗のボールには球威が無さそうなので、宗も慎重にリードしているのだろう。

次はストライクを取りにいくなはずだ。無論、それは打席にいる河北亮も思っているだろう。啓太は姿勢を低くし、打球に備えた。

遙斗がボールを投じる。すぐ後に、亮のバットが動き、それを捉える。打球は自分の右側へライナーで飛んできた。

「クソッ」

反射的に体が飛ぶ。抜かせるわけにはいかない。

グローブに衝撃。だが、今回は落とさない。ガツチリと白球を掴み、啓太の体は地面に落ちた。

すぐに立ち上がって、1塁ランナーを確認する。既にランナーは

ベースに戻っていた。

「ナイスセカンド！」

「千尾、いいぞ！ ナイスプレー！」

掛けられる声を聞きながら、啓太はグローブからボールを取り出す。それを軽く手でこねた後、遥斗に投げ返した。

「ナイスピッチ！ 1アウト！」

人差し指を立てた右手を頭上に掲げる。

名誉挽回できたのだろうか。それは分からないが、少なくとも、啓太には自信が戻っていた。

助かった。

その表現が1番適しているだろうと、遥斗は啓太からのボールを捕りながら思った。抜けていれば無死1、2塁、もしくはさらに悪いピンチを招いていただろう。

いけない、ダメだ。もっと楽しめと、自分に言い聞かせる。何はともあれ1アウトだ。初めて打者を打ち取ったのだ。

「遥斗、1アウトな！ ナイスピッチ！」

宗の言葉に、遥斗は帽子の鍔を触って答える。

宗のリード通りに投げれば抑えられる。マスクを被ってどっしりと座る彼を見ながら、遥斗は改めて思った。

右打席に、6番打者高野翔馬の代打である奥井慎也が入る。

セットポジションに入り、遥斗は小さく息をついた。牽制球を投げられない遥斗にとって、この間は大切なのだと、以前宗に言われたのだ。十分に間を取り、遥斗は左足を上げた。

「逃げた！」

不意に声が聞こえた。おそらく、一塁手である春樹の声だ。

盗塁されたのだと、すぐに分かった。急いで投げなければいけない。ゆっくりしていると、いくら宗でも刺すことはできないだろう。いつもより早く足を下ろし、いつもより早くボールを指から離す。

しまった……

適当なフォームで投げたからか上手く制御できず、白球はホームベースの手前でワンバウンドした。宗が、体を張ってそれを止める。当然、2塁には投げられない。

やってしまった。遥斗が少し顔を俯かせていると、宗がタイムをとってマウンドに駆けよってきた。

「ごめん……」

「謝らんでいい。荷田の声に反応してもうたんやる？」

「うん……」

「仕方ない、気にすんな。遥斗はこれまで通り投げたらいい。ランナーのことは考えんでも大丈夫や」

「……分かった」

「よし、頼むぞ。ランナーはさつきより見やすいんやから、神経使いなよ。バッター集中でいこうぜ」

宗はそう言ってキャッチャーミットで遥斗の胸を叩くと、守備位置へと戻っていった。

2塁ベースの上で屈伸運動をしている昇平を1度だけ見て、遥斗は視線を宗に戻した。彼は両手を大きく広げ、その後で内角にキャッチャーミットを構えた。それだけで、的が大きくなったように感じるのは、気のせいだろうか。

遥斗は頷き、セツトポジションに入る。もう乱されない。ただ腕を振り、白球を宗のミットに投げ込むだけだ。

既にリードをとっている昇平をもう1度を見て、遥斗は左足を上げる。牽制は、牽制球を投げるだけじゃない。目で牽制するのも有効なのだ、彼はこの試合を見ながら気づいていた。

盗塁の心配はない。遥斗は右腕を振り、ボールを離した。

内角。宗が構えた所にボールは向かった。慎也のバットが動き出す。ガキッという鈍い音とともに、打球は力なく3塁線の方へ転がった。

「サード！」

宗の声が聞こえ、打球を捕りにいこうとした遥斗は足を止めて自重した。三塁手の一がダツシユしてきて捕球する。そして間髪入れずに、ファーストへと送球した。

慎也がベースを踏むより早く、ボールが春樹に渡る。当然、西村はアウトを宣告した。

「ナイスサード！」

「神山はサードのベースカバーや」

一にそう言われ、遥斗は慌てて3塁ベースを見る。そこには、遊撃手の政哉とランナーの昇平がいた。ベースカバーのことなど、彼の頭には完全に無かった。

「すまん……」

「気にするな。次はしっかり頼むぞ。2アウト、落ち着いてな」

一の言葉に対し少し微笑むと、遥斗は春樹からボールを受け取る。自分の投球で二死を取れたことは、正直、かなりの嬉しさだった。

グローブからボールを右手に移し、遥斗はしばらくそれを見つめた。楽しい。ボールを投げることに、野球をすることがこんなに楽しいとは、中学時代には全く気づかなかった。

もっと思いつきり投げたい。

セツトポジションに入り、宗が構えるキャッチャーミットを見ながら、遥斗は思う。全力で投げたボールを、あのミットに突き刺したい。

初球、いつものように丁寧に投げる。膝下、ストライクゾーンギリギリのボールを、打席の潤は見送った。

ホッと一息つき、2球目を宗のサイン通り 外角低め に投げる。僅かにホームベースからずれたボール球を投げたのだが、潤のバットは動いた。しかしそれに当たることなく、ボールは宗のキャッチャーミットに収まった。

「ナイスボール！」

周りからの声心地よい。遥斗は1度後ろを振り返り、グラウンドを見渡す。自分と宗以外の7人を順々に見て、彼は再び宗と向き

合った。

許してくれよ。全力で投げる……

宗が再び外角低めにキャッチャーミットを構えたのを見て、セツトポジションに入っていた遥斗は左足を上げた。フォームは変わらない。だが、右腕を振る速さは、先ほどまでとは比べ物にならない。しまった。

しまった……

ボールが高めに浮いたのが分かった。打つな、と彼は強く念じる。だがその思いも虚しく、潤のバットは動き出した。

ダメだ、打たれる。遥斗は直感的にそう悟る。直後、甲高い金属音がグラウンドに鳴り響き……かなかった。遥斗は啞然としながら、投げ終えた恰好のまま止まってしまっていた。

グラウンドに響いたのは、キャッチャーミットにボールが収まる乾いた音と、西村が発した声だけだった。

「ストライク、バッターアウト！」

9・5・主役は遅れてやってくる(5)

「6対4で、2年生チームの勝利ですか。接戦ですね」

「ああ。小沢や河北は別として、2年生のほとんどが実戦不足だからな。感覚が鈍っていたのかもしれない。1年生の守備力もなかなか高かったしな。攻撃も、最終回こそ呆気なく三者凡退だったが、6回裏の集中攻撃は見事だったぞ」

「なかなかの豊作ですか、今年は？」

電話の相手から質問を受け、西村はスコアブックを手元に寄せた。見るのは当然、今日行なった紅白戦のところだ。

しばらくそれを眺めた後、西村は再び携帯電話に向かって話し始めた。

「良い捕手が入った。事前の情報から、良い選手だということは分かっていたんだが、予想以上だったよ。春の大会で使う可能性もある」

「春の大会って、あと数日で開幕ですよ。そんなに凄かったんですか」

「ああ。1年だった頃の松永よりも良いよ。育ってくれば、お前以上になるかもしれない」

「お、言いますね。そりゃあ楽しみだ。期待しておきますよ。そいつの名前は？」

「吉田だ。地元の大和中学出身……そういうば、お前も大和中学出身だったか？」

「はい。とはいっても、通っていたのはもうかなり前になりますけどね。大和中……吉田……」

電話の相手は笑いながら言った後、急に考えこむようにして単語を呟きだした。

「どうした？」

「あの、もしかして、吉田ソウですか？」

「ああ、確かそのような名前だったかな。知り合いなのかな？」

頭の中で吉田宗という漢字を思い浮かべながら、西村は訊ねた。

「はい。以前会ったことがありまして、そのときに少しだけ会話をしました。そうか、あいつが綾北に……」

「気になるか？ また暇なときがあれば、覗きに来てくれよ。そっちも練習大変だろうから難しいとは思うが」

「はい。都合が良ければ、夏の大会も見に行きたいと思っています」「楽しみにしてる。じゃあ、またな。今年こそ神宮いってくれよ、卜部」

「はい。失礼します」

その声を聞き、西村はかつての教え子との会話を終了すべく、通話終了ボタンを押した。

西村は携帯電話を閉じ、机の上に置く。時刻は午後7時。新学期が始まってすぐだからか、教員室ではほとんどの教師が忙しそうに仕事をしている。彼もその1人だが、卜部紘輔からの電話があったため、少し中断していた。

紘輔とは、彼が卒業してからも頻繁に連絡をとっている。彼にとって西村は一応恩師であるが、西村にとっても紘輔は『恩子』であると言えた。彼がいなければ、ベスト4という経験はできなかっただろう。

「確かに、今年は豊作だな」

椅子の背もたれに深くもたれながら、西村は再び今日のスコアシートを見る。

野手なら吉田宗・豊田一のプレーが際立っていた。試合が接戦になったのは、彼らの力が大きい。

登板した投手は2人。先発の安藤克也は6失点したものの、ナツクルなど、面白いピッチングだった。そもそも、2年生相手に6失点というのは十分立派と言えよう。

そして、神山遥斗だ。投球練習での球速があまりに遅かったため、正直全く期待していなかったのだが、結果は無失点。遅すぎてタイ

ミングが合わなかったただけだろうが、丁寧にコーナーを突けていたのは褒められる。

それにラストボールは、それまでと全く違った。球速だけではない、ボールの出所が全く見えなかったのだ。何故ラストだけなのかは分からないが、彼も面白い選手だ。

「問題は吉田・豊田をどうするか……」

3打数2安打、3回に見せた強肩、5回の好ブロック。実力でいえば、吉田宗は小畑潤よりも上だ。

同じく豊田一も3打数2安打。何度も攻守を見せた。彼も、高野翔馬より実力はあるだろう。

3年の捕手・三塁手が松永中・海田和也しかおらず、昨年の秋季大会では小畑潤と高野翔馬をベンチに入れていた。もちろん、今度の春季大会もそのつもりだった。

個人的には、やはり1年生の二人をベンチに入りたい。特に吉田宗は絶対に入れたかった。だが、高校野球の試合経験がほぼ0の彼らを入れることによって、逆にチームのリズムが乱れるかもしれないことは予想できる。

「いや、ウチはそこまで脆くないか」

上級生が上手くサポートしてくれるだろう。幸い、春季大会は毎試合ベンチ入りメンバーを変えられる。それに、大会までの練習試合も残っている。それで様子を見るのも悪くない。

西村は再びスコアシートを机に置き、仕事へと戻った。

「痛い……」

「聞き飽きたわ、それ」

「お前、それでも親友か？ キャッチャーか？ 女房役か？」

朝練を終え、教室へと向かう廊下で、右肩を押さえながら遙斗は軽く宗を睨んだ。しかし宗は、何も気にしない様子で答える。

「1イニングとはいえ、あれだけ投げたんやから当たり前や。まあ、

どうせ暫くは投げへんやろうから安心して走り込め」

「ちえっ……」

未だに右肩を擦りながら、遙斗は教室のドアを開ける。ショートホームルームまで、あと数分。既に、担任の長嶺博之も教壇に立っていた。

確かに、この痛みは筋肉痛のそれと近い。初めて試合で投げたというのが、よほどキツかったのだろう。一応試合後に軽いアイシングはしたのだが、していなかったらもっとキツかったのかと思うとゾツとした。

投球に慣れていると痛みは無くなるのだろうか。後で克也に聞いてみようと思った。答えてくれるかは全く自信が無いが。

そのとき、聞き慣れた、そして心地よい声が、遙斗の耳に入ってきた。

「遙斗、ヨシムネ、おはよう」

「おう、おはよう」

「おはよう水原」

マネージャーは、数日交代で朝練の手伝いをする。今日は非番であつた水原光が、相変わらずのカワイイ笑顔で挨拶してきたのだ。表情には出さないが、内心でテンションが上がっていると、光に挨拶されてから、隣で何故かニヤニヤしていた宗が、とんでもないことを口にした。

「ああ、女房役なら水原がいるやんか」

「ばっ……かやろう!」

「え? 私がどうしたって?」

遙斗は、慌てて宗の口を左手で塞ぐ。少し油断すればこれだ。

遙斗が野球部に入ってから、宗が光のことで遙斗をからかうことが増えた。中学時代は、帰宅部・野球部・吹奏楽と別れていたもので、そんなことはあまり無かったのだが、全員が同じ部に所属してる今は、イジリやすいのだろう。

親友の恋を応援する気はないのだろうか。

「いや、何でもない。気にすんな」

宗の口を塞いだまま、遥斗は苦笑いを浮かべて言う。光も、深く追求することはなかった。宗の発言も、正確には聞き取れなかったのだろう。

「まあいいか。ほら、もうすぐチャイム鳴るから、早くユニフォームから制服に着替えや。着替えてないの、二人だけやで」

そう言っつて、光は自分の席へと戻っていった。遥斗も、ようやく宗を解放する。

解放された彼は、遥斗を怒ったり睨んだりすることはなかった。

むしろニヤニヤと遥斗を見ながら席に戻っていく。相変わらず、そんな表情をしながらも下品に感じないところが、余計に腹が立つ。

「神山、早く着替えて席につけ」

「は、はい。すみません」

いつの間にか、ショートホームルームまで1分を切っていた。ほとんどの生徒は、既に教室の中へ入ってきている。

右肩を擦りながら、遥斗は自分の席へと急いだ。

10-1・春季大会、開幕(1)

綾波北高校

春季大会1次戦1回戦

vs 島福南高校

ベンチ入り選手 18名

1	寺島 駿	3年
2	松永 中	3年
3	河北 亮	2年
4	木原 勝弥	3年
5	海田 和也	3年
6	寺重 大輔	3年
7	森山 智勝	3年
8	小沢 昇平	2年
9	井口 裕	3年
10	村井俊之介	3年
11	藤澤 翔也	2年
12	吉田 宗	1年
13	鈴木 昭宏	3年
14	岸本 俊輔	2年
15	豊田 一	1年
16	林 真史	2年
17	丸田 純平	3年
18	芝田 一貫	3年

記録員：白波瀬花梨 3年

ボールボーイ内：小田 陽治 3年

ボールボーイ内：黒田 清 3年
ボールボーイ外：福井 優 3年

Cゾーン 組み合わせ表

【1回戦】

綾波北vs島福南

【2回戦】

綾波北 - 島福南 vs 黄画工

藤草 vs 条太町

【ゾーン決勝】

(綾波北 - 島福南) 黄画工 vs 藤草 - 条太町

「いよいよ試合やな」

春季大会1次戦1回戦の試合会場である島福南高校へ向かう電車の中、神山遥斗は隣で吊革に掴まっている吉田宗に話しかけた。右肩の痛みは、紅白戦の二日後には消えていた。

オープン戦として、これまでに練習試合は数試合行われていたが、試合中も基礎練習を行うことが多い1年生にとっては、まともに試合を観戦するのは今日が初めてだ。もっとも、試合に出ている1年生も何人かはいる。

「……せやな」

空いている左手で、スライド式携帯電話の画面を何度もスライドさせながら、試合に出ていたメンバーの一人である宗が答える。その声には、いつものような覇気が全く感じられなかった。

「どうした？ なんか、らしくないぞ」

「いや、まあ……。やっぱり、ちょっとは緊張するっていうか……」

そう言いながら、宗は携帯電話いじりを止め、それをブレザーのポケットにしまった。彼の表情から、今やっと、自分がしていた行動に気付いた、ということが分かった。今まで無意識におこなっていたのだろう。相当緊張しているらしい。

その原因はハッキリしている。昨日の練習後おこなわれた春季大会の背番号渡しで、背番号を貰ったからだ。昨日は、緊張しているというよりも、むしろ興奮しているようだった。表情には出していなかったが、遥斗には容易に分かった。が、やはり当日になって緊張してきたのだろうか。

「宗でも緊張するんやな」

「そりゃあな。試合が始まってしまえば緊張なんてせんけど、試合前はな……。しかも、公式戦やし、いつも以上に緊張してるわ。あいつの精神力が羨ましいよ」

苦笑いしながら、宗は左を向く。その視線の先には、イヤホンを両耳に装着して目を瞑っている豊田一がいた。腕を組み、ドツシリと座席に座っている。彼も試合に出ていたメンバーだ。たしかに、緊張しているようには見えない。

「ん……？」

よく見ると彼の右足は、ピクピクと動いている。貧乏ゆすりというやつだろうか。揺らす速度は、異常なほど速い。

仕方ない。遥斗は苦笑いを浮かべながら思った。緊張するなという方が無理だろう。

ちょうどそのとき、車内アナウンスが、間もなく下車予定の駅に到着することを告げた。

「緊張してるか？」

試合前のウォーミングアップが終了し、試合前ノックを始めるた

めにベンチ前へ整列していた一は、不意に後ろから肩を叩かれた。振り返ると、二塁手のレギュラーである、3年生の木原勝弥がいた。これまで会話したことなどほとんど無かったが、彼の表情はいつも穏やかで、人柄は良さそうな印象を持っていた。

「は、はい……」

「ハハハ。まあそう堅くなるな。和也は上手いし優しいし、遠慮なく教えてもらえ」

「はい。ありがとうございます」

小声で勝弥と会話をしていると、すぐにノック開始の時間となった。松永中の掛け声とともに、一塁選手は一斉にダイヤモンドへと駆け出す。

3塁ベースの脇までダッシュで行き、到着するとすぐに振り返る。ノック前のボール回しが始まるのだ。ボール回しは4つのベースで行うため、遊撃手であるはずの林真史も、3塁ベースへと来ている。「失敗してもいいから、みんなの動きを真似して思いっきりな」

「はい！」

真史の言葉に、一は力強く頷く。今ダイヤモンドにいる1年生は、自分しかいない。宗は、今日の先発投手である寺島駿が行う投球練習の相手を務めている。本来ならば正捕手である中が務めるのだが、公式戦の試合前ノックを宗に任せるのは、さすがに良くないと判断されたらしい。多少心細いが、弱音は吐けない。

ボール回しが始まった。気合いを入れ、自分の番を待つ。だがその時間も僅かで、素早く回るボールは、すぐに一の元へとやってきた。

本塁からきたボールを捕り、すぐさまステップを踏んで2塁へと投げる。それは、勝弥の胸の前に構えられたグローブに、吸い込まれていった。

「ナイスボール！」

「豊田、いいぞ！」

1年生だからであろうが、周りから多くの声が掛けられる。その

とき、ようやく自分がメンバーに選ばれたという実感が湧いた。

もう緊張はしない。一は、大きなミスをすることなく、試合前ノックを乗り切った。

すぐ後に、島福南高校の試合前ノックが始まった。

「ナイスサード」

「見てたんか」

ノックを見ながらベンチ内でお茶を飲んでいた一に、キャッチャー道具をつけた宗が話かけてきた。投球練習の相手は中と替わってきたのだろう。どのみち数分で終わるだろうが、本来ならば彼がずっと受けているべきなのだ。

「見てはないけど、ナイスサードって声が何回も聞こえた。いくつかは、海田さんへの声やろうけどな」

「1年やからな。普通に打球を捌いただけで、褒められる」

「捌いたんやろ？ エラーしてたら言われへん」

「まあ、な」

照れくさくなり、一は再びお茶を口に含む。それを見てニヤニヤしている宗を、彼は横目で軽く睨んだ。

島福南高校のノックは順調に進んでいる。7分間しか与えられない試合前ノックは、いかにスピーディーに行えるかも、大事となるのだ。既に外野手へのノックは終わり、内野手のバックホームいわゆる一本バックを残すのみとなっている。

「やっぱりさ、レベルが違うよな」

「ん？ 何のや？」

「高校野球のや。中学時代とは比べもんならん。寺島さんのボールなんて速すぎるぞ」

宗は苦笑いを浮かべながら、自分の左手を見つめる。最高球速140km/hを誇る駿のボールを受けるのは、キツかったにちがいない。だが一は、無表情で答えた。

「まあ俺はノーエラーやったからな。特にレベルの違いは感じひんかったな……」

「お前っ……」

「何や？」

口元を緩め、一は宗と顔を見合わせる。思わず吹いてしまった。つられたのか、宗も笑う。少し、緊張が解けた気がした。

ちようど、島福南高校のノックが終わったところであった。

【両校 スターティングメンバー】

先攻 島福南

順	位置	名前
1	遊撃	辻村佑二
2	三塁	宮崎誠一
3	捕手	原田 淳
4	投手	入江大志
5	一塁	三輪大毅
6	左翼	岡田一輝
7	中堅	角木伸彦
8	右翼	奥村進二郎
9	二塁	河野貫之

後攻 綾波北

順	位置	名前
1	三塁	海田和也
2	左翼	森山智勝
3	中堅	小沢昇平

9	8	7	6	5	4
遊擊	二壘	投手	一壘	捕手	右翼
寺重大輔	木原勝弥	寺島駿	河北亮	松永中	井口裕

10-2・春季大会、開幕(2)

「気分はどうや？」

「最高。興奮しすぎて、お前がイケメンに見える」

「オツケー。君は冷静だ。落ち着いている」

1回表の投球練習を終え、中はピッチャーマウンドにいた。この試合の先発投手である駿と軽く打合わせをし、「冗談を言い合う。互いに笑わないが、雰囲気は和む。彼らが、試合前にいつもしていることだった。

「ストレートでいいよな？」

「ああ。ストレートは今日も走ってる。駿の球威なら、島福南くらいは、それだけで抑えられるやろ。4番の入江に気をつけるくらいでいい。油断は禁物やけど、緊張して堅くなるなよ」

「安心しろ。俺のは、緊張するとむしろ萎え……」

駿の言葉を途中で遮り、中は彼の胸を軽く小突いた。ちょっと強く叩いたためか、駿が僅かに顔をしかめる。

「少しは緊張感を持って」

苦笑いしながらそう言うと、中はマウンドから離れた。あまり長居はできない。

ホームベースの前に立ち、野手に向かって声を掛ける。彼らも大声で応え、グラウンドが一気に盛り上がった。

冬に成長した姿を見せつける、駿。お前の真っ直ぐは、こいつらには打たれへん

左打席に、1番打者が入る。ストレートのサインを出し、中は内角にキャッチャーミットを構えた。

この試合、変化球を多投するつもりはない。ストレートを続けることよりも、変化球の失投の方が怖いのだ。いくら目が慣れても、140km/hに迫るストレートを、そう簡単に打つのは簡単なことではない。もちろん、双葉高校などには、そうはいかないのだろ

うが。

駿が振りかぶり、スムーズな投球フォームから白球が放たれる。中が構えたミットに向かって、それは真っ直ぐ”走ってきた”。

打者が体を僅かに仰け反らせる。だが、中は構えたミットを動かさずにボールを捕る。

「ストライク！」

静かなグラウンドに、主審の声が響いた。

ストライクゾーンの球を仰け反りやがった。駿、もう一度同じコースに……

ボールを駿に投げ返すと、中はすぐにサインを出す。打者に、気持ちを整理させる時間は与えない。駿も頷き、すぐに投球モーシヨンに入った。

打者が僅かに狼狽えたのが分かる。テンポの早さに戸惑ったのだろう。2球目もほとんど同じコースだったにも関わらず、彼はボールを見送った。

2球で簡単に追い込み、投球の幅が広がる。中は、これまでとは違つて変化球　カーブのサインを出した。

ボールになつてもいい。ショートバウンドでも構わないから、絶対に高めには投げるな。キャッチャーミットを低く構え、駿にそれを伝える。

駿の右腕からボールが放たれる。高めに浮いてはいない。おそらくホームベースの手前でワンバウンドするような球だ。サイン通り。中は膝を地面につき、ボールが後ろに逸れないよう壁を作った。

打者のバットが呆気なく空を切る。ワンバウンドしたボールがプロテクターに当たつて、僅かに衝撃がきた。中はすぐにマスクを弾き落とすと、ボールを素手で掴み、立ち上がつて打者の背中にタッチした。

「バッターアウト！」

既にスリーストライクを宣告していた主審が、コールする。これで1アウト。中は、ボールを駿に投げ返した。綾北は、試合中にボ

ール回しを行わない。試合のテンポを重視しているためだ。

「1アウト！」

人差し指を立てた右腕を頭上に掲げ、声を張る。

ここからは、直球主体で問題無いだろう。1度変化球を見せたことで、島福南のナインも多少は意識するだろう。8割、いや9割直球でいい。

中はマスクを被って座ると、すぐにサインを出す。ペースはこちらが握る。右打席に入った2番打者を見ながら、彼は心の中で呟いた。

「ストライク！ バッターアウト！」

審判の音がグラウンドに響き、守備に就いていた綾北ナインがベンチへと引き上げる。三者凡退。上々の立ち上がりだ。

遥斗らベンチ外の選手も、それを見ながら歓声をあげた。

「寺島さんナイスピッチング！」

「初回の攻撃、しっかり！」

周りの選手が、グラウンドにいる選手に向かって声をかける。遥斗も、見よう見まねで同じような声をかけた。

高校野球のテンポは早い。すぐに、1番打者の海田和也がヘルメットとバットを持って、ベンチから左バッテリーボックスへと向かった。まだ相手投手の投球練習が続いているため、バッテリーボックスの外で、彼は素振りを始める。

その様子を見ながら遥斗は、隣にいる2年生、高野翔馬に話しかけた。

「海田さんって、どんなバッテリーなんですか？ やっぱり物凄く打つんですか」

「ああ。海田さんは走攻守の三拍子揃ってる人やけど、1番イメーヂ強いのは打撃やな。打ち分けが上手くて、内野の間を抜くようなヒットが多い。打率はチームのトップを争ってるくらいや」

「そういえば、練習試合でもキレイなヒットを打ってはいりましたね……」
1年生は練習試合中も筋トレや走り込みをするため、春のオープン戦をじっくり観ることは無かった。だが、打順が1番であることが多い和也の打席は、何度か観たことがある。そのときの安打を、遥斗は思い出していた。

話しているうちに、相手投手の投球練習が終わる。ボールは速い。何度も、キャッチャーミットからは乾いた良い音が聞こえていた。すると、話しながらもそれをずっと眺めていた翔馬が、小さく口元を緩めた。

「海田さんは打つぞ。この打席」

「え？」

突然の言葉に、遥斗は思わず聞き返す。普段ならば、当然のことながら、先輩へこのように聞き返すのは御法度である。遥斗も口にしてから気づいたのだが、翔馬は何も言わなかった。気づいていないのか、それとも気にしていないのか、遥斗には分からなかったが、彼は再び翔馬の口から言葉が出るのを待った。

「島福南のピッチャーはイリエって名前やねんけど、あの人にはさ、2つの特徴があるんや」

「2つの特徴、ですか」

「ああ。1つ目は良いときと悪いときの、調子の差が激しいことや。良いときは130キロ後半のボールをバンバン投げ込んでくるけど、悪いときはコントロールも球威も並以下や」

「そうなんですか……。ですけど、投球練習の様子を見る限り、調子が悪いようには……」

「ああ。絶対調やろうな。何日も前から今日に調子を合わせてきたんやろうから」

「ならっ……」

遥斗が反論しようとした瞬間、甲高い金属音がグラウンドに鳴り響いた。彼がグラウンドに視線を戻すと、和也が1塁に向かって走

り出している。打球は、三遊間を破っていた。

「な？」

「凄いですね……。何故？」

「凄かねえよ。うちの部員なら誰でも分かることや。寺島さんのストリートで、速球への目は慣れている。特に海田さんは、ストリートなら例え140キロ出ても打つ。130キロ後半なんて、1番打ち頃のボールや」

「なるほど……」

「じゃあついでにもう1つ予言しようか。多分、この回で試合は決まる」

当てずっぽうではないのだろう。そう言う翔馬の顔は、自信がありそうであった。

ちっ……良いコースに投げたんやけどな……

外角低め、なかなか良いストリートを投げ込んだはずだった。だが、あの1番打者は、それをキレイに打ち返した。おそらくコースや球種を読んでいたのだろう。

読まれていたのなら仕方ない。後続を抑えればいい話だ。島福南のエースである入江大志は小さく息を吐いた。

左打席に2番打者が入る。気が早いのか、もうバントの構えをしようとしている。もっとも、この場面なら大抵バントであるため、あまり影響はないが。

「誠一、ダッシュ頼むぞ」

「おう。任せろ！」

三塁手の宮崎誠一がグラブの捕球面をパンパンと叩きながら答える。

それを頼もしいと感じながら、大志はセットポジションに入った。投球のサインは彼が出している。わざわざ捕手のサインは見ない。

内角高めに渾身のストリートを投げ込む。今日の調子はかなり良

い。そう簡単にはバントされないうらう。

まだ初回のため、バントをさせて確実に1死を取ってもいいのだが、いかんせん次打者は小沢昇平だ。彼の名前はよく聞く。綾波北高校の選手では、1番の実力だろう。聞いた話によると、得点圏打率は6割を越えているらしい。

できることなら、ランナーは進めたくないよな

目の端で、首越しにランナーをチラリと見る。明らかに、牽制球を誘っているリードだ。試合の序盤で、相手投手が投げる牽制球を見ておきたいのだろう。

1度だけ右足を投球プレートから外し、ランナーを見て牽制する。1塁ランナーはベースに戻ろうとしたが、投げていないのが分かったのか、ベースには脚から戻っていた。

再びセットポジションに入る。もう1度牽制するか迷ったが、止めておく。調子が良い今は、なるべくテンポ良く投げたいのだ。

数秒の間。そして大志は左足を僅かに上げた。

「逃げた！」

刹那、一塁手である三輪大毅の声が聞こえた。1塁ランナーがスタートしたのだろうか。だがもう遅い。一連の流れを変えることなく、大志はホームベース目掛けてボールを投じた。

狙い通りのコースへ、吸い込まれるようにボールが向かう。やはり今日は絶好調だ。打者はバントの構えを解こうとしない。おそらく、バントエンドランだろう。

難しいコース、ノビのある速球。上手くいけば、フライにしてくれるかもしれない。そうなれば、ランナーがスタートしてる分、ダブルプレーを取りやすい。

二死ランナー無しでクリーンアップ。まずは昇平を迎えられたら、万々歳だ。バント処理に備え、大志は前へダッシュした。

しかし、事態はそう上手く運ばなかった。打者は少し怯んだ様子を見せたが、何の問題もなくバットにボールを当てた。

勢いを殺されたボールが、地面を転がる。決してライン上ギリギ

りというわけではなく、むしろ大志の正面に近いコースに転がったのだが、ランナーがスタートを切っているため、2塁でアウトを取るのは無理そうだ。

「一つ！」

ボールを捕る直前、案の定、捕手である原田淳からは1塁へ送球するように指示が出される。捕球後、チラリと2塁ベースに目をやると、1塁ランナーは既にベースの手前まで進んでいた。ベースカバリーに入っている遊撃手の辻村佑二も、両手を顔の前でクロスさせ、送球を拒否している。

バッターランナーをアウトにするにはまだ余裕がある。大志はボールをしっかりと握り、落ち着いてファーストに送球した。

「アウト！」

余裕を持って1塁はアウト。だが、スコアリングポジションにランナーが進んでしまっている。

大志は唇を噛みながら、ネクストバッターズサークルから歩いてくる昇平を見た。打たれるわけにはいかない。彼は、心の中で強く呟いた。

「森山さんナイスバント!」

見事に送りバントを決めた森山智勝に、歓声を送られる。遙斗も、周りの選手らと同様の声をかけた。

そして、隣にいる翔馬へ、再び話しかけた。

「バントが上手いですね、森山さん」

「ああ。ウチの野手は、寺島さんの速球でバント練習してるから、イリエのボールも難なくできる。しかも、森山さんはチームでも1、2を争うくらいバントが上手いからな。それに……」

そこで翔馬は、1度言葉を切った。昇平に対する初球が投じられたからだろう。相手バツテリーは慎重になっているのか、ボールはストライクゾーンから大きく外れていた。

「それに、海田さんがスタートを切ってたから、転がすことだけ考えたらいいんや。例えばピッチャー前　今のケースでも、ランナーは進む」

「なるほど……」

遙斗は頷きながら呟く。バントエンドランを仕掛けたおかげで、落ち着いてバントをすることができたということか。

「様子を見てボール球を投げてくるバツテリーもいるから、結構危ない作戦やけど、少々のボール球なら森山さんはできるし、海田さんも足は速いから、単独スチールが成功する確率が高い。まあ、強豪校には通用せんやろうけどな」

「強豪って、双葉高校とかですか?」

「双葉は雲の上やけどな。まあ、二次戦で当たるから、そんなこと言ってられへんけど……」

「でも、強豪校以外には通用するんですよね?」

「多分な。冬場からずっとやってるから、精度も高いし。それに、バントの成功率が上がること以外にも、もう一つ効果がある」

「もう一つの効果……ですか」

「……また後で言ったるわ。喋りすぎてるからか、幸元がこっち見て睨んどる」

小声になった翔馬が、苦笑いしながら言う。気にはなるが、仕方がない。遥斗は、視線をグラウンドに戻した。

金属音。直後に、ベンチ内から歓声があがる。昇平が打つたのだろうか。中は、バットケースから自分のバットを探す作業を中断して、グラウンドに目をやった。

野手の動きで、どこに打球が飛んだかはすぐに分かった。右中間、深いところを転がっている。昇平は既に1塁ベースを蹴ろうとしていた。

中は3塁ランナーコーチである芝田一貴を見る。

2塁で止めるよ……

中堅手が打球を掴んだ。素早く、中継に入っている二塁手に向けて送球する。2塁ランナーであった和也は、既にホームベースを踏んでいた。

昇平が2塁ベースの手前で、少しだけスピードを緩める。そして、ベースの上で止まった。一貴が腕を大きく横に広げて、彼を止めていたのだ。

「よし……。小沢、ナイスバッティング！」

2塁ベース上の昇平へ声を張ると、中は再びバットを探しはじめた。もつとも、数秒でお目当てのものは見つかった。バットケースからそれを取り出すと、彼はゆっくりとネクストバッターズサークルへ向かう。

ホームに帰ってきた和也が、小走りで寄ってきた。

「続けよ、中」

「ああ。入江の球はどうや？」

「相変わらず、ストレートはなかなか。今日はまだストレートしか

投げてないくらいやしな。でも、打てへん球やないわ。駿ほどの速さはないし、よく見れば簡単に打てる」

「オーケー。ナイスバツテイングやった」

最後に声をかけると、中はネクストバッターズサークルの中で軽くストレッチを始めた。

一死二塁。確実に回ってくるという保証は無いが、中はすでに、守備時に捕手の足を覆うレガースも外していた。ダブルプレーの可能性はかなり少ないからだ。

4番打者である井口裕への初球。またストレートだった。裕のバットが動き出す。金属音とともに、中は打球の方向へ首を回していた。

右翼手がダツシユで真後ろへ下がる。外野フェンスの手前、約5mのところで足を止め、こちらを向いた。

助走をとる余裕は無かったのか、足を止めた直後に、彼が構えたグローブにボールが収まった。

2塁ランナーの昇平がタッチアップする。あれだけの飛距離があり、捕球姿勢も良くなかったため、彼は余裕で3塁を陥れた。

逆風か。ホームランを1本損したな、あいつは

打席に入りながら、中はチラリと裕を見た。悔しそうにしながら、ベンチへ帰っていく。

集中だ。すぐに視線をマウンド上の大志に戻す。二死三塁、打つしかない。

ストレートか……それとも変化球か……

まだ変化球は1球も投げられていない。だが、ランナーが3塁に進んだ今、その変化球をいきなり投げられるだろうか。暴投を恐れ、投げてこない可能性も十分にある。

でも、それじゃあ困るんだよな……

大志に向けて、中は軽く口元を緩めた。挑発のつもりだった。これに乗ってくれれば、ありがたい。

おそらく、彼は今のことに気づいただろう。ロジンバックをやや

乱暴に扱っているあたりに、苛立っているのが分かる。中はバットを構え、次の投球を待った。

頼むぜ。俺が作った筋書き通りに動いてくれよ……？

大志の左足が上がる。それに合わせて、自分も僅かにバットを引いてトップを作った。

ボールが投げられた。スピードがあるが、細かく考える余裕はない。ただ感覚でバットが動き出す。

狙い通り、内角のストレート！

芯で捉えた感触。中は、バットを振り抜いた。

打球は痛烈なライナーになって、飛んでいく。しかし中は、数歩走ったところで、その足を止めた。打球が進んでいるのは、1塁側のファウルゾーンだ。

「ファウル！」

背後から、主審の音が聞こえる。打球は、勢いが落ちないまま、1塁側のフェンスに直撃していた。

ファウル、か……

思わず口元が緩む。ファウルにしてしまったことを悔やむつもりはない。むしろ、狙ってファウルにできたのだ。喜ぶべきだろう。

再び打席に入り、大志をジツと見る。動揺しているだろうか。自分でも、会心の当たりだと思った打球だ。大志が怯んだと思いたい。大志が再びセットポジションに入る。中は集中力を高め、静かに1度だけ息を吐いた。

足が上がる。腕が回る。ボールが放たれる。ここまでは当然の流れだ。問題は次、その球種だった。

………きたっ！

球種はカーブ。中が待ち望んだものだ。白球目掛けて、彼は迷わずバットを振り抜いた。

「セカンド！」

相手捕手の声を背中で聞きながら、中は走り出す。相手の二塁手が打球に追いつかないであろうことは、見たら分かる。

二塁手が形式的な飛び込みを見せるが、打球はあつという間に二塁間を破っていった。中は回り込んで一塁ベースを蹴り、数mだけオーバースランする。打球を捕った右翼手から、中継に入った二塁手にボールが渡り、彼は一塁ベースへと戻った。

「中さん！ ナイスバツティング！」

今の打球でホームベースを踏んだ昇平が、右腕を突き上げて声をかけてくる。中も、同様に腕を突き上げて応えた。

さあ河北、頼むぞ。俺にできる最高のサポートはした。もう一撃、お前の力で加える……！

「大志、気にすんな。ゲッツーとろうぜ！」

ボールを受け取った大志は、声を掛けてきた二塁手の河野貫之に對して頷いた。

初回にいきなり2失点してしまったのは少々キツイが、次の回は自分からの攻撃だ。この嫌な流れを断ち切れれば、まだまだ逆転も可能だろう。

やっぱ、カーブはまだまだか……

グローブの中にあるボールを見ながら、大志は苦笑いを浮かべる。ストレートを完璧に捉えられたためにカーブを投じたのだが、それすらも完璧に捉えられた。調子の良い今日は、やはりストレート中心で投げた方が抑えられそうだ。

打席には6番打者が入る。昇平と中以外の打者はあまり知らないが、図体はなかなか大きい。

これ以上打たれるわけにはいかない。自分は、島福南のエアスなのだ。

打てるもんなら、打つてみる！

内角低め、引つ掛けて内野ゴロにさせる。

セットポジションから左足を僅かに上げ、そのまま前に踏み出す。クイックモーションを見せることで、今後、相手に少しでも盗塁を

自重させられたら良い。また盗塁で掻き回されたら、併殺などとは言ってもらえない。併殺以外でももちろん構わないが、チームの雰囲気も上がる併殺が、1番欲しかった。

打者のバットが動き出す。

よっしゃ。引っ掛……

金属音。一瞬で打球が視界から消える。ゴロではないことは、分かった。首を右に回し、大志は打球の行方を確認する。

「レフ………」

もはや声にすらならない音が口から出た。彼の目には、学校の第1フェンス 越えたらホームランとなるフェンスを、白球が越えていくのが映った。

「あーあ、フォアボール出しちゃったよ」

「ギリギリのコースやけどな。まあ、綾北としては初めてのピンチなわけやけど……」

双葉高校2年生、山崎進は、手元のスコアシートに視線を移した。4回表1死1、2塁。打者は4番の壮志だ。7対0でリードしている綾波北高校だが、下手をすれば大量点に繋がりがねないこの場面は、勝負所・踏ん張り所だろう。

「3回まではパーフェクトピッチングやったんやけど、流れはどっちかと言えば島福南やなあ」

隣で呟く名茂秀平の言葉に進は頷きながら、グラウンドを見つめた。

3回まで、綾波北高校先発の駿は、一人の走者も出さないパーフェクトピッチングを披露した。打線も初回到4点、2回到3点を奪い、完全に主導権を握っていた。

しかし3回裏が無得点で終わると、この4回表には1死からライトへのポテンヒット、ギリギリのコースをボールと判定されての四球と、流れは島福南に行きつつある。

「で、名茂はどうなると思う？ この場面、どっちに軍配が下るか」「さあねえ。まあ、どちらにしても、このバッターが打ち取られたら島福南は終わりやな。例えまだツーアウトでも」

今にも欠伸をしそうな表情で、秀平は答える。彼は2年生ながら双葉高校のレギュラーなのであるが、練習が嫌だと言って 当然、監督にはもっともらしい理由をつけて 綾波北対島福南の試合を偵察しに来たのだ。

そもそも彼らが偵察に来ている理由としては、このゾーンの勝ち上がり校が、2次戦の初戦 夏季京都府大会のシード権を懸けた試合で、双葉と当たるからである。このゾーンの試合は全て、誰か

が偵察に行くことになっていた。

サボリ魔ではあるものの、秀平の實力は本物だ。先日選抜高等学校野球大会 通称『春の甲子園』でも、あの甲子園球場でホームランを1本放っている。進と彼は同じ学年であるが、實力にはかなりの差がある。それは、進も認めている。

その秀平が言うことだ。進は、そうなのだろうと思った。

初球、外角のストライクゾーンギリギリにストレートが決まる。

大志は、バットを動かさなかった。

「ああ、あいつ無理だわ。打てへんよ」

「え？」

秀平の言葉に進は驚き、彼の顔を見た。秀平は、今度はしっかりと欠伸をしていた。

「初球を見逃した時点で、もう無理やな」

「何で分か……」

進の言葉は途中で途切れた。ファウルボールが、彼らがいる場所のフェンスにライナーで飛んできたからだ。

進はスコアシートに今の記録を書き込むと、再び秀平に問いかけた。

「何で分かるんや」

「今つてき、流れは島福南に向きかけてたわけやん。ポテンヒットにフォアボール。あの寺島ってピッチャーは多少苛立ってたやろうな。そこで簡単に初球を見逃す奴は、この場面で打てねえよ。圧倒的な實力差があるなら別やけどな」

そう言っつて秀平は笑う。最後は自分のことを言ったのだろう。彼としては、この程度のグラウンドなら全打席ホームランを打て、という気分なのかもしれない。さすがに、それは彼でも無理だろうが「ストライク、バッターアウト！」

よほど大きい声を出したのだろう。主審の声が聞こえた。高めのストレートに、大志のバットは空を切っていた。

「速いなあ、今の。140出てたかな」

秀平が、バックネット裏へ歩いていく。そこではもう一人の双葉部員が、スピードガンで球速を測っている。それを見にいったのだらう。

数十秒で、彼は戻ってきた。表情が曇っていることから察するに、どうやら140km/hは出ていなかったようだ。それで表情が曇るのが、”名茂秀平”という男である。

「なんぼ？」

「138。糸井さんの方が5キロも速いな」

双葉のエースである選手の名前を出して、彼はつまらなさそうに言う。進は苦笑いしながら、グラウンドに視線を戻した。

「ボール、フォアボール！」

「よっしゃあ！海田さん、ナイス選球！」

4回裏。先ほどのピンチを無失点で乗りきった綾波北の攻撃は、先頭打者である和也が四球を選んで始まった。

3回の攻撃で点が取れなかっただけに、余計にナインも盛り上がる。それは、遥斗も同じだった。

「くるぞ……神山」

「はい？」

翔馬の呟きを、遥斗は聞き返す。聞き取れなかったわけではないが、いまいち意味が分からなかったからだ。

「さっき言ったよな。バントエンドランが持つ、もう一つの効果があるって」

「はい。初回に」

「それが、もうすぐ見られると思うぜ」

そう言って翔馬は笑う。その視線は、2番打者の智勝に注がれていた。

無死1塁、打者は智勝、走者は和也。点差の違いはあれど、確かに初回と同じ状況だ。遥斗も、この打席を集中して見つめた。

初球をストライクとして迎えた2球目。綾北が動きを見せる。

「逃げた！」

一塁手が叫ぶ。翔馬から事前に、バントエンドランが仕掛けられると教えられていたので、遥斗は驚かなかったが、島福南のナインはあまり想定していなかったのかもしれない。まして

「バントや！」

ヒツティングの構えであった智勝が、7点リードの場面でバントをする。再びバントエンドランを仕掛けられる。とは、微塵も考えてなかったであろう。

ボールは、3塁線の内側数十センチのラインを、そこそこ強い勢いで転がっていた。

打球を捕りにいったイリエを制し、三塁手が打球に向かってダッシュで突っ込む。捕球から送球まで、一連の動作をスムーズに行い、1塁で智勝をアウトにした。

「3つ！」

誰が発したのか、グラウンドに声が響いた。遥斗がグラウンドを見渡すと、1塁ランナーであった和也が、2・3塁間を走っていた。声にいち早く反応した一塁手が、慌ててボールを握り、3塁へ送球しようとする。だが、それは叶わなかった。3塁ベースに、守備側の選手が誰もいなかったのだ。

慌ててイリエが走るのが見える。3塁ベースに着くのはどちらが先か、和也との競争だ。タイミングを見計らい、一塁手が3塁ベースへ送球した。

「……な？」

「はい……」

苦笑いしながら遥斗は答える。間一髪、どちらが先になるか、つまりセーフになるかアウトになるか、少しドキドキしていたのだが、取り越し苦労だったようだ。ボールがイリエに渡ったとき、既に和

也の足はベースに着いており、余裕があったために彼は立ってすらいただ。

「海田さん、ナイスランです！」

「森山さん、いいところに転がしました！ ナイスバント！」

「昇平！ 続けよ！ 頼むぞ！」

選手に、多くの声が掛けられる。もはや流れは完全に綾北のものとなっていた。

「初回のバントエンドランで、2塁のベースカバーにはショートが入ったよな？」

「そ、そうでしたっけ……」

「まあ、見てないのは仕方ないけど、つまりあの場面で盗塁されると、島福南はショートが2塁に入るわけや。で、バントエンドランで3塁前に転がすと、各野手はどう動く？」

「えっと……ピッチャーとサードがボールを捕りにいきます。ショートが2塁に入って……ファーストもすぐに1塁ベースに戻ります。セカンドは……」

「プッシュバント警戒で前に出た後、ベースカバー」

「あ、はい。で、3塁には……いません！」

「そう。ホンマはキャッチャーかピッチャーがベースに入らなあかんのやけどな。単純やけど、これくらいの高校相手やったら、結構使えるんよ」

「なるほど……」

翔馬の説明を頭の中で何度か繰り返しながら、遥斗は頷き、呟いた。

「ハマるな。今日は」

「監督、あんまり調子にのらないでくださいね」

「寺島、お前も今日は調子良いからってあんまり……お、小沢が打ちやがった」

西村雄吾と駿のやり取りを見ていた宗がグラウンドへ目をやると、昇平の打球が右中間の奥へ飛んでいるところであった。中堅手が打球を追い、伸ばした左手のグローブにボールが収まる。その瞬間、3塁ランナーの和也が、本塁へスタートを切った。

返球が内野まで渡るが、捕球姿勢が悪かったこともあり、その頃にはもう、和也はホームベースを踏んでいた。

「8点目か。やっぱり今日は上手いこといな」

「練習してきた甲斐がありましたね。バントエンドランがことごとく成功してます」

「さすがは森山つてところやな。寺島、次のイニングがラストや。全力で抑えてこい」

西村の発言に、駿が眉をひそめるのが見える。まだ8点差　コールドゲームが成立する点差ではないのにも関わらず、なぜ次イニングが最後なのか分からないのだろう。

「6回からは村井が……？」

「いや、6回のマウンドには誰もあげないつもりや」

「それはどういう……」

「そのまんまや。5回で試合を終わらせる。5回以降は10点差がつけばコールドゲームが成立するから、お前もすっかり抑えて、攻撃を楽にしてこい」

「なるほど。では、監督の御期待に沿えるよう頑張つて参ります」
「うむ」

西村と駿のやり取りに、ベンチ内から笑い声が漏れる。宗も、思わず口元を緩めていた。とても、公式戦の最中とは思えない和やかな雰囲気だ。

昇平の次打者である裕がライトフライに倒れ、ベンチからメンバ―が飛び出す。守備位置に就く者はもちろん、就かない者もベンチ前に整列して声を出すのだ。

「吉田！」

「はい！」

宗もならってベンチから出ようとしたとき、不意に西村から呼び止められた。慌てて、西村の横へ向かう。

「緊張はとれたか」

「え……あ……はい！」

宗の口元が緩んでいたからだろう。西村から問われた理由を、宗は判断した。

西村の口元が緩む。何事かと、宗はわずかに眉をひそめた。そして西村が口を開いた。

「バットを振っておけ。次の回、代打でいくぞ」

一瞬、西村が何を言っているのか理解できなかった。宗は思わず聞き返す。だが、西村の口から出た言葉は、先ほどと全く一緒であった。

もしかして西村は、宗を代打で試合に出すと言っているのだろうか。いや、言っているのだろう。宗は勢いよく返事をする、急いでバットケースからバットを取り、ベンチから飛び出した。

全く想定していなかったというわけではない。むしろ、前日からずっと緊張していたくらいだ。だがやはり、いざ試合に出るとなると、その緊張は、これまでと比べ物にならないくらい高まっている。大量リードしているとはいえ、試合はまだ序盤だ。自分の打撃が不甲斐なければ、また流れは相手に傾くかもしれない。それに、5回で試合を終わらせたいと言った監督から、チャンスを貰えたのだ。何としても、その期待に答えたい。

「肩に力入りすぎやぞ。吉田」

不意に聞こえた声。宗が首を向けるとそこには、グローブを持った村井俊之介がいた。グローブの中には、綺麗なボールが入っている。俊之介の後ろからは、2年生の藤澤翔也が現れた。彼もグローブを持っている。

控え投手である彼らが今からしようとしていることは、すぐに分かった。もちろん、キャッチボールだ。本来なら投球練習をしておくべきなのだが、宗がこういう状況だからだろう。ちなみに、4回

のピンチを切り抜けるまでは、俊之介の投球練習に付き合っていた。それが控え捕手の仕事だ。

「すみません……」

「だから緊張すんなって。楽に楽に。まあ、俺も初めての試合は、かなり緊張したけどな」

いつの間にか10m以上の距離をとっていた俊之介からボールを受けながら、翔也が言う。その顔はどこか照れくさそうで、懐かしい過去を思い出しているようだった。

その後、宗は時折俊之介と翔也のキャッチボールを見ながら、素振りを続けた。彼らに話しかけられたことで、幾分緊張が解けた気がする。

駿のピッチングは相変わらず見事で、島福南の下位打線を全く寄せ付けない。わずか5分ほどで、5回表は終了した。

「ナイスピッチングです！」

駿に声をかけながら、宗はベンチ前へと戻る。攻撃の開始時には、ベンチ前で監督の指示を聞くためだ。

「寺島、ナイスピッチングやった」

「はい。ありがとうございます」

西村の言葉に、駿が強く答える。さつきまで全力投球をしていた身体だ。その息は上がっていた。西村が続ける。

「さつきもベンチで言ったが、この回で終わらせるぞ。松永が塁に出ることを前提として、河北は真っ直ぐに絞れ。もう入江の球威は落ちてきているから、コンパクトに振り抜けばいい」

「はい！」

「鈴木、松永と河北が塁に出たら、河北に代走。身体動かしとけ」

「はい！」

「で、次打者は寺島……」

そこで、西村は一旦言葉を切った。宗はじつと西村を見る。そして、二人の目が合った。

「吉田、寺島のところで代打な」

「は、はい！」

「緊張するなどは言わん。それは無理な話やからな。だが、力むな。自分の力を信じて打席に立て」

「はい！」

「周りもサポートしてやれよ。この回で終わらせるぞ！」

「よしっ！」

最後に全員の声が揃い、円陣が解かれる。大志の投球練習が、ラスト1球になったところだった。

宗は、そのラストボールをしっかりと見る。試合開始時から取り続けていたタイミングに、狂いはない。

打てる……

ヘルメットを被りながら、宗は心の中で呟いた。

中は6球目をセンター前へ運んだ。早打ちしなかったのは、宗への配慮だろうか。宗が1塁ベースを見ると、笑っている中と目が合った。レギュラーを掴むには、彼を越えなければならぬ。高い壁だ。

亮も続く。西村の指示通り、1ボールで迎えた2球目のストレートを捉えた。打球は左中間を真つ二つに割り、フェンスまで転がっていった。亮はもちろん2塁まで進み、中に至っては一気にホームまで還ってきた。

「ナイスランです」

「おう、サンキュー。楽にな、吉田」

「はい！」

走塁指示のためホームベース付近にいた宗と、走り終えたばかりの中が、軽く言葉を交わす。彼から背中をポンポンと叩かれ、宗は地面に置いていたバットを拾った。

よし、やるか！

もう緊張なんてしてられない。主審に代打と代走を告げると、宗は右打席へと向かった。1度だけ素振りをし、すぐ打席に入る。打てるイメージは、バツチリと身体に与えている。

打席に入る前、1度だけ西村を見る。セオリーなら、ここは当然送りバント。だが、彼がサインを出す様子は無かった。任せてもらったと思っただけのようだ。宗は、ゆっくりとバッターボックスに入った。

問題は、勝負してくれるかどうか……

島福南は、あと1点取られたら負けだ。つまり、2塁ランナーの鈴木昭宏を、絶対にホームに還してはいけないのである。

送りバントが大いに考えられ、代打 エースに代わって出てきた打者だ。初球はほぼ間違いないボール球だろう。問題は2球目以降、果たして勝負してくれるだろうか。せつかくのチャンスだ。できることなら、敬遠四球ではなくて、打ちたい。

セットポジションに入っていた投手の脚が上がる。見慣れたフォームから、ボールが投じられた。

「……っ!？」

全く予期していなかったボールに、思わず声が漏れる。初球は、ボール球どころか、内角を襲うストレートであった。もちろん宗は手が出せない。捕手がボールを捕り、主審がストライクのコールをした。

速い……

宗は下唇を噛み、相手投手を見つめる。自分が馬鹿だった。ボールから入ってくるだろうと予測し、打つ気が無いまま打席にいた。最悪である。

1度打席を外し、素振りをする。気持ちを落ち着かせて、リストアードだ。

「吉田、楽にな! どんどん振ってけ!」

ベンチからかけられる声に対して宗は目で応答し、再び打席に戻った。カウントは1ストライク 0ボール。積極的にいこうと、自分に言い聞かせる。

今のストレートで自信を取り戻したのか、先ほどよりもやや早いテンポで、2球目が投じられた。外角の低め、球種はまたしてもストレートだ。宗は迷わずバットを出す。

バットに衝撃。しかし打球は真後ろに飛び、バックネットに直撃した。

ファウルか……。でも、当たる。寺島さんが投げるボールの方が、速い!

カウント上は追い込まれたが、精神的には全く追い込まれていない。大丈夫、打てる。と、宗は何度も心の中で呟く。

3球目。セオリーなら、1球もしくは2球ほどボール球を投げるところだ。だが、セオリー通りにいかないことを初球で学んだ。セツトポジションから投手の足が上がると、宗は完全に打つ気で、バットを引いて”トップ”を作った。

ボールが投じられる。高め、宗は腰を回す。

高いか!?

高めの釣り球だろうか。最初に想定したコースよりも、さらに少し高かった。

だが、宗はバットを止めない。いや、ここまできたら止まらないのだ。コンパクトに、軌道を僅かに変えてボールに合わせる。

直後、両手に衝撃があった。だが、重いものではない。それはまさに、バットの芯でボールを捉えたときのものであった。

前に打球が飛んだのは、長年の感覚で分かった。ライナーだ。目で打球を追う。二塁手が真上にジャンプしたのが見えた。しかし打球は、その上を通過していく。

歓声。それを聞きながら、宗はバットを横に軽く放り、1塁へ向かって走り出した。

マジかよ、おい……

打球は右中間を真つ二つに破り、グラウンドを転がっている。中堅手が懸命に追っているが、とても簡単に追いつきそうではない。

右翼手は、もはや追うのを止め、呆然と立ちすくんでいた。

宗はベースラインから僅かに膨らんで走り、1塁ベースの角を右足で踏む。顔を左に向けて昭宏の位置を確認すると、彼は既に3塁ベースを蹴って、ホームに向かって走っていた。ライナーバックでスタートが遅れたはずであるのに、やはり足は速いらしい。

再びボールを見る。まだ中堅手は追いついていない。勝利の確信。宗は足を止めて、右手を上突き上げた。

ベンチから再び歓声があがる。どうやら、昭宏がホームインした

ようだ。これで10対0。5回の裏であるために、コールドゲームが成立する。

「集合！」

主審の声で、36人の選手が一斉にホームベースを挟んで、2列に並ぶ。それぞれの列がかもし出す雰囲気は、全く別物であった。

向かいに並ぶ列の、1番ホーム側、島福南高校のキャプテンでありエースである男は、下唇を噛みながら斜め上を見ている。その目に涙は無い。まだ春だからか、それとも、全力を尽くしたために悔いはないのか、宗には判断できなかった。

試合終了を告げる審判のコール。それを聞いて、宗は頭を下げた。頭を上げ、ありがとうございました、と口に出す。自分達は勝つたのだと、改めて思えた。

回れ右をし、ベンチに戻ろうとする。それを遮ったのは、中だった。

「ナイスバッティング！」

そう言って、彼は自分の右手を差し出す。宗は笑顔でその握手に応じた。

「いやあ、お疲れさまでした」

「お疲れさまでした」

試合終了後、選手達はユニフォームから制服に着替えている。そこから少し離れたところで、西村雄吾は、綾波北高校野球部部長の河野泰三と話をしていた。まずはお互い、試合終了にともなって、ねぎらいの言葉をかける。

「完勝でしたね。お見事でした」

「いえ、私は何もしてませんよ。選手がよく動いてくれました。冬場の練習は間違ってたみたいですね」

河野の言葉に、西村は笑いながら答えた。実際に、自分が采配しなくても、今日の試合は勝てた気がする。地力で、完全に相手を上

回っていた。

「どうですか。シード権は取れますかね」

河野が、マイルドセブンに火をつけながら尋ねる。

西村は、河野の顔をジッと見た。嫌なことを尋ねられた。シード権を取れるかとは、暗に双葉を倒せるかと尋ねているようなものだ。50を優に超えた河野は、たまに答えにくい質問をふってくる。

「どうでしょうね。最近は試合をしませんから、向こうの強さが分かりません」

「最後に試合をしたのは……ト部君のときですか」

「はい。あのときは監督として、良い夢を見させてもらいましたよ」

「今年も見てくださいよ。甲子園まで」

「……ええ。もちろんです」

西村は表情を緩めて答える。新戦力も加わった。王者に、一泡吹かせたい。

わずかな沈黙の後、河野が口を開いた。

「話は変わりますが……1年生はどうでしたか」

「吉田と豊田ですか」

呟きながら、西村は試合を振り返る。両者共に、十分すぎるパフォーマンスを見せてくれた。特に吉田に関しては、安打など期待しない。経験を積ませるための打席で、サヨナラタイムリーだ。文句なしと言えよう。今後も、吉田には代打として期待している。

唯一の問題は、彼を代打として準備させると、控えの捕手がいなくなるということだ。強豪校が相手となれば、継投が必要となる。となれば、それでは少し都合が悪い。

豊田を外して、小畑を戻すか……

豊田も、吉田同様ベンチに置いておきたい。しかし、今のチーム状況を考えると、どちらかを選ばねばならない。

「難しそうな顔をしていますよ」

河野に言われ、西村は苦笑いと共に表情を戻した。

「レフト！ いったぞ！」

周りの選手から声がかげられる。だが、そのとき既に、名茂秀平は後方に走り出していた。甘い球が真芯で捉えられた。これはかなりの距離ができるはず

「……おいおい、マジかよ」

苦笑しながら、秀平は足を止める。そしてゆっくりと、先ほどとは逆に、前へ足を進めた。

構えたグローブにボールが収まる。そのボールを内野手に返し、秀平は再び守備位置に戻った。

あんな甘いボールを芯で捉えといて、柵を越えへんとは……。だからレギュラーになれへんのやぞ、先輩

双葉高校野球部専用グラウンドの両翼は90メートルほど。それを打撃練習でも越えられないとは、情けない。2年生である秀平ですら、打撃練習なら、多少詰まっても柵を越える。

甲子園に比べたら、ここは子供部屋みたいなものだ。入部したときは広いと感じたのだが、2度の甲子園を経験した今は、かなり狭く感じる。

守備位置に戻った秀平は、グラウンドの入口を何度も見る。進の帰りを待っているのだ。彼は今、綾波北と黄画工業の試合を偵察に行っている。先週の島福南戦は、適当に理由をつけて同行したものの、今回は上手くいかなかった。残念ながら、練習しなければならぬ。

キャプテンである新名琢磨の打球が飛んでくる。秀平は腰を切り、後方へダッシュした。間に合わない。彼は打球から目を切り、全速力で落下地点へ急ぐ。

左打者である琢磨の打球は、レフト線の方へ切れていく。落下地点を予測し、しばらく走ったところで打球を確認した。左腕を伸ば

し、軽くジャンプする。グローブに衝撃があり、秀平は着地した。

「ナイスキャッチ！ さすが、意外と守備も上手い名茂さんですね」
「おお、帰ってきたんか。ていうか、意外とか言うな」

秀平の前には、ちょうど偵察から帰ってきたであろう進がいた。その後ろには、彼と一緒に偵察へ行っていた選手もいる。偵察は大抵、3人で行っていた。

笑いながら言う進を軽く睨みながら、秀平は彼に近づく。もちろん、試合の結果を聞くためだ。

「で、どうやった？」

「綾北が8対1で勝った。7回コールドや」

「まあ、そりゃそうやるな。次は藤草か糸太町か？」

「ああ。そっちは武田が見にいってる。もうすぐ終わるな、そっちも」

グラウンドに設置されている時計を見ながら、進は答えた。そして後ろの二人に、先に練習へ戻るように指示を出す。それを聞いて、今まで黙って話を聞いていた彼らは、小走りで秀平から離れていった。

秀平は続ける。

「どっちが上がっても、綾北が勝つやろうな。良いブロック引いたな、綾北は」

「全くやな。まあ、その勝ち上がりが初戦やねんから、ウチとしてはありがたいやろ」

「張り合い無かったら、つまんねえよ」

「ハハ、確かにな。でも、綾北のエースはMAX140km/hらしいぜ？」

「……甲子園で、142km/hの直球をスタンドに入れてきた」
「そうでしたね」

思い出したのか、進は苦笑いしながら頷いた。

双葉のエースである糸井健一のように、MAX140km/hを越えて、キレのある変化球も多彩な投手が、全国には何人もいる。

それは、秋の近畿大会や春の選抜甲子園で経験していた。ストレー
トが速いだけの投手を、怖いとは思わない。

「とりあえず、俺は監督のところへ報告してくる。一応、試合結果
は言ってるけど、詳しいことは言ってるないし、ビデオも編集しな
あかんからな。名茂も、早く練習に戻れよ。新名さんが気づいたぞ」
監督室へ向かうのだろう。進はそう言って、小走りで秀平から離
れていった。

その直後に、琢磨の怒声が聞こえた。

もつと早く言えよ……

秀平は首をすくめて、心の中で進に抗議しながら、守備位置へと
戻った。

コンコンと、ドアをノックする音が聞こえた。その後に、進の、
入室を求める声がある。入れ、と声をかけ、双葉高校野球部監督の
清水昌平はグラウンドに向けていた視線を、監督室のドアに向けた。
「失礼します。綾波北と黄画工業の試合結果をお持ちしました」
「うむ」

清水は左手で顎髭を擦りながら、右手を前に出す。そして、進が
差し出したスコアシートを取った。

既に電話で結果を聞いていたが、やはりスコアシートを見なけれ
ば、詳しい試合内容は分からない。

「また、初回に得点か……」

「はい。先頭打者の海田が出塁し、2番打者の森山がバントでチャ
ンスを作り、小沢が確実に返す。そして、出塁を挫かれた相手の先
発投手にできた隙を、井口・松永・河北で一気に攻める、という攻
撃パターンがしっかり身に付いているようです」

スコアシートも見ずに、スラスラと進は答える。彼の記憶力や観
察力・洞察力、それに理解力は、双葉ナインの中でもかなり優秀な
部類だ。なので、清水は頻繁に彼を偵察として送っていた。

自分の練習時間を削られる仕事であるにもかかわらず、健気に仕事をこなしてくれている彼を、清水は好んでいる。2軍メンバーの試合　B戦で彼を積極的に使うのは、そのためだ。何らかの取り柄がある選手は、必ずといっていいほど、使える。

「で、山崎から見た要注意選手は？」

スコアシートに目をやりながら、清水は尋ねる。後でビデオも見るが、進の意見を聞いておくと、ビデオの見方も少し変わる。彼の意見を確認するだけになるのだ。それほど、清水は彼を信用していた。

「先週と今日の2試合を見た限りですが、下位打線　7、8、9番打者は怖くありません。ただ、上位打線は繋がると脅威があります」

そう言うと、進は制服スラックスのポケットから、小さいノートのようなものを取り出した。清水も何度か見たことがある。試合中のメモが大量に書いてあるものだ。最初はスコアシートに書いていたのだが、書ききれなくなったようで、いつからか、そのノートを使用していた。

それを見ながら、彼は話を続ける。

「1番海田は、塁に出ると積極的に次の塁を狙おうとしますね。足が特別速いわけでもありませんが、走塁センスはあるようです。2番の森山は、本当に器用です。普通の犠牲バントはもちろん、セーフティバントやプッシュバントにも安定感があります。そのためか、綾北はバントエンドランを多用しています」

「先週の試合でも2回使っていたな」

先週に観た試合の映像を思い出しながら、清水は呟く。2回目のそれでは、一気にランナーが3塁へ進んでいた。あれも両方2番打者によるバントだった。

「3番小沢は言わずもがなですが、2年生とは思えない打撃センスを持っています。短打や長打はもちろん、バントや犠牲フライなど、状況に合わせて、自在にスタイルを変えられるようです。ウチの打

者と比べても、遜色ありません」

「苦手なコースや弱点は、あるのか」

「強いてあげるならば、内角を打つときに、少し窮屈そうですね。彼に対して攻める場合は、内角中心で攻めるべきだと思います」

山崎の言葉に、清水は黙って頷く。

1次戦レベルの投手ならば、たとえ苦手なコースを攻められたところで、小沢ほどの選手はそこその成績をあげられるだろう。また、投手のレベルが低いと内角に投げることに難しい。だが、ウチは違う。双葉高校の投手陣は、他の高校とはレベルが全然違うと清水は思っていた。これが身内贔屓ではないことは、今までの戦績が証明している。

その後も、山崎は裕・中・亮の特徴を、メモを見ながら述べていく。スラスラと淀みなく、的確な情報だった。

「投手陣はどうだ」

「この2試合で、3人の投手が投げています。全員が右投げです。で、左投げの投手が、まだ控えているかもしれません」

そう言って、進は自分のメモ帳をめくる。

「エースの寺島は、ご存知のようにMAX140km/hの直球が武器の、本格派タイプの投手です。今日の試合では投げていませんが、島福南戦では、なかなかのピッチングをしていました。綾北にとっては、なくてはならない存在ですね」

進の言葉に清水は頷く。島福南戦の映像は、すでに先週観ている。「で、残りの……」

そこまで言って、清水は言葉を切った。音楽が鳴ったからだ。最近あった野球ドラマの主題歌で、人気の曲だ。清水が持っている携帯電話の、着信音であった。

進に断りを入れ、清水は着ていたグラウンドコートのポケットから、携帯電話を取り出す。開いて画面を見ると、電話の相手は、藤草と糸太町の試合を偵察しにいつている、武田光輝からだ。試合が終わったのだろう。清水は通話ボタンを押して、電話に出た。

一通り挨拶を交わし、光輝から試合結果を聞こうとしたとき、彼が先に興奮した様子で話してきた。

「大変です！ 藤草はほとんどノーマークでしたが、物凄い奴が現れました」

「物凄い奴？ 詳しく話せ」

今の話から考えると、藤草が勝つたのであろう。

「1年です。1年生右腕がエースになっているのですが、スーパールーキーでした。MAX134km/hの直球に、キレのあるスライダー。挙げ句の果てには、おそらくフォークボールと思われる球を投げます」

「ほお……」

1年生の春で134km/hも投げられれば、かなり速い部類に入る。さらに変化球も良いとなると、攻略は困難になるかもしれない。成る程、綾波北が勝ち上がってくるだろうと勝手に予測していたが、こんなところにダークホースがいたのか。

「名前は？ そいつの名前は何か」

「カワカツです。カワカツノブアキです。」

カワカツノブアキ……。聞いたことはない。仮にあったとしても、記憶にはなかった。

だが、これで面白くなってきた。綾波北か藤草か、なかなか良い試合を展開してくるのではないか。

「では、急いで戻ります」

「ああ、ご苦労だった。気をつけて帰ってきてくれ」

言いながら、清水はブルペンの方を見る。そこでは、カワカツと同じ1年生が、投球練習をしていた。

電話を切られる直前、清水は光輝に声をかけた。

「おい、最後にちょっといいか」

「はい」

「そのカワカツと、うちの”ゴールデン・ルーキー”はどちらが上だ」

しばらくの沈黙。悩んでいるのだろうか。そして数秒後、光輝は答えた。

「それはもちろん、ゴールドン・ルーキー……金松ですね」

「……そうか、分かった。では、気をつけて帰ってきてくれ」

清水は僅かに笑みを浮かべると、電話を切った。

11-1 王者への挑戦権(1)

綾波北高校

春季大会1次戦決勝戦

vs 藤草高校

ベンチ入り選手 18名

1	寺島 駿	3年
2	松永 中	3年
3	河北 亮	2年
4	木原 勝弥	3年
5	海田 和也	3年
6	寺重 大輔	3年
7	森山 智勝	3年
8	小沢 昇平	2年
9	井口 裕	3年
10	村井俊之介	3年
11	藤澤 翔也	2年
12	小畑 潤	2年
13	鈴木 昭宏	3年
14	岸本 俊輔	2年
15	吉田 宗	1年
16	林 真史	2年
17	丸田 純平	3年
18	芝田 一貫	3年

記録員：白波瀬花梨 3年

ボールボーイ内：小田 陽治 3年

ボールボーイ内：黒田 清 3年
ボールボーイ外：福井 優 3年

Cゾーン 決勝戦

綾波北 vs 藤草

勝てば2次戦進出・ベスト16

「緊張してる？」

白波瀬花梨に言われ、ベンチに座っている松永中は、思わず苦笑
いした。彼女の言うとおり、彼は今、ものすごく緊張していた。

「……そう見えるか？」

「うん」

「そうか……」

そうなのであるが、それが表情に出てしまっただけではキャプテン
失格だ。中は、気合いを入れるために、自分の頬を軽く叩いた。

「不安？」

「いや、そんなことはない」

不安とは少し違う。相手投手は良い選手であるが、糸太町戦のビ
デオを何度も観て、イメージは掴んでいるつもりだ。

だが、勝てば双葉と戦えるという状況が、中を少し追い詰めてい
た。

「双葉を意識したらあかんで。今は目の前の試合に集中せな！」

「……そうやな」

中は自分に気合いを入れて立ち上がると、ベンチから出た。試合
前ノックも終わり、グラウンド整備も既に終わっている。スターテ
ィングメンバーも発表され、先攻後攻も決めた。

あとはもう、ただ試合開始を待つだけだ。

「ベンチ前整列！」

ベンチ前で、各々素振りやキャッチボールをしていたメンバーが、

中の声に反応して、それを終えた。

綾波北高校は後攻であるため、スタメンの選手は皆グローブを持っていて。だが中は彼らと違い、全身にキャッチャー道具を纏っていた。それが、キャッチャーの格好だ。

「頼むぞ、駿」

「ああ」

自分の前で構える寺島駿に話しかける。黄画工業戦で登板の無かった彼は、万全の調整でこの試合に挑むことができる。投手戦が予想されるだけに、彼のピッチングは非常に大事となってくる。もちろん、それをリードする中も、重要な仕事を任せられているわけだ。審判員がグラウンドに現れる。いよいよ、試合開始が近づいてきた。

待つてる琢磨。必ず、俺らが上に上がるぞ

「集合！」

主審の合図がグラウンドに響く。

「いくぞ！」

腹から声を出し、中は駆け出した。

【両校 スターティングメンバー】

先攻 藤草

順	位置	名前
1	遊撃	細川彰悟
2	中堅	小淵昌也
3	右翼	森 広和
4	一塁	麻生一之
5	左翼	小泉正治
6	捕手	杉田晋平

- 7 二塁 前野 久
- 8 投手 川勝信昭
- 9 三塁 緒方 博

後攻 綾波北

順位	位置	名前
1	三塁	海田和也
2	左翼	森山智勝
3	中堅	小沢昇平
4	右翼	井口 裕
5	捕手	松永 中
6	一塁	河北 亮
7	投手	寺島 駿
8	二塁	木原勝弥
9	遊撃	寺重大輔

「サード！」

チームメイトから声がかけられる。だがその前にいち早く、三塁手の海田和也は打球に反応していた。

ほぼ真っ正面のゴロ。勢いは多少あったが、彼は難なくそれをグロープに収めた。落ち着いて一塁に送球し、この回3つ目のアウトを奪った。

駆け足でベンチに戻り、ベンチスタートの吉田宗からヘルメットとバットを受け取る。そしてフットガードを装着し、すぐにバッターボックスへと向かった。インニングの先頭打者は、円陣には加わらないのだ。

左バッターボックスの外で、川勝信昭の投球練習に合わせて何度も素振りをする。1年生にしては物凄く速いが、島福南高校の入江大志と同程度だ。打てない球ではないだろう。

投球練習が終わり、内野手がボール回しを始める。その間に、和也はバッターボックスに入った。

サードは少し前に守ってるか。セーフティは厳しそやな……横目で三塁手の守備位置を確認し、セーフティバントという選択肢を頭から消す。バットを構え、信昭からの初球を待った。

そしてマウンド上の信昭が振りかぶり、その右腕からボールが放たれた。

直球……！ もらった！

内角の直球。和也は迷わずバットを振り抜く。試合前のミーティングで、変化球は捨て、直球を狙い打ちするよう決めていた。好球必打は、先頭打者だからといって変わらない。

ボールとバットが衝突する。真芯で捉える軌道でバットを振ったはずだったが、手に伝わる衝撃は、とても重かった。どうやら、バットの根元で打ってしまったらしい。

打球は力なく跳ね、信昭のグローブに収まる。それを見ながら、和也は1塁へ走り出した。

「アウト！」

和也が1塁ベースを踏む前に、信昭から一塁手へボールが渡った。1塁ベースを駆け抜けた後、彼は急いでベンチに戻った。

「どうやった。あいつの球」

「多分カットボールや。しかも、かなり手前で曲がるから全く判断できん。厄介やぞ」

中に尋ねられ、ベンチの中で信昭の印象を答える。

金属音がし、和也はグラウンドに目を向けた。2番打者である森山智勝の打球が、力なく1塁線を転がっていた。数秒後、打球を捕った一塁手がベースを踏み、アウトが宣告された。

「昇平、頼むぞ！」

アウトカウントが2となり、3番打者の小沢昇平が打席に向かう。その背中に向かって、和也は声をかけた。

自分より一つ下の学年ながら、チームで1番頼りになる打者といっても過言ではない。そう思えるのが、彼という男だ。初回で2死無走者となっても、彼がいるから、ベンチはまだ得点を期待できる。和也もまた、期待を込めて昇平の打席を見守った。

ランナー無しで初回の打席を迎えるのは、久しぶりではないだろうか。打席に入りながら昇平は思った。いつも、和也か智勝のどちらか。もしくは両方が、塁上にいたのだ。

これが、”本物”か……

島福南や黄画工業とは違う、何か別のオーラが、藤草からは出ていた。新人生である信昭を有して1回戦で完勝し、自信もつけているのだろう。厄介だと、昇平は感じた。和也が言っていたこと以上に、この投手の存在自体が、厄介なのだ。

ここで叩く。2死から点を取られれば、動揺が生まれ、更なる追加点も狙える。昇平は、バットを体の正面に構え、ゆらゆらと動かし。紅白戦の最後に使った、神主打法だ。

完全に力みを取り、確実にボールを捉える。昇平はこの構えを、今までも何度か使っていた。長打は無いが、打率は10割だ。次は井口裕、そして5番の中と左が続く。期待ができる先輩達なので、今は塁に出るのが最優先だった。

信昭が振りかぶり、第1球目を投じる。内角、厳しいコースだ。自身の身体に向かってくるようなボールに、昇平は思わず身体を引いた。

「なっ!？」

思わず声を出す。自分の身体に向かってきていたボールが急に曲がったのだ。

「ストライク!」

審判の腕が拳がり、昇平は思わず捕手を見た。判定に不満があるわけではない。ただ、驚いたのだ。

海田さんが言ってた通りやな。凄いキレや……

1年生が投げたとはとても思えないボールに、昇平は思わず苦笑いした。もつとも、これくらいの方が叩きがある。

2球目、再び内角のボール。手を出す、打球は三塁側のファウルグラウンドを転がった。

徹底した内角攻めか。まあでも、当てるだけなら簡単や

ゆらゆらとした構えからバットを軽く出し、次々とボールに当たっていく。5球をファウルしたが、そのうち4球が内角の際どいコースだった。昇平は内角が苦手だということに、気づいているとは思えない配球だった。

カウントは2ストライク2ボール。9球目が投じられた。

このっ……また内角！

身体を回し、真芯でボールを捉える。痛烈なライナーが三塁線を襲った。打球は、飛び込んだ三塁手が差し出したグローブの脇を、抜けていく。

「ファウル！」

バットを放って走り出そうとした昇平の耳に、主審の声が響いた。惜しくもラインの外側だったようだ。バットを拾い、仕切り直して再び打席に入る。

「よく食らいつくな」

捕手の呟きが聞こえる。昇平は思わず苦笑いした。

「いくら何でも、同じコースばかり続けてたら打ちますよ。なめてるんですか？ 次はレフトの頭を越しますよ」

「……お前が言っと、リアルやな」

吐き出すように捕手が答える。苦手であるはずの内角に投じたストリート・カットボール・スライダーを、ことごとくバットに当てられ、切羽詰まっているのだろうか。

信昭が振りかぶる。これでもう10球目だ。昇平はバットを僅か

に引いた。

来た、外角！

半ば予想していたボールに反応し、昇平はバットを動かした。1番打ちやすいコース。真芯で捉える軌道は、もう身体に染み着いている。

バットとボールが近づく。だがそれらは出会ったことなく、バットが空を切った。

「ストライク、バッターアウト！」

審判の腕が上がる。ボールは、捕手のミットに収まっていた。

フォーク……やと！？

完全に失念していた。悠々とベンチに引き上げていく藤草ナインを見ながら、昇平は唇を噛んだ。

「これは驚いたな……」

試合を見つめながら、双葉高校2年の山崎進は思わず呟いた。理由はもちろん、マウンド上にいる信昭だ。

2試合連続コールド勝ちをおさめた綾波北打線を、2イニング連続で三者凡退に封じているのだ。そして今、3回裏、綾波北の攻撃を迎えている。

「金松の方が上って言ってたけど、この川勝って奴も相当良い投手やぞ」

「ああ。俺が先週見たときより、さらに良くなってる。マウンド上で堂々としたるな」

進の言葉に答えたのは、彼の隣で試合をビデオカメラで撮影している武田光輝だ。彼は先週、藤草と条太町の試合を見ていた。

そのとき金属音がして、先頭打者の寺島駿が走り出した。打球は三塁手の正面に力なく転がっている。その三塁手がダッシュで打球との距離を詰めてさばくが、一塁手へボールが渡るよりひと足早く、駿が1塁ベースを駆け抜けていた。

「お、先頭打者が塁に出たぞ」

「目を離すなよ。ランナー出てどうなるか、しっかり見るぞ」

「言われなくてもそのつもりや」

互いにグラウンドを見ながら話をする。初めてのランナー、それも打ち取った当たりが内野安打となったとなると、今までと投球が変わるかもしれない。それを少しでも見逃すわけにはいかない。

信昭は2回ほど牽制球を投げると、その後打者に対して投げた。当然、打席にいる8番打者はバントの構えをしていたが、バットを引いた。投球がボールだったからだろう。

「走るかな、ランナー」

「どうやるな。川勝も牽制をしつこくしてるし、綾北がバントエンドランを多用してるくらい、藤草も知ってるやろ」

光輝の問いに、グラウンドを見ながら進は答えた。今までの2試合で、綾波北がバントエンドランを多用することは、既に把握していた。藤草はどうか分からないが、おそらく彼らも気づいているだろう。だからランナーを必要以上に警戒しているのだ。もっとも綾波北とすれば、それも一つの狙いなのだろうが。

再び1度牽制球を投げ、信昭が第2球を投じた。

「あつ」

光輝が声を出す。進も、思わず声を出しそうになった。信昭が投げた瞬間に捕手が立ち上がったのだ。そのミットにボールは向かっていく。

バントの構えをしていた打者は、飛びついてバットにボールを当てようとした。わざわざボール球を当てに行く理由はただ一つ、1塁ランナーの駿がスタートを切っていたからだ。綾波北お得意の、バントエンドランである。

執念を見せたものの、無情にもボールはバットをすり抜けてミットに収まる。立ち上がっていた捕手はすぐさまボールをミットから右手に持ち変えると、2塁ベースへ送球した。ベースカバーに入った遊撃手が捕球し、向かってきた駿にタッチした。審判の右腕が拳

がった。

「今のプレーは大きいな。これで綾北は、しばらく迂闊に動けへんやろっ」

光輝が言った。スコアを書きながら、進は答える。

「ああ。バントエンドランに頼りすぎやな。完全に読まれとった」

「それにしても、よく外したよな、あのバッテリーは。ノーツーになる危険もあつたのに。キャッチャーの送球も良かった」

「せやな。俺らも油断はできひん相手やぞ、藤草は」

進の言葉に、光輝は黙って頷いた。藤草と双葉の実力差は明らかとはいえ、藤草は2勝して勢いに乗ることになる。がむしやらに向かってくる、挑戦してくる。そういうチームは、意外と手強い。

そのとき、まだ自分たちの相手が藤草に決まっていなかったことに、進は気付いた。むしろ、まだ同点なのだ。

だが彼はそれを訂正しようとはしなかった。光輝が、それについて何かを言うこともなかった。

11-2 王者への挑戦権(2)

「厳しいな、どうも……」

3回裏の攻撃が結局3人で終了すると、駿はマウンドに向かいながら呟いた。

今までの2試合は序盤のうちに大量のリードを貰っていたので楽だったが、今日は非常に神経を遣う。久しぶりに実力がそこそある高校と公式戦を行い、その感覚を思い出ししてきた。例えば、昨秋の大会で行った3試合は1勝2敗だったが、その勝ち試合も接戦だった。

敗者復活戦がある秋とは違い、春は1度負けたら即終了だ。投手の役割は非常に大きい。

投球練習を終え、打席に2番打者を迎える。1回の第1打席は三振を奪った相手だ。打者一巡で許したヒットは1本。投手とは対照的に、藤草の打線は全く怖いと感じなかった。

粘るしかない。こっちが点を取るまでは、絶対に点を取られるわけにはいかんから……

自分自身に気合いを入れ、初球を内角に投げ込む。僅かに打者はのけ反ったが、審判の腕が上がった。

さらに2球目も外角に決まり、簡単に追い込む。ストレートの調子は、いつも以上に良い。今日はストレートで押していこうと駿は思っていた。中も同じ考えだ。

3球目もストレート。打者は高めのボール球に手を出し、バットが空を切った。

「ストライク、バッターアウト！」

審判のコールが気持ちいい。緊張感はあるが、ある程度はあった方が、やはり自分のピッチングに磨きがかかる。

左打席に3番打者が入る。三振を奪った余韻に浸っているわけにはいかない。駿は気を引き締め、投球モーションに入った。球種は

もちろんストレートだ。

ボールを指で弾くように投げる。中がミットを構える内角低めに、吸い込まれるように向かっていった。相手打者のバットが動き出す。金属音がグラウンドに響く。だがコースが良かったのか、打球は力なく転がった。遊撃手の寺重大輔が前に出てきて打球を捌く。一塁手へストライク送球。打球の割には、余裕でアウトとなった。

「ナイスショット！」

「おう、もっと打たせろ。三振ばっかで暇や」

大輔の言葉に、駿は軽く笑った。内野ゴロが多い試合には、もっと三振を取れと注文してくるくせにと、心の中で呟いた。

2死無走者となり、打席に4番打者が入った。攻撃の良い流れは守備で作る。そのためには、上位打線を三者凡退で抑えることが大事だ。

4番とはいえ、怖くはない。テンポよくいくぞ

目で中に思いを伝える。それが通じたのか、彼は小さく頷いた。初球、アウトコースにストレート。打者は手を出したが、バットは空を切った。そう簡単に、130km/h台後半のボールは打たれない。心配すべきは失投だけだ。

2球目もアウトコースにストレートを投げた。今回は見送られたが、審判の腕が拳がった。

3球目のカーブを外に外し、これでカウントは2ストライク1ボール。次のボールが勝負球だ。

インコース高めに、ストレート！

中のサインと全く同じ考えを持っていた駿は、思わず笑った。もちろん、サインを見て表情を変えるわけにはいかないのです、心の中心で。

振りかぶり、渾身のストレートを投げ込む。バットが動き出すのが見えた。直後に、金属音が聞こえた。

「センター！」

打球の行方を声に出す。中堅手の昇平は、既に後ろへ走り出して

いた。

完全に詰まった打球。駿が投げたストレートの球威が、打者の力を上回ったのだ。相手も4番ということではなかなか飛ばしたが、所詮はセンターフライだ。

高く上がった打球を見つめる。なかなか落ちてこずに、ゆっくりと伸びていく。上空は、ホームからセンター方向に風が吹いているのだろうか。

しばらく経ち、ようやく打球が落ちてきた。それに伴い、昇平が下がるスピードも段々と落ちていくのが分かる。

だがその直後、彼の身体がフェンスにぶつかった。駿は思わず目を見開いた。

白球はゆっくりと、しかし確実に落ちていく。既に昇平は見上げている。フェンスは高い。ボールを掴むことはできないだろう。

そしてゆっくりと、打球はフェンスを越えていった。

「そんな、アホな……」

沸き上がる藤草のナインを感じながら、駿はじつと打球の落下地点を見ていた。完全に詰まらせた打球だった。それが僅か数m、もしかしたら1mもないくらいの距離でフェンスを越えた。グラウンドルールでは、あのフェンスを越えればホームランだった。

審判の腕が頭上でクルクルと回り、打ったランナーがダイヤモンドを1周している。ようやく、自分がホームランを打たれたのだと気がついた。

「ピッチャー！」

主審が自分を呼ぶ。振り返ると、その手にはボールが握られている。駿は帽子を脱ぎ、その新しいボールを受け取った。

直後、マスクを外した中が小走りでもウンドに向かってくる。他の野手は来ない。バッテリー間のタイムは何度もできるが、マウンドに3人以上　つまり、他の野手が一人以上　集まるのは9イニングで各チーム3回までと決まっている。

「気にすんなよ。完全に詰まってたんや」

「ああ。大丈夫、これ以上はやらん」

「頼むぞ」

駿の胸を軽くミットで叩き、中は守備位置へと戻っていった。そしてすぐに次の5番打者が左打席に入った。高校野球は、テンポが早い。

中にはああ言ったが、駿は先程のホームランをかなり気にしていた。形はどうであれ、先に点を取られてしまったのだ。信昭から大量点を臨めない以上、こちらが点を与えないのは最低条件だった。その最低条件すら、達成できなかった。

ちくしょう……

ボールを握る指に力を込める。もうこれ以上の点はやれない。ゆつくりと振りかぶり、駿は初球を投じた。

「あつ」

投げた瞬間、思わず声が漏れた。彼が投げたボールは、打者の身体へと向かっていった。打者がおそらく本能的に避けようとするも、それは彼の太ももへと当たった。

ボールが当たった右脚の太ももを擦りながら、打者が1塁へ向かう。デッドボールとなり、打者に1塁への出塁が与えられたのだ。

ボールを拾い、中は唇を噛んだ。完全に流れは相手にある。下手をすれば、大量点につながりかねない。

「駿、楽にな。2アウトや、バッター集中で！」

ボールを揉み、駿に投げ返す。彼は受け取りながら頷いた。気持ちを切り替えられているのかは分からないが、今は彼を信じるしかない。

右打席に6番打者が入る。条太町戦でも、特に打っていたわけではない打者だ。第1打席も三振していた。ここで流れを断ち切り、攻撃に繋げたい。

中はカーブのサインを出し、ミットを外角に構えた。ボールにな

ってもいい。とりあえず、駿の気持ちを切り替えさせるためだ。

駿がセツトポジションから足を上げ、白球を投じた。ランナーは動かない。揺さぶるために走ってくるかとも思ったが、どうやらそれは無いようだ。白球がミットに向かってくる。

甘い……！

ボールが、少し内に入ってきた。バットが動き出す。ボールは中のミットに収まる前に、バットによって外野へ飛ばされた。

「レフト！」

立ち上がってマスクを外し、声を出す。完全に甘いボール。球威の無い駿の変化球なら、外野まで運ばれても仕方がなかった。

左翼手の智勝がこちらに背を向けて走り出す。打球は、比較的狭いグラウンドの外野フェンスに直接当たった。上手くクッションボールを処理し、智勝は遊撃手の大輔に送球した。

「ストップ！ 持ってこい！」

1塁ランナーは3塁ベースで止まった。中は大輔に指示を出す。指示を聞いた彼が、送球することなくダイヤモンドまで走ってきた。ホームベースのカバーに来ていた駿がマウンドへと戻り、大輔からボールを受け取る。

マズいな……

二死2、3塁。これ以上の失点は絶対に許されない。左打席に、7番打者が入った。

おそらく内角に構えても、今の駿なら腕を振れず、威力の無いボールがくるだろう。流れが完全に相手へ渡っている今、下位打線とはいえども外野の前に落とされる可能性は十分ある。最悪の場合、それで2点を失うのだ。

中は外角低めギリギリにミットを構えた。1塁は空いている。最低フォアボールでもいいという気持ちだった。

セツトポジションから駿が初球を投じる。構えたところとほとんど変わらないコースだ。だが、その球威はこれまでと比べると全然無かった。

バットがボールを捉えた。打球は三塁線を痛烈に襲う。飛び込んだ和也が差し出したグローブの先を、それは抜けていった。
「ファウル！」

審判が叫び、マスクを投げ出していた中はホッと息を吐いた。あれがフェアゾーンに飛んでいたら、おそらく2点を失うのは免れなかっただろう。信昭相手に3失点は、もはや致命的といえた。

だが、それでもピンチには変わらない。

際どいコースは無理か……。なら……

座った中は腕を大きく広げ、ど真ん中にミットを構えた。

コースなんて気にすんな。全力で投げてこい……

目で駿に訴える。駿は軽く頷くと、セットポジションに入った。脚を上げ、2球目を投じる。

高め。甘いコースだが、球威はある。バットが動き出す。ボールと衝突し、金属音がグラウンドに響いた。

「キャッチャー！」

駿の声が聞こえる。それとほぼ同時に、中はマスクを投げ捨てて打球を追っていた。

ファウルゾーンへの小フライ。バックネットに当たりそうな打球だが、当たりはしないだろう。捕れる、中はそう思った。

ボールが落ちてくる。中との距離はまだ結構残っていたが、届かない距離では無かった。

「くそっ！」

スライディングし、ボールの落下地点に入る。低い位置でボールを掴んだ瞬間、身体を衝撃が襲った。

「中！」

駿の声が聞こえる。バックネット下のフェンスにぶつかった自分を心配してのものだろうと、中は思った。

それに応えるように、彼は倒れたままミットを高く掲げた。

「ア、アウト！」

主審のコール。直後に綾北のベンチが沸いた。中はミットからボ

ールを取り出して立ち上がり、マウンドに来ている和也に送球した。

「ナイスキャッチ！」

「おう、ありがとう」

和也と共にベンチに戻ると、更なる歓声が浴びせられる。中は照れ笑いを浮かべながら円陣の中に入った。

「ナイスキャッチや、中」

円陣の中で、監督である西村雄吾が言った。

「ありがとうございます」

「まだ1点やぞ。ピンチをしのいで、この回は和也からや。諦める奴はおるか」

「……………」

「……………狙い球をしつかり決める。左打者はインコースのカットボールに気をつける。打ってもファウルか内野ゴロにしかならん」

「はい！」

「フォークは捨てる。追い込まれるまではほとんど投げてこうへん。狙うのは……………」

「カウントを取りにくるストレート」

中は答える。これらは全て、試合前に行っていたミーティングで確認していたことだった。西村は頷く。

「打てない球やないぞ。守備のレベルも高いわけやないから、上から叩いて転がせば、必ずチャンスは作れる。ワンチャンスをしっかりとものにしていけ！」

「はい！」

円陣を解き、各々がベンチに入る。まだ1点を失っただけだ。プロテクターを外しながら、中は自分を鼓舞すべく頬を軽く叩いた。

打球が力無く自分の方へ転がってくる。信昭はそれを難なく捌き、二死とした。

「ふう……」

額を流れる汗を、アンダーシャツで拭う。打線が2巡目になり、追い込んでからもしつこくバットに当ててくるようになった。この回は、打者二人に15球ほど費やした。

だが、先制してもらった直後のイニングだ。例え球数が増えようと、必ず無失点で切り抜けなければならない。欲をいえば、3人で終わらせたい。

だが、その3人目の打者が問題だった。

綾北一の好打者といわれる、3番打者の昇平が右打席に入る。1打席目は三振に仕留めたものの、その威圧感は相変わらずだ。

双葉のバッターは、全員がこういう感じなんやろうな……

双葉高校は間違いなく京都府で1番の実力がある高校だ。昇平ほどの実力者でも、レギュラーになれるかどうか分からないだろう。もしかしたら、背番号すら与えられないかもしれない。それくらい、双葉という高校のイメージは強大であった。

その高校との対戦が、目の前に迫っている。ここまでは藤草のペースで試合を運んでいる。もし勝てば、次の試合は双葉とだ。

あかん。今はバッターに集中しろ……

小さい頃からのヒーロー、双葉高校と試合をしてみたい。だが、それもこの試合に勝ってからだ。

球数をかけてもいい。全力で昇平をねじ伏せる。

信昭は捕手のサインを確認する。初球はインコースのストレートだった。事前の情報で、昇平はインコースに弱いと言われていたが、1打席目は結局インコースで打ち取ることができなかった。実際のところはどうなのだろう。

ストレートで空振りを奪えれば、投球に幅ができて自信も生まれる。まさに、勝負の1球だ。

振りかぶり、普段と同じ一連の動作でボールを投じる。全力で投げたが、狙ったところ　インコースの低めにボールは向かった。昇平のバットが、動き出す。

しかしボールはそのバットを掻い潜って、捕手が構えるミットに収まった。

「ストライク！」

審判の声を聞き、信昭は思わず、まだ1ストライクにもかかわらずガッツポーズをしそうになった。ストレートで、昇平から空振りを奪ったのだ。

2球目は外角にスライダー。これにも、彼のバットは空を切った。

「ナイスピッチ！」

「あと1球！」

「楽にな！　余裕あるぞ！」

野手陣からの声も、いつもより元気がある。皆も信昭と同じように興奮しているのだろう。

だがまだだ。2ストライクとなっても、打者はアウトにならない。あと一つ、ストライクが必要だ。

小沢さんを2打席連続三振に打ち取ったら、俺も有名になるやろか……

ふと思ひ、そして笑う。そんなことは三振を取ってから考えよう。

3球目、4球目と外角にストレートを外した。2ストライク2ボールとなり、信昭はサインを見る。

フォークか。2度も同じ手が通用するやろうか……

彼はグローブの中でボールを指で挟む。狙うのはもちろん低めだ。ワンバウンドしてもいい。

そして5球目、狙った低めにボールが向かう。昇平のバットが動き出した。

よし、もうバットは止まらん！

ボールが落ち、昇平の態勢が崩れ、信昭がガッツポーズをとろうとしたその瞬間、ボールはバックネットへと飛んだ。

「え……？」

「ファウルボール！」

……当てられたのか

さすがに、2度も同じ手は通用しないのか。逆に、こうでなければ面白くない。

その後、ストレート3球を投じたが全てファウルされ、さらに、外角に外れたスライダーを見逃された。

フルカウントか。勝つか負けるか、俺のストレートが通用するかどうか………勝負！

10球目、初球と同じインコースのストレート。全身全霊をかけて、投げ込んだ。コースは少し甘くなったが、それでも難しいコースには変わらない。今までで最高のボールだ。

昇平が打ちにくる。初球はそれを掻い潜ったボールだが、今度は無理だった。フラフラとした打球が、フェアゾーンに飛んだ。

「ライト！」

信昭は叫び、打球の行方を目で追う。右翼手が前に出て打球との距離を詰めるが、無情にもそれは地面に落ちた。ワンバウンドで、右翼手は打球を処理した。

打った昇平が1塁ベースを回り込み、軽く右手でガッツポーズを作る。それを見た信昭は、野手からボールを受けながら苦笑いした。やはり、彼を抑えるのは簡単ではないようだ。

だが、まだ集中を切らしてはいけない。二死1塁とはいえ、次は4番打者だ。綾波北のクリーンアップは強力であるため、ピンチになりかねないのだ。

4番打者が左打席に入る。信昭は額の汗をユニフォームの袖で拭いた。この回は、かなりの球数を要している。4月下旬とはいえ暑い今日、汗がダラダラと流れてきていた。

捕手のサインは外角のストレート。長打と盗塁を警戒してのもの

だろう。信昭は頷き、セツトポジションに入った。

昇平が単独スチールを仕掛けてくるのは考えがたい。奇襲としてヒットエンドランというのも考えられるが、それも確率としては低いものだ。

でも、最悪ボールでいい……

勝負を焦る必要はない。ランナーが動く可能性がある以上、慎重に投げる必要がある。

左足を僅かに上げ、すぐに前へ踏み出す。クイックモーションから、信昭は初球を投じた。直後、彼は思わず、あつと声をもらした。しまっ……！

思考が追いつく前に、打者のバットがボールを捉えた。金属音が鳴り、信昭は打球が飛んだレフトを見た。

低いライナーで飛んだ打球が、左翼手の前に落ちる。左翼手が打球を捕ったときには既に、1塁ランナーの昇平は2塁ベースに到達していた。

綾波北ベンチが湧く。二死からの連打で、打席にはキャプテンだ。嫌でも盛り上がるだろう。

「川勝、楽にな。気にすんなよ」

捕手が声をかけてくる。心強い先輩の声に、信昭は大きく頷いた。綾波北の打線は好調だ。もともと、簡単に無失点で切り抜けられるとは思っていない。ただ全力を尽くして、目の前に立ち塞がる打者と対するのみだ。

打席に向かう中を見ながら、彼は気合いを入れるためにスツと息を吐いた。

打球が左翼手の前に落ちたのを見て、中は手を叩きながら喜んだ。絶対に外角のストレートを投げてくると、彼は4番打者である井口裕に伝えていた。

その通りにきたボールを、彼は逆らわずにレフト前に弾き返した

のだ。4番打者でありながら、次打者に繋ぐことに徹したのだ。その思いに、キャプテンである自分が応えないわけにはいかない。

二死1、2塁。次は強打者の河北亮であるが、彼の1打席目は信昭に対して全く合わずに三振をしていた。ましてや彼は2年生であり、全てを押し付けるのはナンセンスだろう。一打同点であるこの場面、最低でも同点にしてから、楽な状況で亮に回したかった。

中はゆっくりと打席に入る。ピンチではあるが、マウンド上の1年生投手信昭は、あまり動揺していないように見えた。これほどの実力を持った投手だ。おそらく中学時代から、数多くのピンチをくり抜けてきたに違いない。これくらいのピンチは臆するに値しないということだろうか。

なら俺が、その表情を変えてやる……

初球、外角のストリートを中は見送った。少し厳しめのコースであったが、審判の手は上がらない。

打たれた直後に同じようなボールを投げられる。大した強心臓だと中は思った。

2球目も高めに外れ、信昭が3球目を投じた。インコースのストリート。甘いボールではないが、この流れでストライクゾーンにきたボールを見逃す選択肢は無かった。中はバットを振り下ろす。

バットに衝撃はなかった。代わりに、すぐ後ろでキャッチャーミットにボールが収まる音がする。審判によるストライクのコールが、グラウンドに響いた。

少し遅れたか。やっぱり、打席で見るとノビてんのが分かるな

……

0ストライク2ボールから、これほど思い切って投げられるとは、大した1年生だ。まるでピンチを楽しんでいるかのように、ボールが勢いを増しているように思えた。

テンポ良く、4球目が向かってくる。外角のカーブを中は見逃し、カウントが2ストライク2ボールになった。

ここでカーブ……。相変わらず、良いコントロールや

2ストライクになったことで、マウンド上の信昭からはさらに余裕が感じられる。それを見ながら、中はバットを握る力を強めた。まだ追い込まれただけだ。キャプテンとして、クリーンアップとして、チームみんなの期待に応えなければならぬ。再び向かってきたボールへ、中はバットを振り抜いた。

打球がバツクネットに直撃する。これでこの打者は、5球連続でファールしたことになる。ストレートも、カットボールも、カーブも、ことごとく当てられている。ピンチであるため神経をすり減らしながら投げているというのに、本当に嫌な打者だと、信昭は思った。

残るはスライダーとフォークだ。そろそろフォークを投げてもいいと彼は思っていた。その気持ちを通じたのか、捕手が出したサインはフォークだった。当然ながら、信昭は頷く。

振ってくれ。心から彼は思った。この回だけで、もう数十球を投げている。早く守備を終えてベンチに帰りたかった。守備が長いと、味方の攻撃にも悪影響が出る。

一度、2塁ランナーの昇平を見る。ここまで走る気配はない。ダブルスチールやヒットエンドランなどの奇襲はないようだ。キャプテンに全て任せたとのことだろう。

捕手のミットを見つめて、信昭は足を上げる。ワンバウンドするくらいの低さに決まればベスト。最悪でも、高めは避けなければならぬ。絶対に止めてくれると捕手を信じて腕を振ることが一番大事なのだ。

ボールが指から抜ける。感覚は良い。コースも、低めにいっている。

中のバットが動き出した。だが、これだけ低めに決まれば打つのは難しいだろう。もう彼のバットは止まらない。体勢も、崩した。

よし、勝つ……

信昭が心の中で勝ちを確信した瞬間、体勢を崩されたはずの中が、地面に足をついて一瞬の“タメ”を作った。

金属音が聞こえてきたのはその直後だ。打球は、投げ終わった信昭の顔に向かってライナーで飛んできた。咄嗟に彼はグローブを顔の前に持ってきた。

グローブに衝撃。もともと打球を避けようとして身体を仰け反らしていたため、バランスが崩れる。右足を少し引いて、信昭はなんとか体勢を保った。

「アウト！」

主審のコール。中が天を仰ぐ。信昭がグローブを見ると、その中には白球が収まっていた。

「ハハ、ハハハ……」

両膝に手をつく。ゾクゾクするような興奮。快感を伴う疲労感。

中盤にさしかかり、文句なしのコースに投じた決め球のフォークを何度も捉えられた。これだ。これこそが、高校野球なのだ。

「ナイスピッチ！」

信昭の背をポンポンと叩きながら言ってきたのは、中堅手の小淵昌也だった。信昭と同学年である彼は、中学時代からのチームメイトであった。

常に信昭の後ろから試合を見ている彼の目に、今の勝負はどう映ったのだろうか。信昭と同じように、スリリングに映っていただろうか。

「なあ小淵……」

「どうした」

「楽しいな、高校野球って」

「ああ。双葉や丹染や長門西なんて強豪校に進んでたら、1年の春からこんな経験をするのは無理やったやろうな」

高校選択時、信昭は強豪校に進学することも考えた。しかし彼は近所にある藤草高校に進学した。中学時代に所属していたボーイズリーグの監督には反対された。家族も、公立の強豪である丹染など

に進学してほしかっただろう。だが彼は結局、高校野球においては無名とっていい公立校への進学を決めたのだ。

強豪と呼ばれる高校を、自分の力で倒したかった。そしてその自信を、彼は持っていた。

入学の前、春季大会の組み合わせが決まったとき、彼は自分の強運に感謝した。一次戦を勝ち抜けば、二次戦の初戦で双葉と当たる組み合わせだ。いきなり、自らの力を試すチャンスが目の前に現れたのだ。

こんなところで負けられない。ついてきてくれた親友のため、反対しながらも最終的に意思を尊重してくれた両親・監督のため、そして何よりも自分のため、残りの5イニングで全力を尽くす。

膝から手を離すと、信昭はダッシュでベンチに戻った。

「くそっ……」

ベンチの中からマウンド上の信昭を見て、宗は唇を噛んだ。

堂々としたピッチングを見ていると、同じ1年生とは思えない。

安藤克也も実力的にはなかなか良い投手であると思ったが、それを上回っている。

4回裏のピンチをしのいだ信昭は、亮から始まる続く5回を三者凡退で切り抜けた。悠々と、ベンチへと帰っていく彼の後ろ姿を見て、宗はさらに悔しさが込み上げてきた。

「吉田」

「はい！」

監督に呼ばれ、宗は力強く返事をした。この試合は綾波北のベンチ入りメンバーで唯一の1年生だ。緊張感もあるが、それ以上に気合いが入っていた。

「バットを振っておけ。終盤でいくぞ」

「はい！」

再び力強く返事をする、宗は出場メンバーの誰も使用していないバットを取り、ベンチから出た。

5回が終了したため、グラウンド整備が行われている。この間に、メンバーはキャッチボールや素振りなどをしながら、気持ちを切り替えるのだ。

ファウルゾーンの隅で、宗はバットを振り始める。投球練習をしていた、藤澤翔也と芝田一貴が少しこちらを気にする様子を見せた。一貴は、ベンチ入りメンバーで唯一の左投げ投手だ。登板機会はそれほど多くないが、先週に村井俊之介と翔也が投げているので、彼も肩を作っている。

だが、彼らが登板することにはならないだろうと、6回のマウンドに上がった駿を見ながら宗は思った。4回のピッチングこそ少し

乱れたが、5回は三者凡退で退け、この6回も簡単に2アウトをとった。

金属音。打球が力なく、二塁手である木原勝弥の前に転がる。彼が難なく捌き、この回3つ目のアウトを奪った。

ナインがベンチへと戻っていく。宗も、彼らとともにベンチへ戻り円陣に加わる。まだ1点差だ。誰一人として諦めていないのは、明らかだった。

「サード！」

6回裏、先頭の9番打者を引っかけさせ、信昭は叫んだ。ポテボテの打球に対し、三塁手が前にダッシュして距離を詰める。

よし、1アウト……

信昭がそう思ったのもつかの間、打球が僅かに跳ねる。そしてそれは、三塁手が構えたグローブの土手に当たって弾かれた。

ボールが自分の方に転がってきた。信昭は急いで拾うと、すぐさま反転して1塁ベースへ送球した。

「セーフ！」

バッターランナーが先にベースを踏む。審判の腕が横に広がった。「すまん……」

「大丈夫です。気にしないでください」

地面が荒れていたのか。それとも石か何かに当たったのか。どちらにせよ、三塁手を責めることはできない。

無死1塁で、左打席に1番打者が入る。バントの構えはしていないが、おそらくバントをしてくるだろう。

問題は、ランナーが走るかどうかだ。先ほどバントエンドランを失敗しているだけに、迂闊には走れまい。下手にカウントを悪くするよりは、ストライクを取りにいべきだろう。バント時にボールが先行すると、野手にとっても悪影響が出てしまうのだ。

一度だけ牽制球を投げ、信昭は初球を投じた。やはり、打者はす

ぐにバントの構えを見せた。

「逃げた！」

一塁手の叫び声を聞いたのはそのときだった。ランナーが走ったということだ。ストライクをとりについたボールを、打者は確実に三塁側に転がした。まんまとバントエンドランを決められたわけだ。
ちくしょう！

急いでボールに向かう。ランナーが走ったため、二塁でアウトを取るのは無理だろう。落ち着いて、一塁でアウトを取ればいい。

「もうた！」

「え？」

横で聞こえた三塁手の声。三塁手はバントに備えて前に守っていたが、それでもこのコースは自分のボールだと、信昭は思っていた。任せるか。少し迷うが否定する。先ほどミスをした彼だ。落ち着いて送球できるとも限らない。

「僕がいきます！」

右手で三塁手を制し、すぐに打球を捕球する。ミスを取り返すべく思い切りダッシュしたのか、勢い余った三塁手がぶつかってきそうになった。体を屈めて避け、一塁へ送球する。間一髪、アウトになった。

「3つ！」

二塁手の声で信昭は三塁を見る。そこには、誰もいなかった。

ベースカバーは！？

無人のベースを見て考える。自分が打球を処理したのだ。当然、三塁手がベースに戻るべきである。だがその彼は、信昭にぶつかりそうになるくらいダッシュしてきていた。

一塁手はバントダッシュ。二塁手は一塁ベースのベースカバーに入り、遊撃手は二塁ベースに入っていた。内野に余りはいない。二塁ベースへ送球してきたときのために備えていた左翼手も、三塁ベースには遠い。

むしろ一番近い場所にいるのは、塁間の距離も離れていない信昭

という有り様だ。

「ちっ……」

信昭は慌てて3塁ベースへ向かう。間に合うかは分からない。だが、走るしかない。

ボールを持つている二塁手を呼び、投げさせる。走りながらそれをキャッチした彼だったが、そのときには既に、ランナーは3塁ベースへ到達していた。

嘘やろ……

ボールを持ったまま、信昭は呆然と立ち尽くす。綾波北のバントエンドランはあれほど警戒していたはずだ。そして、それを一度失敗させている。

まさか二度も仕掛けてくるとは考えていなかった。一度完全に失敗したプレーは敬遠するであろうという、勝手な憶測でプレーしてしまったのだ。

三塁手を信じるべきだった。あれだけダッシュしていたのだから、三塁手に任せても普通に投げていけばアウトになっただろう。そして自分が、ベースカバーに入ったらよかったのだ。

「す、すまん……」

「いえ、こちらこそすみません」

マウンドに戻りながら、三塁手と言葉を交わす。彼は相当落ち込んでいるようであった。

一死3塁で2番打者。状況としては最悪だ。スクイズでも犠牲フライでも、そしてもちろんワイルドピッチでも点が入る。抑えても、次打者は3番の昇平だ。

1点は仕方ないな

開き直ろう。エラーで出たランナーだ。バタバタしても仕方ない。2点目を与えるのだけは避けなければならない。

打席に入る2番打者を見ながら、信昭は思った。

セットポジションに入り、捕手のサインを確認する。初球はウエストボール　わざとストライクゾーンから外すボール　だった。

スクイズを警戒しなければならぬ場面なので、仕方ないだろう。

目で3塁ランナーを牽制し、初球を投じる。外角高めに大きく外し、捕手が立ち上がって捕球する。スクイズの構えは、なかった。

2球目のサインは外角のストレート。ボール気味でもいい、むしろボール気味にしろというものだった。おそらく、まだスクイズを警戒しているのだろう。当然、スクイズもありえる。

2球目を投じる。外角低めにストレートが走る。際どい、信昭は思った。バントの構えはなく、打者はボールを見送った。一瞬の間、そして審判が手を上げることなく「ボール」を宣告した。

スクイズはない……？ いや、でもまだ……

捕手からボールを受け取りながら考える。綾波北としては確実に1点が欲しい場面だ。今大会で何度もバントを決めている、この2番打者にスクイズをさせるのか。それとも強行策か。この後には、3番の昇平をはじめとする好調な中軸を迎える。

分からない。正直な感想だった。ただ、信昭としてはスクイズをしてくれた方がありがたかった。1点は取られるが、二死無走者で昇平を迎えられる。ランナーを気にしなくて済むその場面で昇平を抑えれば、最少失点で切り抜けられる。もとより、1点は覚悟しているのだ。

3球目のサインは外角のストレート。単純すぎるリードだが、やはりこの場面で内角には投げさせにくいのだろうか。信昭としても、とりあえずストライクを取りたかったので異論はなかった。

足を上げてランナーを見る。一瞬スタートを切るがそれはフェイントで、すぐに止まる。そもそも、本当にスクイズなら、投手が視線を本塁に向けるまでランナーはスタートを切らない。

スクイズはない。少し安心しながら、信昭は制球重視で投げ込む。真ん中寄りの外角高めに、ボールは向かう。間違いなく、ストライクゾーンだ。

そのとき、打者のバットが動き出した。

「あっ……」

思わず声が漏れる。このカウントから打ちにくることはないだろうと、完全にストライクを取りにいったボールなのだ。手を出せば、絶好球になる。

金属バットがボールを捉える。逆らわずに流した打球が、ライナーで飛んだ。

信昭は咄嗟に、打球が飛んだ三遊間に目をやる。抜ければ確実に点が入る。

そのとき、三塁手の身体が横に飛んだ。そして打球が、信昭の視界から消えた。三塁手が、倒れたままグローブを掲げる。

「アウト！」

審判の腕が上がる。ライナーバックで自重していた三塁ランナーが、ベースに戻った。

三塁手が立ち上がる。一度三塁ランナーを見た後、ベースを遊撃手に任せて、笑顔でマウンドに向かってきた。

「緒方さん……」

「もういっちょ打たせる。俺のミスは、俺が片付ける」

「……はい！」

グローブを差し出し、中にボールを入れてもらう。ボールと一緒に、彼の気持ちも入ってきたように感じた。

何が1点は仕方ないだ。野手のエラーで出たランナーこそ、抑える必要があるではないか。それが、エースの義務だ。

点は、やらない……！

右打席に入った昇平を見ながら誓う。野手は必死に守ってくれている。それに自分が応えなくて、いいわけがない。

初球、高めに渾身のストレートを投げ込む。昇平が振ったバットがそれに当たった。だが、打球はフラフラっと上がったただけだった。

「サード！」

信昭は叫ぶ。ファウルグラウンドに出た三塁手が、両手を広げて自分が捕ることを周りに伝える。

そして落ちてきたボールを、ガッチリとグローブで掴んだ。

「アウト！」

審判の声を聞きながら、信昭はベンチへと引き下がる。

1 塁ベース上で、昇平が悔しがっているのが分かった。大きな叫び声が聞こえたからだ。

「ナイスピッチ！」

「緒方さんのおかげです」

三塁手とグローブでタッチを交わす。いくら昇平といえど、先ほどのボールを打たれる気はしなかった。その自信は、緒方博から貰った見えない力のおかげだろうと、信昭は思っていた。

三塁側フェンスに設置されたスコアボードの6 回裏に「0」が掲げられる。残り3 イニングだ。もう、1 点すらやるつもりはなかった。

「ストライク、バッターアウト！」

外角低めギリギリに決まるストレートで、7 回裏で3 つ目のアウトを奪った。中はキャッチャーミットからボールを取り出すと、マウンドに来た遊撃手の大輔に投げ渡す。そして自分たちの1 塁側ベンチへと戻った。

これで駿は、4 回に1 点を失って以降、3 イニング連続で三者凡退としている。元々調子の良かった彼だ。これくらい貧打の打線が相手なら、朝飯前なのだろうか。

しかしそれでも、1 点ビハインドであることには変わりない。綾波北に残された攻撃イニングは、3 回だ。

中盤から続けている、チャンス以外での待球作戦のおかげで、信昭の体力は落ちてきているはずだ。それでも彼は、ピンチでも気迫で抑えている。正直厄介だった。

「井口、頼むぞ」

「ああ。必ず塁に出てやるよ」

この回の先頭打者である4 番の裕に声をかける。パワーが売りの

彼だが、今自分がしなければいけない仕事は理解しているようだ。その証拠に、彼は中に向かって”塁に出る”という言葉を使ったのだ。

頼むぞ。必ず、塁に出てくれ……

ネクストバッタースサークルから、中は祈るようにグラウンドを見つめる。

その祈りが、天に届いたのだろうか。初球だった。すっぱぬけたのか、信昭が投じたボールが裕の腰に当たった。デッドボールとなり、少し痛がりながらも彼は1塁へと向かう。

「中！」

打席に向かおうとする中の背中に、声がかけられる。彼が振り返ると、そこにはタオルを首にかけた駿がいた。

彼の言いたいことは、聞かなくても分かる。中は1度頷くとすぐに向き直って、再び打席に向かって歩き始めた。

打席の手前で、西村監督からのサインを確認する。大方予想はついていたが、送りバントだった。

中は了解の旨を伝えるべくヘルメットの鍔を1度摘まむと、打席の中に入った。

流れを寄せるために、1球で決めないと……

軽くバントの構えをしながら、中は内野手の位置を確認する。バスターを警戒しているのか、三塁手は極端な前進守備をしていないが、それでも定位置よりはかなり前に来ている。

転がすなら一塁側か。バントは苦手ではないが、やはり少し緊張する。しかし、力投している駿のことを考えると、ここで失敗するわけにはいかない。

少し間があった後、セットポジションから信昭が初球を投じる。しかしそれは外角に外れる。中はバットを引いた。

ボールから入ってきたか。バントエンドランを警戒してるんやろうな

相手バッテリーの苦悩を思い、思わず苦笑いする。自身もキャッ

チャーであるための職業病だろうか。

再びサインを確認する。西村の手は、先ほどとは違う箇所を触っていく。注意深く、中はサインを確認した。

まったく。思いきったことをやってくれるな

表情を変えないように、中は心の中で呟く。しかし覚悟を決め、再びバントの構えをした。

先ほどと同じように十分な間をとって、信昭が2球目を投じるために足を上げる。その瞬間、1塁ランナーの裕がスタートを切った。「逃げた！」

相手の野手が叫ぶ。バントエンドランを警戒していたため、ランナーの動きには気を配っていたのだろう。三塁手も声を発しながら、中に向かってダッシュしてきた。

そのとき、中はバントの構えを引いた。三塁手のダッシュが緩むしかしそれでも、中との距離はかなり近い。バスターは、あまり考えていなかったのだろう。中も、サインが出たときは少し驚いたのだ。

外角のストレート。バントをさせるためのボールだろう。三塁手のダッシュに期待したに違いない。

容赦はしない。すぐに”トップ”を作り、バットを上から振り下ろす。芯で捉えた打球が、三塁手に向かってライナーで飛んだ。

打った瞬間、中は抜けたと確信した。

全てがスローモーションに感じる。驚いた表情の三塁手が慌ててグローブを顔の前に持つてくるのを見ながら、中はバットを手から離して1塁へ駆け出した。

打球は三塁手のグローブを掠めて、レフト線へ飛ぶ。

そのはずだった。

「アウト！」

審判のコール。駆け出していた中も、数歩でその足を止めた。

グラウンドに響いた、乾いた音。打球は、三塁手のグローブに収まっていた。

スタートを切っていた1塁ランナーはベースに戻れるはずもなく、三塁手からの送球を受けた一塁手が、ゆっくりとベースを踏む。その一連の流れを、中はただ呆然と眺めていた。

ゲッツー……やと？

信じられなかった。確実にチャンスが広がると思った直後に、二死無走者となったのだ。何が起こったのかわからない。

沸き上がる藤草ナインを見ながら、中はベンチに戻った。綾波北のナインは対称的に、一気に重苦しい雰囲気にもまれていた。

「亮！ まだ2アウトやぞ。お前からもう1回チャンス作れ！」

ベンチで2年生の岸本俊輔が叫ぶ。そうだ、まだこの回が終わったわけではない。

キャッチャー道具を身体に装着しながら、中はグラウンドを見つめる。しかし、亮は追い込まれた後にカーブを引っかけてサードゴロに終わった。

「松永、気にするな」

「……はい」

西村の言葉に、中は絞り出すようにして答えた。気にしないわけがない。これで彼がチャンスで凡退したのは、2度目なのだ。

いよいよ、ヤバくなってきたな……

守備位置に向かいながら、中は唇を噛み締めた。

11-5・王者への挑戦権(5)

8回表の先頭打者である信昭が見逃し三振に倒れ、右打席に9番打者が入った。その背番号「5」を見ながら、双葉高校の進はペットボトルのお茶を一口飲んだ。

試合も終盤を迎えた。4番の一振りで好投手から何とか1点を奪った藤草を、チャンスを何度か作りながらも決定打が出ない綾波北が追う展開となっいるが、中盤以降は綾波北のペースになってきている。残り2イニングで、点が入っても不思議ではない。

「それを防ぐためには……」

進は、中盤以降の”キーマン”になっている背番号「5」次第で、試合の流れが変わると思っていた。5回以降、3イニング連続で三者凡退に終わっている藤草だが、この回も先頭打者の信昭は三振だった。

駿の踏ん張りで、流れを藤草に渡していない綾波北だが、藤草も信昭の粘りのおかげで、流れを綾波北に渡さない。打席に向かうのは6回にエラーしてしまった選手だが、その後にはファインプレーを二つしている。綾波北側からすれば、彼の勢いを止めることが必要なのだ。

テンポの良いピッチングを続ける駿は、彼を2球で追い込む。そして3球目を外角低めに投げた。

金属音が響く。食らいつくようにして叩きつけられた打球は、マウンドとホームベースの間で強く弾んだ。投げ終えたばかりの駿が慌ててジャンプするが、打球はそのグローブを掠めて二遊間へ向かった。

これはおもしろいぞ……

二塁手が打球に飛び込む。その差し出されたグローブに打球は吸い込まれた。

間に合うか……？

一塁手がすぐに立ち上がり、ファーストにワンバウンドで送球する。距離は近いが、態勢が良くないため、その方が早く到達するのだ。

目一杯身体を伸ばした一塁手が上手く捕球する。それとほぼ同時に、バッターランナーが1塁ベースにヘッドスライディングした。

アウトか。セーフか

塁審の腕が、横に広がった。

藤草ベンチが、沸く。それもそうだろう。かなり久しぶりにランナーが出たのだ。しかもクリーンヒットなどではなく、必死のヘッドスライディングまでしての内野安打だ。盛り上がらないわけがない。駿はつい、ため息をついてしまった。

「タイム！」

主審が両手を広げる。彼が気づくと、中がマスクを外してマウンドに向かってきていた。バッテリー間のタイムは、試合中に何度でも行える。

「気にすんなよ、駿。良いボール来てるから」

「ああ。ランナー逃げたら、刺してくれよ」

「それは任せろ。ただ、久しぶりのセットポジションや。感覚が狂うかもしれない。けど、気にするな。ワンバウンドしても俺が止めるから」

「信用してんぞ」

駿は中の胸を軽く小突く。彼は笑うと、再び自分の守備位置へと戻っていった。

左打席に1番打者が入る。一死1塁であるため、十分バントも考えられる場面だ。バントをするならすれればいい。二死2塁となつても、抑えられる。

セットポジションに入り、中のサインを見る。定石通りの外角ストリートに、駿は頷いた。

間合いを長くとってから、彼は足を上げる。クイックモーションで、初球を投じた。

痛っ……！

左足を前に踏み出したとき右足のふくらはぎに激痛が走った。 ”吊った”のだ。

腕が振れない。力の無いボールが、ホームベースに向かう。中が構える外角ではなく、内角よりの真ん中だ。

打者が振り抜いたバットがボールを捉える。甲高い金属音とともに、打球が右中間へ飛んでいった。

1塁ランナーが2塁ベースを蹴る。打球は、右中間を転々と転がっていた。

「4つ！ いや……3つや！」

中がマスクを外して指示を出す。3塁ベースへ送球しろという指示だが、それはつまり1塁ランナーの生還阻止を諦めるということだ。

足を引きずりながら、駿は3塁ベースのカバーに向かう。ほぼ同時に、1塁ランナーが3塁ベースを蹴った。やっと昇平が打球に追いついたときだった。

ホームベースを踏む背番号「5」を見ながら、駿は唇を噛み締める。バッターランナーも一気に3塁ベースを陥れる。ボールはまだ、中継の二塁手である勝弥に渡ったばかりだ。

完璧にやられたな……

天を仰ぐ。久しぶりのセットポジションでフォームが乱れたのか、今まで投球中に足が吊ることはなかった。

駿はマウンドに小走りで戻ると、マウンドまで来ていた勝弥からボールを受け取った。

「大丈夫か？ 吊ってなかったか？」

「ああ、すまん。もう大丈夫や」

「そうか。無理すんなどは言えんけど、頼むぞ。まだまだ良いボールいってるから」

「おう、木原も頼むぞ」

勝弥は駿の尻をポンポンと叩き、守備位置へと戻っていきこうとする。しかし、再びタイムをとった中がマウンドに寄ってきた。両手のジエスチャーで、内野手全員をマウンドに呼んだ。

「駿、いけるか？」

「ああ。すまん、中」

「いや、気にすんな。それより次や」

「俺らは前でいいな？」

駆け足でマウンドに来た大輔が言う。中は頷いた。

「もちろん、これ以上点はやれへんからな。極端に守ろう。みんな、切り替えるぞ」

「オツケー」

「分かりました」

三塁手の和也と一塁手の亮が答える。彼らも駿に励ましの言葉を述べた。そして、野手陣が自分の守備位置へと戻っていった。

自分の失投を責めるわけでもなく、もう切り替えてくれている。

そんな野手に、自分が答えられないわけにはいかない。

駿はユニフォームの袖で汗を拭くと、右手でボールを握る。右打席に、2番打者が入った。

「1アウト！」

駿は野手に向かって叫び、中のサインを確認する。外角ストレートの要求に頷くと、セットポジションに入った。

3塁ランナーをじっと見つめ、足を上げる。ランナーに動きは無い。駿はそのまま、中が構えるミットに向かって投げ込んだ。

「ボール！」

ストライクを狙ったが、ボールは僅かに外れた。元々コントロールが良い方ではないが、終盤にきて、さらに細かいコントロールが利かなくなった。

中からの返球を受け取り、駿はグローブを外した両手でボールを揉む。しっかりと両手に馴染ませて、彼は再びグローブを左手には

めた。

馴染ませた甲斐があつたのか、2球目は外角低めにストレートが決まった。カウントは、1ボール1ストライクとなる。

スクイズは、くるか……？

チラツと相手ベンチを見る。監督からのサインは長い。何かあるのかもしれない。もちろん、何もないかもしれない。

綾北は、スクイズをせずに強攻策に出たが、裏目に出た。もっともあれは、まだ”流れ”が藤草にあつたために、野手の好捕によって阻まれただけなのだ。

3球目のサインを確認して、駿はセットポジションに入る。内角のストレート。甘い球を投げるわけにはいかないが、ぶつけるわけにもいかない。ランナーをためてクリーンアップを迎えるのは、”もしも”があるため怖い。4番打者には、本塁打を打たれているのだ。

駿は左足を上げる。そのとき、ランナーがピクリと動いた。

何かあるのか？

顔を本塁に向ける。もちろん、目ではランナーに注意を払ったまままだ。

ランナーが本塁へスタートを切る。駿には、その動きがスローモーションのように感じられ、思わず口元を緩めた。

「アタル！」

腕を振る。打者がバントの構えを見せたと同時に、駿は叫んだ。

打者がバントの構えをした。それに気付いた中は思わず、あつと声を洩らした。

「アタル！」

そのとき、中は駿の叫び声を聞いた。その直後、白球が彼に向かってくる。

……何！？

低い。いや、低すぎる。ほぼ間違いなく、ミットに届く前にワンバウンドするだろう。

今、後ろに逸らすわけにはいかない。膝をつき、中はプロテクターでボールを止めようとすする。

しかし、そこで気がついた。彼が身体を張ってボールを止めなければいけないということは、バットにもボールは当たらないということだ。

打者が慌ててバットを下げるが、それを嘲笑うかのように、ボールはワンバウンドした後で中のプロテクターに当たった。

「前や！」

再び駿の声が聞こえる。中は視線を前に向けた。すぐそこに、ボールがあった。

慌てて立ち上がり、素手でボールを掴む。3塁ランナーが、一か八かで本塁に突っ込んできているのが分かった。

身体を捻り、右手に掴んだボールで、ランナーへタッチしに行く。必死に避けようと、中から遠ざかるようにスライディングしたランナーだが、ホームベースの手前で、ボールがランナーに触れる。

「アウト！」

中にタッチされてからホームベースに触れた左手を握りしめ、ランナーが悔しそうに呻く。

それを見ながら、中はゆっくりと立ち上がった。3点目は阻止した。間一髪だが、確かに阻止したのだ。

冷静になろうと、深呼吸する。だが深呼吸をしたところで、興奮は収まらなかった。

「ナイスプレー」

「……無茶なことしやがって」

「中を信用しただけや」

本塁まで来た駿にボールを渡しながら、中はため息をつく。上手いかったからいいものを、本当に無茶苦茶だ。だがそれが、駿の良さでもあった。

再びマウンドに戻った駿を見ながら、中は笑みを浮かべる。成長した。俺たちは確かに成長していると、彼は強く思った。

守備位置に戻って座り、中にサインを出す。カウントは2ストライク1ボール。外角のストレートで決める。中はサインを出した。駿が頷き、振りかぶって投じられた白球が、中のミットに向かってくる。

だがそれに届く前に、振り抜かれたバットが白球を捉えた。ピッチャーにライナーが飛ぶ。
「シュン！」

今度は中が叫ぶ番だった。

中の声が聞こえたときにはもう既に、駿の身体は反応していた。

打球が低いライナーで、こちらに向かってくる。投げ終わった後で、左足だけで立っていた彼は、右足を地面に着くと同時に、グローブを必死に下げた。

「っ！……！」

左足の脛に走る激痛。打球がグローブの下をすり抜け、彼の脛に直撃したのだ。

打球は目の前に転がっている。しかし左足に全く力が入らないため、駿は這いつくばるようにしてボールに近づいた。

「駿！」

中が呼ぶ。このランナーを出すわけにはいかない。駿は、痛みに耐えながらボールを拾った。そして、それを中へと投げる。

ボールを受け取った中がファーストへ送球し、間髪でアウトとなった。

「駿、大丈夫か！」

中がすぐさま駆け寄ってくる。他の野手陣も、皆が駿の周りに集まってきた。

「立てますか」

「立てるけど……歩けん」

心配そうに聞いてきた亮に、駿は苦笑いしながら答える。だが心の中では、全く笑えなかった。

ちくしょう……まだ、試合は終わってねえってのに……

比較的大柄である亮の肩を借りて、ベンチへと下がる。ベンチのメンバーも、皆が心配そうに自分を見つめていた。

「寺島、いけるか」

「……………」

西村の問いに、駿は答えられない。数秒の間があった後、西村が再び口を開いた。

「チームにとつて最善となる答えを言え……プレーできるか」

「……………無理です」

絞り出すようにして、駿は答える。それを聞いて西村は頷く。もう無理だと分かっている、その言葉が出るのを待っていたのだろう。

駿は唇を噛み締めた。

「吉田！ 代打や」

「はい！」

西村に呼ばれ、宗が返事をする。先週の試合でも安打を放った彼だ。1年生とはいえ、西村からの信頼はかなりあるのだろう。

「吉田、頼むぞ」

駿はベンチに座りながら宗に声をかける。聞こえなかったのか、彼は反応しなかった。だが、駿はそれでいいと思った。

集中してることか。頼むぞ……！

打席に向かう1年生に、エースである駿は全てを託した。

嫌な流れだと、信昭は思った。待望の2点目が入ったところまでは良かった。だがそこからは、スクイズを失敗し、痛烈なライナーが相手投手の執念もありアウトになってしまった。流れとしては最悪だ。そして野球では、その流れが試合において非常に重要なものとなっている。

「バッター代打！」

ベンチから教えられ、信昭は打席の横で素振りをする選手を見た。たしか先頭打者は投手だったはずだ。やはり、あのライナーが原因なのだろう。相当痛そうにしていた。

この回は、大事やぞ……

まだ8回裏だ。藤草には、9回表の攻撃が残っている。

その攻撃時に相手のマウンドに立っているのは、あの投手ではないということだ。藤草の攻撃陣は非力であるが、2番手以降の投手からならば追加点を奪うこともできるかもしれない。

そのために大事なのは、信昭がこの回をしつかり抑えることなのだ。

投球練習を終え、右打席に代打の選手を迎える。背番号は12だ。春季大会は全試合で背番号が変わるとはいえ、おそらく過去2試合にも代打で出場した選手だろう。共に、良い当たりの打球を打っていた。

代打の1打で、流れが一気に変わることもある。信昭は一つ、大きく息を吐いた。

「8回、しまつていこう！」

捕手が叫ぶ。それに対して野手が全員で応えると、グラウンド全体が異様な雰囲気包まれる。

信昭はぶるつと震えた。寒いわけではない。むしろ、暑くて暑くてたまらないのだ。彼は思わず笑う。武者震いするのは、この試合

で何度目だろうか。

投球練習が終わった後、一度素振りをして、宗は打席に入った。足場を慣らし、マウンド上の信昭を見つめる。ここまで無失点でしのできたからによる余裕か、はたまた新しい打者との対峙による高揚か、その表情は既に7回を投げ終えた1年生投手とは思えないほど、落ち着いた笑みを浮かべていた。

変化球は、たしかカットとスライダーとフォー……

信昭が振りかぶる。宗は慌てて、バットを構えた手に力を込めた。ま、まだ準備がっ……

信昭が腕を振り、ボールが向かってくる。だがそれは、高めに大きく外れた。

「ボール！」

主審のコールに、宗はホツとする。仮にど真ん中でも、さっきの状態では打てる気がしなかった。

何をやってんねん。これじゃあ、島福南戦と同じじゃんけ……

今度は早めにバットを構え、信昭の投球を待つ。

そのとき、宗の左足が震え始めた。必死に抑えようとするが、それは全くおさまらない。むしろ、どんどん震えは酷くなっていくように感じた。

「くっ……」

甘いコースに来た2球目に手が出ない。審判の腕が上がる。

「すみません、タイムお願いします」

宗はタイムをとり、打席を外す。

初めて迎えた、ピハインドでの打席。それも、負傷降板したエースへの代打だ。責任は大きい。経験したことのないような緊張感が、彼を襲っていた。

タイムをとった理由をつけるために、宗はしゃがみこんでスパイクの紐を結び直す。自然にほどけたときは何故か良い打撃ができる

ので、縁起を担いでわざと緩めに結んでおこうかとも考えたが、やめておいた。

この期に及んで、ジंकウス頼りか……

自分の不甲斐なさに、思わず苦笑いした。

「ナイスボール！」

ボールを手で揉んでいた捕手が、声をかけながら投手にボールを投げ返す。フワリとしたボールが、信昭のグローブに向かう。宗は、その様子をぼんやりと見つめていた。

「あつ……」

思わず声を漏らす。ボールが、信昭が構えたグローブの淵に当たり、地面に落ちたのだ。

「おい、大丈夫か！」

「すみません、大丈夫です！」

帽子をとって捕手に謝りながら、信昭はボールを拾う。

川勝も緊張してんのか……？

様子を見る限り、彼が緊張しているとは思えない。だが、何でもない送球をポロつと捕り損ねるということは、実はかなり緊張しているということもありえるだろう。むしろそれなら、緊張を全て自分の中に押さえ込んでいる信昭の負担は、大きいはずだ。

つけ入るチャンスは、ある！

宗はバットを構える。忘れかけていたが、彼も自分と同じ1年生なのだ。勝利がちらつくこの終盤に、緊張しないはずがない。

信昭が3球目を投じる。外角のスライダー。宗はバットを止めた。

「ボール！」

初めての変化球。しかし引っ掛かったのか、すぐにそれと分かるボール球だった。

4球目もスライダー。今度は低めの良いコースに投げ込まれる。

宗はバットを振り抜く。両手に衝撃。だが打球は真後ろに飛んでバツクネットに当たった。

当たる……

5球目のストレートに対しても、宗はバットを出す。空振りしたら終わりだが、再び打球はバックネットに当たった。

当たるぞ……

6球目。信昭が投じたのは低めのボール。宗はバットを振ろうとするが、寸前のところで止めた。白球はベースの手前でワンバウンドした。

「ボール！」

フォーケも、見える……！！

フルカウントとなり、有利不利が逆転する。宗も追い込まれてはいるが、気持ちの面では余裕がある。逆に信昭は、粘られているため余裕はあまりないだろう。

「来い……！！」

フルカウントからのラストボール。ファウルを打つ気はない。確実に次で捉える。

それは外角低めに投じられたる。フォアボールを嫌がったのか、ボールは変化しない。宗はバットを振り抜いた。直後に、両手を衝撃が襲う。

重いつ……

フォアボールを避けたのではなかった。おそらく信昭は最高の真っ直ぐで打ち取りにきたのだと、宗は感じた。

負けるかよっ！

一瞬の出来事。ボールが重いと感じた瞬間に、宗は両手に込めた力をさらに強めた。ボールが前に飛ぶ。バットを手から離し、宗は駆け出した。

フラフラつと上がった打球を、神山遥斗はじつと見つめていた。右翼手が前にダッシュしてくる。二塁手と一塁手も打球を追って後ろに走る。

落ちろ！

遥斗は心の中で強く念じる。

打球はゆつくりと落ちてきて、そして、地面に当たって弾んだ。

「よっしゃあ！」

「吉田、よくやった！」

ベンチ内・外も関係なく、お祭り騒ぎのように沸く。ライト前ポテンヒット。詳しいことは分からないが、宗が素晴らしい仕事をやってのけたことは分かった。

次打者がタイムをとり、宗に代走が送られる。1塁ランナーコーチの丸田純平と入れ替わった宗に、盛大な拍手が送られた。

「やったな！ 遥斗」

「ああ！」

隣にいる優希が笑顔で話しかけてくる。遥斗も同じく笑顔で返した。

あの宗が、昔からの親友が、まるで自分とは別世界で活躍しているように感じる。寂しいような、それでもやはり嬉しかった。

「まだやぞ。浮かれんな。まだ同点のランナーも出てないんやぞ」

優希の横にいる克也が、グラウンドから目を逸らさずに言う。だがその彼も、宗の打球が落ちたときには喜びの咆哮をあげていたことを、遥斗は知っていた。

「分かってるわ。そんなこと」

克也の様子に気づいている遥斗は、強く返さない。そもそも今は、こんなところで揉めている場合ではないのだ。

次打者の勝弥が送りバントを一発で決め、打席に9番打者の大輔が入る。

まず1点。その思いからのバントだろう。エンドランも仕掛けず、手堅く送るところに、監督である西村の思いが見える。

しかし、その大輔もあつという間に追い込まれた。3球目を、信昭が投じる。その瞬間、遥斗は思わず、あつと声を出した。

「大輔、大丈夫か！」

「ああ、気にすんな。それより、頼むぞ！」

「……分かつてる」

投球が直撃した左肩を擦って1塁ベースへ向かう大輔を見ながら、1番打者の和也は打席に向かった。

一死2塁で、9番打者に追い込んでからのデッドボール。信昭に与えられた精神的ダメージは、はかりしれないほど大きいだろう。

これで続かなきゃ、男じゃねえよな……

サインを見る。滑らかな動きでサインを出していく西村だが、自身はない。自分に全て任せてくれたのだろう。

打席に入り、信昭を見る。どんなピンチでも表情をほとんど変えなかった彼だが、今は少し動揺しているようにも見える。

信昭は、セツトポジションに入ってから、しきりにランナーを気にした様子を見せた。

ふうん……

和也はチラリと三塁手を見る。代走である2塁ランナーの三盗を警戒してか、彼も定位置で2塁ランナーをチラチラ見ていた。

無警戒すぎるわ。お前

自分も同じ三塁手であるため、彼がどれほど無警戒かはよく分かる。バッターは1番打者だ。セーフティバントくらい頭に入れるべきだろう。

「よっ……っ」

初球、和也はヒッティングの構えからバントをする。打球が転がるのとはほぼ同時に、彼はもう1塁へスタートを切っていた。いわゆる、セーフティバントだ。

三塁手の前に強く転がした。下手をすれば、投手が捕って3塁に送球され、ランナーがフォースアウトになるかもしれない。だがその心配は、端からしていなかった。

ウチのバント技術は、強豪校並みや！

和也は1塁ベースを駆け抜ける。その少し後で、ボールが1塁手

に渡った。

満塁、か……

捕手がタイムをとり、信昭の周りに内野手が全員集まった。このタイミングで抜かりなくタイムをとるあたり、やはりキャプテンなのだなと実感する。

「川勝、球は走ってるぞ。気にすんな」
「はい」

先輩の慰めに、信昭は頷く。確かに、クリーンヒットは1本も打たれていない。だが、それが問題なのだ。

ポテンヒットにデッドボール。そして信昭の打球処理が遅れてセーフになってしまったバント。もっと、三塁手と話し合うべきだった。何回同じことをやられるのだ。

「とにかく、まだ1点も取られてないんや。慌てる必要なんかない。ランナー満塁、近いところでゲッツーな」

内野陣がそれぞれ頷いた。もちろん、信昭も頷く。

内野陣が周りから去り、自分の守備位置に向かう。ここから先、マウンドでは1人ぼっちだ。最後にマウンドから去ろうとした捕手に、信昭は声をかけた。

「杉田さん」

「ん、どうした？」

「コントロールはまだ大丈夫ですから、どんどん低めを要求してください。スライダーやカットを引っかけさせて、内野ゴロを打たせましょう」

「ああ。安心しろ、お前を信用しなかったことなんて1度も無い。どんなワンバウンドでも身体で止めてやるから、お前こそ俺を信用しろよ」

「分かりました」

信昭は表情を緩める。捕手でキャプテンの杉田晋平も軽く笑うと、

彼は守備位置へと戻っていった。

打席に入った2番打者には、先ほど痛烈なライナーを打たれている。クリーンアップでもない打者に、二度も打たれるわけにはいかない。

この打者で終わらせる！

昇平には回さない。なにがなんでも併殺をとらなければいけないのだ。三振なんて、いらぬ。

初球、内角低めにカットボールを投じる。怖さが全くないわけではなかった。この場面、死球でも1点が入る。だが、今はそんなことを気にしている暇はない。

バットが動き出す。初球から難しいコースに手を出すとは、打者も精神的に追い込まれているのだろうか。

おあつらえむきの展開に、信昭は勝ちを確信した。注文通りの内野ゴロでゲッツーだ。

そう思った瞬間、真芯で捉えられた打球が信昭の足元を襲った。慌てて下ろしたグローブに、衝撃が走る。気がつくと、信昭の左腕からグローブが外れていた。

「川勝！」

誰かの声が聞こえる。自分を心配してくれているのか。おそらくは、打球が近くにあることを教えてくれたのだろう。

後ろを見れば、グローブとボールが落ちていた。よほど打球の勢いが強かったのか、ボールはマウンドから5メートルほど離れたところまで飛ばされていた。

衝撃を受けた左手が少し痛む。だが、今はそんなことを気にするわけにはいかない。左足に打球が当たってもアウトにした投手を目にした直後に、走れる自分が何もしないというのはありえないことだ。

「ファーストや！」

今度のはつきりと、晋平の声だと認識できた。彼の指示により、本塁は見えない。間に合わないだろうということは、信昭も予想して

いた。1点もやらないと誓ったが、状況が状況だけに仕方がない。信昭は急いでボールを拾い、1塁ベースを見る。大丈夫だ。まだ間に合う。

身体を捻り、腕からボールを離す。信昭はその行方を見送った。送球が浮く。一塁手もそれに合わせて飛んだ。落ちてきた足がベースを踏むより先に、打者がそれを駆け抜けた。

「セーフ！」

審判の腕が広がる。その様子を、信昭はただ呆然と眺めていた。しっかりと送球していればアウトだった。1点を失う代わりに、確実に打者をアウトにしなければならなかった。1死満塁と2死二三塁では、大違いだ。

「川勝、大丈夫か」

「あ、はい。大丈夫です……」

タイムをとったのだろう。晋平がマウンドまで来て信昭に声をかけた。申し訳なさから、彼は俯く。

「気にすんなよ。まだ1点リードや。センターに抜けそうな当たりを、よく止めたな。次は小沢やけど、お前なら抑えられる」

信昭の肩をポンポンと叩き、晋平は守備位置へと戻る。

そして打席に、クリーンアップの一番手、綾波北高校No.1打者、昇平を迎えた。

頑張れ、信昭……

マウンドに立つ同級生の後ろ姿を眺めながら、小淵昌也は唇を噛んだ。乾いた唇が、わずかに湿る。

状況・流れ、共に最悪だ。まだ1点をリードしているとはいえ、余裕なんてこれっぽっちもない。先ほどの回にした、自分のスクイズ失敗が響いているのだろうか。だとすれば、悔やんでも悔やみきれないミスだった。

「1アウト！」

信昭に聞こえるように、声を張る。投手が投げるまでに自分ができることといえば、これくらいだ。

右打席に昇平が入る。ミーティングでも、彼には厳重注意するように言われていた。

しかし昌也は守備位置を変えて、少し前に出た。

2点目をやるわけにはいかない。こんな言い方をするのはよくないが、2点も3点も変わらない。逆転されたら、再逆転するのは厳しいと言わざるをえないだろう。長打を打たれば、その時点で終わりなのだ。

それに、彼は肩に自身があまりなかった。1年生ながら中堅手を守らせてくれるのは、彼の俊足によるものが大きい。例え頭を越される飛球を打たれても、捕る自信はあった。その際、同点になるのは致し方ない。

軽く屈伸をし、いつでも動けるようにする。

信昭がセットポジションから初球を投じる。何故か、自分のところに飛んでくる気がした。

右か、左か、後ろか……前か！

打球はまたしても信昭の足元を襲う。だが今度は、それを抜けて二遊間を破った。昌也は急いで前にダッシュし、打球との距離を詰める。

3塁ランナーがホームインした。2塁ランナーも3塁ベースを回る。セーフティバントを決めた、1番打者である彼だ。足の速さには自信があるのだろうか。

「負けるか！」

打球をグローブで掴み、そのままの勢いでホームに送球する。同点にされたが、逆転を許すわけにはいかない。昌也は、思いを込めたボールを見送った。

再び初球を捉えられ、足元を打球が襲う。信昭は反射的にグロー

ブを出したが、先ほどよりも打球の勢いが強かったためか、打球はその先をすり抜けた。前進守備だった二遊間も、あっという間に破られる。

小淵、頼む……

本塁のベースカバーに入りながら、信昭は心の中で祈った。

逆転を防ぐため、最後に残された防衛ライン。昌也は良いチャージから打球を掴むと、バックホームした。

「ノー！」

晋平が叫ぶ。その声で、彼と昌也の間に入っていた野手が送球をスルーした。昌也のボールが、良かったのだ。

ワンバウンドで返ってきたボールを晋平が掴む。2塁ランナーが回り込んでベースに触れようとするが、彼はそれを防いでランナーにタッチした。

「アウト！」

主審がややオーバー気味のアクションでジャッジした。アウトになったランナーが悔しそうに地面を叩く。だが、まだ2死だ。信昭は思いっきり叫んだ。

「杉田さん、3つです！」

その声に反応した晋平が慌てて3塁ベースを見る。だが、そのとき既に1塁ランナーは3塁に到達しようとしていた。バッターランナーである昇平も同様に、2塁ベースに到達する。

二死2・3塁。逆転は防いだとはいえ、大ピンチであることに変わりはない。

「すまん。ホームインを防ぐことに集中しすぎた」

「いえ、ナイスブロックです。こっちこそ、打たれてしまったすみません」

額の汗を拭いながら信昭は言う。球威は落ちていないはずだ。それでも、捉えられ始めている。

もう一度冷静になる。二死2・3塁で4番打者。8回裏で同点。信昭の頭に、一つの考えが浮かんでいた。

「気にすんな。それより次や。4番のあいつにはヒットを打たれてる。5番のキャプテンはノーヒットやけど、良い当たりがある。どつちと勝負するんや」

「杉田さんは、どうしたいですか」

「アホ。投げんのはお前や。お前が決める。敬遠が嫌なら、4番と勝負してもいい」

少しの沈黙。あまり長い間話をするわけにはいかない。信昭は、表情を緩めて答えた。

「歩かせましょう」

「いいんか？」

「はい。勝つためなら、そんな拘りはいらないうです」

晋平が頷く。信昭も自分自身を納得させるために、頷いた。

裕が4つ目のボール球を見送り、1塁ベースへ走る。それを見ながら、ネクストバッターズサークルで腰を下ろしていた中はゆっくりと立ち上がった。

自分の前を打つ打者が敬遠されたわけだが、屈辱感はあまりなかった。この場面なら自分でもバッターを歩かせただろうし、この経験は中学時代に何度もしてきた。

「中！」

ベンチから高い声が聞こえた。中が振り返ると、彼を呼んだのは花梨だということが分かった。

彼女は胸に手を当てると、大きく息を吸って、大きく吐いた。あまり豊かではない胸が、上下する。

リラックスしろ、ということなのだろう。中は、思わず吹き出した。

「大丈夫や。緊張はしてない。見てろ、決めてくるから」

笑顔を浮かべながら言うと、彼は打席に向かう。緊張感が全くないわけではなかったが、花梨のおかげで、そのわずかな緊張感もな

くなった気がした。

自分でも、何故ここまで落ち着いていられるのか分からない。ここまでノーヒット。完全にブレーキとなってしまうているが、それすらも気にならない。

さあ、1年生。いよいよ追い込まれたぞ
マウンドの小さな巨人を見つめる。

駿に代打した1年生の宗が執念でヒットを打ち、勝弥が初球を送りバント。大輔は追い込まれながらも身体を張って塁に出た。そして和也が絶妙なセーフティバントを決め、勢いを止めまいと智勝・昇平が初球をピッチャー返し。4番の裕が敬遠で二死満塁。舞台は整った。あとは自分が打つだけだ。

信昭は顔がひきつっているようにも見えない。中はバットを握る手に力を入れた。

さあ、こい……
セットポジションから、信昭が初球を投じた。

打者の頭部付近にボールが向かう。初球を投じた信昭は、思わず顔を歪めた。打者が仰け反る。キャッチャーミットにボールが収まったのを確認し、信昭は安堵して息をついた。

ランナーは満塁。もちろん、死球でも1点が入ってしまう。押し出し四死球で勝ち越し点を与えるなんて状況は、やはり避けたい。

しかし、何故か制球が定まらない。その後、2球連続でボールとなり、カウントは3 0 スリーボールナッシングとなった。

「川勝、楽に投げる。深呼吸して」
「打たせたらいいぞ！ 変に色々考えんな！」

三塁手の博を始め、内野手が声をかけてくれる。彼らのためにも、四球を与えるわけにはいかない。

この緊張感を楽しめ、信昭
自らを鼓舞すると、彼は再びセットポジションに入る。次に投じ

たボールは、ほぼ真ん中に向かった。打者が見送る。審判の腕が上がった。

これで楽になったと、信昭は少し笑みを浮かべた。指先に、思うように力が入らない。足腰はフラフラする。そんな状況でも、ストライクはとれるのだ。

だが、まだこちらが不利であることには変わりない。1点勝負の満塁で3ボールだったため、甘いボールを見逃してくれたが、次はそももいかないだろう。

際どいコースを狙う制球力はないかもしれない。だが、それでも投げなければいけない場面というのがある。それが今だ。それがエースの役目なのだ。

信昭が投じたボールは、外角低めに向かう。打者のバットがピクリと動いたが、そのまま止まった。ボールが、キャッチャーミットに収まる。

ど、どつちや……

少しの間。だが、それが信昭にはかなり長い時間に感じられた。

グラウンド上の全員が見守る中、審判は勢いよく腕を上げて、ストライクをコールした。信昭は軽くガッツポーズを作り、打者は悔しそうに顔を歪ませた。

追い込んだ……

このピンチを凌げば、試合の流れは再び藤草高校にくるかもしれない。エースが降板した今、藤草が勝ち越し点を取る可能性は低くないだろう。

一度味方全員を見渡す。頼もしい先輩達と、逆転を防いでくれた同級生。こんなにも頼りになる仲間が、自分にはたくさんいるのだと、改めて思い出した。

グラウンドを見渡す。入学した頃には満開に咲き誇っていた桜も、そのほとんどが散りかけている。

まだ入学して1ヶ月弱。まだ慣れ親しんだグラウンドとはいえないが、いつかはそう呼ぶ日がくるのだろう。そのとき、この試合は

必ず思い出すのではないかと思う。

再び前を向き、打者を見据える。その奥に、もう一人頼りになる仲間がいた。

ラストボール。杉田さんには、届かないかもしれません

打たせてアウトをとる。そう決めていた。渾身の力で、詰まらせる。

しっかりと構えててくださいよ！

セットポジションから足を上げ、ボールを握る指に力を込める。

やはり、試合序盤の感覚はない。それでも、投げられないことはない。

晋平のミット目がけて、ボールが走る。インコース寄りの真ん中。打者がバットを振り抜いた。

金属音。信昭は振り返って空を見上げた。白いボールが、青い空に映えていた。

12-1・ゴールデン・ルーキー(1)

「あつけないもんやな、最後は。満塁ホームランで試合が決まったか」

「この川勝って投手も良いピッチングしてたんやけどな。最後はバテたかな」

双葉高校野球部の選手らは、綾波北高校と藤草高校の試合を、偵察に行ってくれた2年生が撮ったビデオで観ていた。

自分の周りで色々と話しているのを聞きながら、副主将の岡下透は黙って目を瞑り、腕を組む。ビデオが最後まで終わったため、今は偵察に行った山崎進による説明が始まっていた。

松永、ついに来たか……

高校に入学して2年が経ち、早くも3年生となった。その間に多くの試合をこなしてきたが、練習試合はもちろん、公式戦でも双葉と綾波北が試合をすることはなかった。

だがついに、待ちに待ったときがきた。舞台は太陽が丘球場だ。京都府南部では、西京極のわかさスタジアムに次ぐ規模を誇る球場である。初めての試合にしては、なかなか良い環境だ。

「透、キャッチャーとして何か聞きたいことはあるか」

皆の前に立ち、ホワイトボードに色々メモをとっていた主将の新名琢磨が言う。その顔は、少しニヤけていた。彼も透とすなわち松永中、海田和也と 同じチームで、中学時代を野球をしていたのだ。綾波北と対戦するのは、やはり楽しみなのだろう。

「捕手としてではないが、一つ尋ねたい。寺島についてだが……」
目を開き、透は口を開く。その瞬間、多くの視線が進に向かうのが分かった。皆、負傷したエースのことが気になっていたのかもしれない。

「最後の整列には、並んでいたか」

「いえ。相当痛そうにしてみましたし、ベンチの前で立っていました。

事情が事情だけに、仕方ないと思われず」

進がよどみなく答える。細かいところまで抜かりなく見ているのはさすがだと思った。

残念だ……

綾波北が誇る本格派右腕との対決も期待していただけに、やはりそれは心配だった。

「タルに聞くか」

「言っわけないだろ」

琢磨の呟きにツツコミを入れ、透は再び目を閉じる。琢磨が中のことを、渾名で呼んでいたのを思い出した。

残念だ。今度は小さく、声に出して呟いた。

古文の説明をBGMにしながら、松永中は窓から校庭を眺めていた。教室は2階だが、障害物が何もないため、校門まで見渡すことができる。

「昨日のヒーローが、何を黄昏てんだよ」

「……そんなんじゃないよ」

隣の席である、軟式野球部主将の西垣竜二に小声で言われ、中は校庭を見たまま答えた。

昨日の藤草戦は、しんどい試合だった。最終的に、8回裏に6点を奪って逆転したものの、6、2というスコア以上に緊迫した試合で、正直、中は負けも覚悟したくらいだ。

最後のホームランも、甘いストレートを振り抜いただけだ。勝因を挙げるとすれば、川勝信昭のスタミナ切れだろう。彼自身ですら気づいてなかったのかもしれないが、8回の投球は制球も球威も、かなり落ちていた。

それでも、勝ちも勝ちや

中盤以降、綾波北の選手らは信昭にできるだけ多くの球を投げさせようと、粘りのバッティングを続けた。それが、最後に実を結ん

だのだ。

「じゃあ、何でそんなに可哀想な顔してるんや」

「かなしそう」やる。 ” かわいそう ” って、お前の顔で言われたくねえよ」

「それはどういう意味だい、中くん」

「聞きたいんか？ 竜二って、実はMなんやな」

「いや、やっぱいいいや。……って、そんなことはどうでもいい。

何でそんなに悲しそうな顔してるんや」

「……………」

中は黙って、前の方で誰も座っていない席を指差す。それを見て、竜二は理解したようだ。なるほどと呟いて、頷いた。

中が指差した席は、寺島駿のものだ。彼は今、病院に行っていた。駿はなかなか現れない。もしかしたらこの授業を受けている間は来ないのではないかと、中は心配した。

診察が長引くということは、その分彼が重傷である可能性が高くなるということだ。だが、今日は休み明けの月曜日であるため、患者が多くて混んでいることも考えられる。

それよりも、この2限目までに来てほしいという思いがあった。中のクラスは3限と4限が移動教室であるため、クラスが違う駿の様子を知ることができない。心配したまま午前の授業を乗り越える自信はなかった。

しかし、授業も終わりかけた頃、正門に人影が現れた。

駿や！

窓に顔を近づけ、中は駿の様子をじっくりと見る。

ギプスをはめている様子はない。松葉杖も使ってはいなかった。打球が当たった左足を多少引きずりながらとはいえ、彼は普通に歩いていた。大事には至っていないようだ。

「寺島、来たんか。どうや」

「大丈夫みたいや。今日は練習OFFやし、明後日くらいから投球練習を再開できれば、日曜の試合には間に合うやろ」

安堵し、中は目線を窓から黒板に移す。相変わらず、意味の分からない言葉が並んでいた。勉強が苦手なわけではないが、古典は別だった。

タク……透……

心の中で、かつてのチームメイトを思い浮かべる。彼らとの対戦は、目の前に迫っているのだ。

新名・海田・岡下・松永の上位打線。他チームからは恐れられたが、それが1番打者の琢磨と、3番打者の透によるものだということは、よく分かっていた。

中は4番打者であったが、透が敬遠されて打席に向かう場面も、幾度となくあったのだ。

でも、俺らも上手くなってるんやぞ……

強豪校である双葉で主力となっている天才へ、中は静かに語りかけた。

6限目終了を告げるチャイムが鳴り、神山遥斗はノートを閉じた。日直の号令で立ち上がり、目の前で先ほどまで数式を書き連ねていた教師に頭を下げる。これで、今日の授業は全て終了だ。

「遥斗、公園には直接行くんか」

「ああ。宗は一旦帰るんやったか」

「そうやな。一応、キャッチャー道具を取りに帰るわ」

「一応って何だよ。一応って」

笑いながら言う吉田宗を、遥斗は軽く睨んだ。今日は練習がオフなのだが、オフのときは必ず、近所の公園で投球練習をするようにしている。大会中ということもあり、普段の練習時は先輩たちの手伝いに時間を取られてしまう。ただでさえ実力がないのに、練習が出来ないのでは話にならないからだ。

宗は、暗に遥斗の投球が危険でない　スピードなどが無いと言っているのだ。凶星であるだけに、一段と腹が立つ。

そのとき教室のドアが開いて、担任である長嶺博之が入ってきた。宗は、ニヤニヤしながら席に戻る。

特に大した連絡もなく、ホームルームはすぐに終わった。長嶺のことは好きでも嫌いでもないが、ホームルームが比較的短いのはありがたいと思っていた。

「遥斗、今日もヨシムネと練習すんの？　するんやったら、見に行きたいねんけど」

ロッカーに教科書を仕舞っていた遥斗は、水原光の声に顔を上げた。見ると、彼女はもうカバンを持っていた。

遥斗は二つ返事で了承すると、急いで教科書を仕舞いきり、ロッカーに鍵をかけた。あまり彼女を待たせるわけにはいかない。

片付けを終えると遥斗は宗を呼び、帰路についた。普段、練習があるときは、光は他のマネージャーと一緒に帰っているため、何だかこのメンバーで帰るのがすごく久しぶりに感じた。

校門を出たところで、宗が口笛を吹いているのに遥斗は気がついた。かつてのアイドルグループ、光GENJIの『パラダイス銀河』だ。なかなか上手い。

「どうした、急に。ジャーニーズ好きだっけ」

「ん？　ああ、これか」宗は口笛を止めて答えた。「そういうわけやないけど、次の試合から応援が入るから、その曲や」

「応援？　今までもしてたやろ。俺たちは」

「あ、そうか。遥斗は知らんか」

宗はそう言っつて、まるで遥斗が初心者であることを今思い出したかのように、顔を歪めた。

光も、宗の方へ顔を向ける。彼女もまた、今ひとつ理解できていないのだろう。

「どういうことや？」

「春季大会は、今までの一次戦はそれぞれの学校が会場やねんけど、二次戦からは球場で試合するんや」

「球場？　西京極とかか？」

「そうや。西京極はたしか、最近『わかさスタジアム』って名前に変わったけどな。でも、京都府で1番良い球場のわかさを使えるのはベスト8から。まだベスト16やから、一回戦は違う球場でやる」
「え、それならどこで……」

「たしか、宇治の『太陽が丘球場』やんな」光が言う。その球場名は、たしかに聞いたことがあった。

「そうや。他には福知山の球場も使うけど、今回は運良く違ったな。っていうか、なんで遥斗は知らんねん。聞いてるはずやぞ」

呆れたように宗が言う。なるほど、光が知っていたのはそのためだったのかと、遥斗は理解した。

福知山市は、同じ京都府内とはいえかなりの距離がある。もし福知山で試合となっていれば、結構ハードだっただろう。京都市のすぐ南にある宇治市での試合で、本当に良かったと心の底から思った。
「まあそれはおいといて。それと応援と、何の関係が？」

「ああ、そうやったな。球場には、スタンドがあるんや。客が入るためのな。ベンチ外の選手もそこで応援するねんけど、そこでは盛り上がって大々的な応援ができるんや。もちろん、吹奏楽部が来るのもいい。甲子園とかの応援を想像してくれ」

遥斗は、かつて父親と観た甲子園を思い出した。たしかに、あれこそまさに「応援」だった。

「なるほど。つまり、俺らがスタンドで宗の応援をすればいいんやな。その応援歌がパラダイス銀河と」

「そういうことや。もちろん、俺だけじゃないというか、俺も背番号貰えるか分からんからな。ただとりあえず、応援団長の奥井さんにはそれで頼んどいた」

「奥井さん……？ 誰やっけ」

「おいおい。2年の奥井さんや。もう入部して1ヶ月やぞ。名前くらい覚えるよ……。紅白戦でも、最後に代打で出てきたやろ」

宗に言われ、遥斗はやっと思い出した。たしか、紅白戦では勝負をした。結果はサードゴロだっただろうか。そのときサードを守っ

ていた豊田一に注意されたことを覚えている。彼は、一次戦の一回戦では背番号を貰っていた。彼も奥井慎也に曲を告げたのだろうか。「なんか凄いな、ヨシムネ。一気に別世界に行っちゃったみたい」光の言葉に、遙斗も頷いた。昨日のヒットで公式戦3打数3安打。練習試合も含めると、たしか8打数6安打となったはずだ。

背番号、当確やないか……

声には出さない。出せなかった。

彼が活躍し、綾波北の戦力となることが嬉しくないはずがない。

だが、背番号なんて夢のまた夢である自分と比べると、その親友はかなり遠くの場所に存在しているのだ。

「じゃあ、俺はここで。できるだけ急ぐから、しっかりアップしていてくれよ」

「ああ。後でな」

途中の交差点で宗と別れ、遙斗は光とともに公園へと向かう。二人で歩くのも、久しぶりだ。

「どう？ 部活は。1年生の練習はあまり見られへんから、遙斗がどうしてんのかよく分からなくて」

「基礎トレーニングばかりやからな……体力的には問題ないけど、筋力的にはキツいかな。みんなようやるよ」

光の問いに、遙斗は苦笑いで答えた。昨日は試合でトレーニングが無かったためにマシンだが、普段は筋肉痛がひどいのだ。

「筋トレとか、遙斗はしたことなかったもんな」

「うるせえよ。事実やけど」遙斗は続ける。「光はどうなんや？」

マネージャーさん、かなり大変そうやけど」

「うん、思ったたよりも大変。でも、花梨さんたちも優しいし、真珠美と仲良く頑張ってるよ」

「そうか。良かった」

決して自意識過剰なわけではないが、自分が野球部に入ること、光に何らかの影響を与えてしまったのではないかと遙斗は少し気にしていた。マネージャーを言うとってくれたのは本当にありがた

いのだが、それで彼女が苦しくなるのは耐えがたい。

もう一人の1年生マネージャーである菅本真珠美も、本当に野球が好きなので、よく動いてくれている。知識に関しては、遥斗よりもあるのではないかと思うくらいだ。

「別メニユーは、ヨシムネと豊田君だけ？」

「そうやな。でも多分、春の大会が終わったら安藤も練習に参加すると思う。紅白戦でケガしたんバレたし、今は投球禁止やから。あいつは」

大会期間中であるため、1年生は体幹を鍛えるための筋トレや足腰と体力を鍛えるための走り込みといった基礎トレーニングの他に、先輩たちが行う練習の手伝いをしなければならぬ。それを交代で行っているのだが、紅白戦で結果を残した宗と一は手伝いを免除され、その間は練習に参加している。

僻みなどの感情はない。おそらく、誰も持っていないだろう。彼らのことはみんなが評価している。

しかし安藤克也は別だった。彼に先を越されるのは腹が立つと、遥斗は自分が初心者であることも忘れて思った。

「安藤君ね。遥斗も頑張つて、負けんようにしてな」

「ああ。安藤には絶対負けたくないしな」

野球だけじゃない。私生活においてかなり軟派なあの男には、それ以外にも負けられないものがある。

遥斗は一度だけ光を見ると、歩く速度をわずかに上げた。

宗が公園に入ると、ジャージに着替えた遥斗は地面に座り込んでストレッチをしていた。足を開いての前屈で、身体がピッタリと地面についている。あの柔軟さは、尊敬していた。

「すまん、待たせたな」

宗は近づいて声をかける。それに気付いた遥斗が立ち上がり、ジャージについた砂をはたいた。

少し離れた場所にあるベンチに、光が座っているのに気がついた。遥斗がこの公園で投球練習をする際には、必ず彼女がいる。

「キャッチャー道具はちゃんと着けるよ。大会中なんやから、ケガしたら大変やぞ」

「分かってるよ」

学校では冗談っぽく言ったが、キャッチャー道具をつけないわけがない。一応遥斗の投球練習であるが、宗のキャッチング練習も兼ねているのだ。そして様子を見ながらだが、変化球も投げさせてみようと思っていた。

家から持ってきたキャッチャー道具を速やかに着ける。両足にレガースを装着し、プロテクターで上半身の前面を覆う。最後にヘルメットとマスクを持って準備完了だ。

最初は近くから、段々と距離を伸ばしてキャッチボールをする。

全力投球が出来るまでに時間がかかるのは、遥斗の特徴だった。それが悪いとは思わない。持久力のある遥斗だが、野球を始めてまだ1ヶ月だ。肩の持久力は全然ない。

「大丈夫や。座ってくれ」

「オッケー」

腰を下ろし、ヘルメットとマスクを被る。最初は軽く、感触を確かめるようにして遥斗は投げ始めた。

ナイスボール、と一球一球に声をかける。ピッチャーが少しでも気分が良くなるようにするのも、キャッチャーの仕事だ。

10球ほど投げ、段々とスピードが上がってきた。入部前とは比べ物にならない。まだまだ遅いが、それでも100km/hは越えているだろう。

そして必ず、宗が構えたところにボールは向かってきた。コントロール良く投げることは意識しているらしいが、ここまで良いと、もはや才能があると思わざるをえない。

「遥斗、変化球投げてみいひんか」

「変化球？ でも、前に投げるなって……」

「少しだけや、少しだけ。気分転換にもなるし、俺の練習にもなる」
正直言うと、目的は後者だった。必ず構えたところに投げられると、あまり練習にならない。その点、変化球ならばショートバウンドなども多いだろうと思ったのだ。

遥斗にカーブの握り方と投げ方を教える。投げさせるとしても、わずかにしようと思っていた。感覚を狂わせてしまえば、元も子もない。

変化球を投げられるのが嬉しいのか、遥斗はどんどん”カーブもどき”を投げ込んできた。もちろん、まともなストライクは一球もこない。ワンバウンドしたボールなどを、宗はプロテクターで止めた。

「ごめん、全然ストライクが……」

「気にすんな。初めから上手くいくわけではない。いずれは必要になるやろうけど、今はまだ知るだけでいい。それより、肩や肘は大丈夫か」

「ああ。筋トレのせいで、多少の張りはあるけどな」

右腕を振りながら、遥斗は苦笑いで答える。その顔には、汗が浮かんでいた。暑さが本格化するのとは先だが、もう5月に入ろうとしている。全力投球を続けて、暑くないはずがなかった。

「もうあがるう。次がラストボール、全力のストレートを投げ込んでこい」

「え？ まだまだ投げられるって」

「休ませることも大事やからな。少しずつ、投げるのに慣らすくらいで丁度いいんや」

宗の言葉に、遥斗はしぶしぶながらも頷いた。何だかんだ言いながら、遥斗は宗のことを信頼してくれているようだった。

彼を、親友を生かすも殺すも自分次第だ。まだ投げ慣れていない彼に無理をさせ、取り返しのつかないことになってはいけない。

「いくぞ、ラスト！」

遥斗が振りかぶる。宗はど真ん中にキャッチャーミットを構えた。

あとは上手くキャッチングするだけだ。

後ろに引いていた左足が上がり、右腕がグローブから離れる。そして、いつものように振られた手からボールが放たれた

それは一瞬の出来事だった。いつものように、遥斗が投じたボールは宗が構えたところに向かってきた。そのはずだった。

気がついたときには、ボールがキャッチャーマスクに直撃していた。ミットに触れもしなかったのだ。

「大丈夫か！」

「ああ、すまん。ナイスボールや」

手を軽く上げ、異常が無いのを知らせる。キャッチャー道具を持ってきてよかつたと、心の底から思った。

「浮き上がった？ まさかな……」

紅白戦のラストボールも、似たような感じだった。もっとも、あのときは捕れたのだが。

「こいつ、もしかして……」

宗は、遥斗の顔をじっと見つめた。

12・2・ゴールデン・ルーキー(2)

「珍しいな。お前が電話してくるなんて」

「まあな。少し昔話でもしようかと思つてさ」

「あまり長時間は話せないぞ。もうすぐ夜練が始まるからな」

「ああ。すぐ終わらせるよ」

中は携帯電話を耳に当てながら、冷蔵庫を開けた。毎晩欠かさず行っている素振りの後に必ず牛乳を飲むのが、彼の習慣だった。

電話の相手である透とは、かつて正捕手の座を争った相手だ。結局、一度も勝つことはできなかったのだが。

「日曜のことか。今日は水曜だから、4日後だな」

「俺たちが高校に入ってから、試合するの始めてやな。つまり、俺とお前との初対決つてわけや」

「対決ならいつもしてただろ。中学のときに」電話越しに、透は軽く笑った。「ずっと俺が勝つてたけど」

「うるせえよ。でもさ、やっぱり楽しみなんや。お前たちの活躍はテレビで何度も観るけど、俺たちも成長してるやぞ」

「一応知ってる。川勝からの満塁ホームランは、見事だったよ。打球が当たったピッチャーはどうなんだ」

「ああ、大したケガじゃねえよ。ピンピンしてる」それは嘘だった。「そうか、それは良かった」

何故知っているのだろうか、中は少し疑問に思った。あの双葉高校が、綾北の試合をビデオで録っていたとでもいうのだからか。

「わざわざビデオを録ってたのか」
「当たり前だ。試合するのだからな。俺たちは、どんな相手にも手は抜かない」

”どんな相手にも”というフレーズが少し引つかかった。ビデオを録ったものの、やはり綾北のことは下に見ているのだろう。

とはいえ、相手はセンバツベスト8だ。中としても、双葉は格上

だと当然思っている。

「そつか。日曜は楽しみにしてるよ。タクにもよろしくな」

「ああ。お前たちもガツカリさせないでくれよ。かつての親友とはいえ、容赦はしない」

夜練があるからと、透はそこで電話を切った。寮生活である双葉は、本当に夜遅くまで練習しているのだろう。綾北は、午後8時半が完全下校となっていた。

”かつての”親友か……

確かに、高校に入ってから透や琢磨との関わりは極端に減った。誰が、今の彼らを「親友」と呼ぶだろうか。

中は牛乳を冷蔵庫の中に戻した。そして再び玄関に向かうと、バットを持って外に出た。時刻は夜9時を回っている。汗をかいた身体に当たる夜風が、少し肌寒く感じた。

日曜日、JR宇治駅からバスに乗り、遥斗は太陽が丘球場にやってきた。いくつものグラウンドがあるが、緩い上り坂の最深部に、今日試合を行う球場があった。

綾波北高校と双葉高校の試合は第2試合だ。球場では、第1試合である鞍馬商業対丹染の試合を行うための準備が始まっていた。

双葉戦に勝てば、次に戦うのはこの試合の勝者である。偵察も兼ねて、全員で試合を観戦することになっていた。もちろんベンチ入りメンバーはウォーミングアップをしなければならぬため、2回裏終了時までしか観戦できない。遥斗は、隣を歩く宗を見た。彼は1年生から唯一のベンチ入りを果たした。今日も出番があるかもしれない。

背の低い建物があった。その前で着替えをしている先輩に挨拶をし、遥斗もカバンを置いて着替え始めた。

何の建物やるか

建物はガラス張りになっており、中にはベンチや自動販売機があ

る。休憩室なのだろうか。

その奥には大きなプール施設が見えた。まだ5月上旬ということ
で誰もいないが、夏休みにもなると大勢の客で賑わうのだろう。

そういえば、まだ父親が生きていた頃に、家族3人でこのプール
に来たことがある。まさか、その奥には野球場があるなんて思いも
しなかった。ましてや自分がそこへ来ることになるうとは、当時は
全く予想できなかった事態である。

ゴールドデンウィークに娯楽以外の用事があるなんて、久しぶり
……いや、初めてかもしれんな

後悔はしていない。ただ、少し不思議な感じだった。

野球が好きだった父親が、今の自分を見たらどう思うだろうか。

応援、頑張るか！

この1週間、声が枯れそうになるまで応援の練習をしてきた。相
手は強いらしいが、勝てるために自分たちができる最高のサポート
をしなければならぬ。

遥斗は、ユニフォームの胸に縫われている「綾波北」の文字を見
ながら決意した。

鞍馬商業と丹染の試合が5回裏を終えたとき、中は監督である西
村雄吾、部長である河野泰三と一緒にバツクネット裏の通路に向か
った。

そこにはもう既に、審判団と双葉の監督、部長、そしてキャプテ
ンである琢磨がいた。

中は、持っていた2枚あるメンバー表のうち1枚を主審に手渡す
と、もう1枚を琢磨に差し出して口を開いた。

「久しぶり、やな」

「ああ。元気やったか？」そう言って琢磨もメンバー表を中に差し
出し、互いに交換して握手を交わした。

「おかげさまで。男を前にしてここまで興奮したのは、久しぶりや」

メンバー表には一切目をやらず、琢磨の顔をまっすぐ見ながら中は真顔で答えた。彼と直接会話をしたのは、何年ぶりだろうか。

「では、これよりトスを始めます」

主審が言う。トスといつても、サッカーの国際試合みたいにコイントスをするわけではない。先攻後攻を決めるための、ただのジャンケンだ。

最初はグーの後、中は再びグーを出した。琢磨が出したのはパーだ。中は顔を僅かに歪めた。

「じゃあ、先攻で」

「双葉高校が先攻、綾波北高校が後攻、でよろしいですね」

中は頷いた。正直、これはラッキーだった。春季大会のここまで3試合は、全て後攻だったのだ。強豪校と戦うからこそ、できるだけ普段と同じ状況で挑みたい。ジャンケンに勝てば、もちろん後攻を選ぶつもりだった。

「では、攻守交代は駆け足で、スポーツマンシップにのっとった、テンポの良い試合をいきましょう」

主審の言葉で中は、チームメイトウォーミングアップをしながら待っているサブグラウンドに戻ろうと歩き始めた。そして、先ほど琢磨から貰ったメンバー表に目をやる。その瞬間、彼は足を止めた。「タク！ こいつは一体……」

「知らねえのも無理はないよ。この前あったセンバツのときには、まだ戦力じゃなかったんやからな」

「新名、べらべらと話すな」

双葉の監督が、琢磨をたしなめる。彼は軽く苦笑いを浮かべた。「ということや。良い試合をしようぜ、タル！」

琢磨は片手を挙げると、早足で戻っていった。それを見ながらしばらく呆然と立ちすくんでいた中は、舌打ちをすると再び歩き出す。サブグラウンドまでの道のりが、とても長く感じた。

サブグラウンドに帰ってくると、真つ先に駿が寄ってきた。聞かなくても、彼が何を言いたいのかは分かる。ウォーミングアップを

行っているメンバー全員に聞こえるよう、中は口を開いて声を張った。

「後攻！」

「ジャンケン、勝ったのか」

「いや、負けた。タク……双葉のキャプテンが先攻を選んだ。こっちとしてはラッキーやけどな」

「そうやな。糸井もいるし、双葉は後攻を選ぶ印象やったんやけど」
駿の言葉に中も頷いた。中学時代は、琢磨もどちらかといえば後攻を選ぶことが多かったはずだ。

それに、双葉には絶対的なエースである糸井健一がいる。双葉は彼のピッチングでリズムを作っているともいえるため、後攻を選ぶと考えるのは妥当だった。

まあ、糸井やつたらな……

先ほど見たメンバー表を思い出す。自然と、顔が歪んだ。

「どうした？　なんかあったんか」

「まあな。やけど、今は忘れよう。早くアップを済ませな、丹染がコールド勝ちしてしまうかもしれん」

中が駿に向けて発した言葉に全員が反応する。

丹染と鞍馬商の試合は、6回表を終えて6対0だった。先攻である丹染がリードしているのだ。7回以降で7点差がついてしまうと、コールドゲームとなり、9回を待たずして試合が終わってしまう。彼らが慌てるのは、無理もないことだった。

「一応、1年が呼びにきてくれるから、あまり焦らんでいいぞ。ただ、テンポは少し上げる」

言いながら、中は球場の方を見る。このサブグラウンドからは様子を窺えないが、あと数十分もすれば自分たちがあの場所で試合をするのだと思うと変な感じだった。

コールドなら、それでいい

コールドで終わると、それだけ早く試合ができるということだ。

今は一刻も早く試合がしたかった。

「待つてるタク。舐めてると、痛い目みるぞ」
中は、誰にも聞こえないように呟いた。

流れるような動き。双葉高校の試合前ノックを見ながら、これが全国レベルなのかと克也は感心した。

後攻のため先に試合前ノックを行った綾波北と比べると、やはり雲泥の差だ。むしろ、綾波北の動きはいつもより悪いと言えた。やはり皆、緊張しているのだろう。ベンチに入っていない克也でさえ、多少の緊張感を持っていた。

最後に内野手の本塁送球でノックが終わる。三塁側ベンチへ引き上げる双葉サイン。そのとき、球場全体の雰囲気、一つ引き締まったように感じた。

《お待たせいたしました。綾波北高校対双葉高校、まもなく試合開始でございます》

球場のアナウンスが聞こえる。なるほど、雰囲気も引き締まるわけだ。二次戦の扱いは、一次戦のそれとは全然違うのだと、改めて思わされた。

《試合開始に先立ちまして、両校のスターティングメンバー、並びにアンパイアのご紹介をいたします。先攻、双葉高校………：1番、シヨート、ニイナ君》

センターの奥に設置された電光掲示板に”新名”という名前が表示され、歓声が一気に大きくなる。京都に住む高校野球ファンの人たちからすれば、待ちに待った瞬間なのかもしれない。

8番打者までの名前が告げられる。電光掲示板には、克也も聞いたことのある名前がズラリと並んでいた。あとは9番打者 絶対的エースである健一の名が呼ばれるだけだ。

《9番、ピッチャー、カネマツ君》

………は？

克也は耳を疑った。電光掲示板に目をやると、そこには”金松”

の文字があつた。

「金松？ まさか……」

克也は、しばらく電光掲示板を見つめざるを得なかつた。

「調子は良さそうやな」

試合前の投球練習を終えた金松・天宙に、透は声をかけた。彼は公式戦初登板であるが、緊張している様子は見えない。

「そんなことないですよ……」天宙は持っていたスポーツドリンクの容器をベンチに置いて答えた。「九割五分くらいです」

それで調子は良くない……か

透は思わず笑つた。先輩に口答えできる度胸の良さも、投手に向いていると思つていた。

今日、京都の高校野球界に衝撃が走るだろう。透は、これから闘う舞台となるグラウンドを見つめた。

13-1 王者からの洗礼(1)

【両校 スターティングメンバー】

先攻 双葉

順	位置	名前
1	遊撃	新名琢磨
2	二塁	山本真一
3	捕手	岡下透
4	右翼	湯川龍治
5	左翼	名茂秀平
6	一塁	川戸哲
7	中堅	高木陸也
8	三塁	稲田耕平
9	投手	金松宙

後攻 綾波北

順	位置	名前
1	三塁	海田和也
2	左翼	森山智勝
3	中堅	小沢昇平
4	右翼	井口裕
5	捕手	松永中
6	一塁	河北亮
7	投手	寺島駿

8 二塁 木原勝弥
9 遊撃 寺重大輔

《1回の表、双葉高校の攻撃は……1番、ショート、新名君……》
球場にアナウンスが流れる。その直後、スタンドに集まってくれた吹奏楽部の演奏が始まった。ジッターリン・ジンの『夏祭り』
新名琢磨が選曲している応援歌だ。

プレイボールと同時にこの演奏を聴きたいため、琢磨は公式戦で先攻を選ぶことが多い。それはチームメイトの理解もあつてのことだ。

琢磨はバッターボックスに向かいながら、投球練習を行う寺島駿を眺めた。藤草戦で負った怪我は完治したのだろうか。ピッチングを見る限りでは、分からない。

投球練習が終わり、琢磨はゆっくりと左打席に入る。両打ちである彼は、相手が右投げである場合は左打席に入ることが多い。

「いよいよ、やな。覚悟はできてるか？ タル」

「駿は良いピッチャーや。いくらタクでも、そう簡単には打てへんぞ？」

「やるうな。MAX140キロの速球派と対戦するのを、実は楽しみにしてたんや」

マウンド上の投手を見たまま、琢磨は松永中答える。相手投手から目を離すことは絶対にしない。勝負は、この時点で始まっているのだ。

「それより、あの金松って奴は何なんや。糸井はどうした」

「まあ、こつちにも色々あるんや。でも、良いピッチャーや。1年生とはいえ、簡単には打てへんぞ？」

先ほどの中と似た口調で琢磨は返す。それ以降、言葉は交わさなかった。

何故、チームメイトは琢磨の意見を尊重してくれるのか。彼が先攻を選ぶことを認めてくれるのか。

それは、彼の公式戦における初打席の打率にあった。

試合開始を告げるサイレンが鳴り響き、駿が初球を投じる。内角の厳しいコースだ。だが、予想通りのストレートだった。琢磨は、思い切りバットを振り抜いた。

「打率キープ……」

飛んでいく打球を見ながら、琢磨は呟く。彼の公式戦初打席打率、それは、10割だった。

グングンと伸びていく白球を、中はただ呆然と眺めていた。右翼手の井口裕が必死にバックするのが見える。しかしそれは無駄だろうと、彼は他人事のように思った。

そして白球は、そのままスタンドを越えていった。

甘かった、のか……？

そんなハズはない、そう思ったかった。強豪相手に気持ちで負けるわけにはいかないと、内角のボール球になっても構わないくらいに厳しいコースを要求したのだ。それを完璧に捉えられるとは思ってもしなかった。

ダイヤモンドを一周した琢磨がホームベースへと戻ってきた。中は審判からボールを受け取りながら、彼がホームベースを踏むかどうかをさりげなく確認する。そして琢磨は、ホームベースを踏んだところで立ち止まった。

「あのピッチャー、ケガは完治したんか？」

「……いきなり何や」

「早くマウンドから降ろさな、大変なことになるぞ」

そう言って、琢磨は三塁側ベンチへと戻っていった。その姿を、中はただ呆然と眺めるしかなかった。

駿のボールに、何か感じるものがあつたのだろうか。だが、実際

に球を受けている中は何も感じていない。何年も受け続けているのだから、気づかないとは思いたくなかった。

駿も、足の状態は大丈夫だと言っていた。なら、それを信じるしかないだろう。

2番打者である山本真一がゆっくりと右打席に入った。このバッターの特徴もしっかり把握している。追い込まれてからの粘りが上手い、なかなか三振しない打者だ。

力でねじ伏せる、駿

あまり精度の高くない駿のカーブで誤魔化せる打者ではない。あくまでもそれは見せ球に、やはり決めるのはストレートだ。

駿も同じようなことを思ったのか、中のサインに首を振ることはなかった。

ストレート3球で、カウントを1ボール2ストライクとした。問題はここからだ。一度カーブをボールとした後で、中は再びストレートを内角に要求した。

しかし、やはり双葉の2番打者は並大抵の打者ではなかった。彼は内角のストレートにも難なく対応してファウルとすると、次に中が要求した外角低めのストレートもファウルにした。

その様子からは、ファウルにしかできないのではなく、敢えてファウルにしているようにさえ思えた。

その後、真一は外角の際どいボールを2球とも見送った。どちらもボール1個分ほど、外に外れていた。

フォアボールとなり、真一が1塁へ向かう。中は主審にタイムを要求した。3人以上が集まる守備のタイムは9イニングで3回までと決められているが、バッテリー間のタイムは回数が制限されていない。マスクを外し、彼は小走りでマウンドに向かった。

「今日の審判は外が狭いな。2球目に投げたアウトコースギリギリをボールにされた時点で気がつくべきやった。すまん」

「気にすんな。それなら内を中心に攻めたらいいだけや」

「……投げられるか？」中が気にしているのは、琢磨の打球だった。

インコースをあれだけ飛ばされれば、嫌なイメージを持っても仕方ない。

「投げられるさ。そうじゃなかったら、ここにはおらん」そう言っ
て駿は足元のマウンドを指差した。

「……そうやな。よし、ランナーは俺に任せて、駿はバッター中心
でこい。次の透は、インコースが若干苦手のはずや。逃げるなよ？」
「任せろ」

そう笑う駿に中は頷き返すと、守備位置へ戻ろうと回れ右した。
しかし、すぐに足を止めて口を開いた。

「なあ、駿……」頭によぎったのは琢磨の言葉。しかし、中は頭を
振ってそれを消した。「……いや、何でもない」

敵の発言にいちいち惑わされているようでは、捕手、そして主将
は務まらない。投げられると本人が言っている以上、それを信じよ
うとかれは決めた。

どのみち、駿以外の投手で双葉打線を抑えるのは困難だろう。そ
の駿も、まだ一つのアウトも取っていないのだが。

それでも、お前がエースなんや……

中は先ほどよりも速く走って守備位置へと戻った。

「まだ足は治ってないのか」

中がマスクを被って座ったとき、右打席に入った岡下透が尋ねた。
駿のことを言っているのだろう。

中は何も言わなかった。普段は比較的寡黙な透だが、彼は試合が
始まった途端に饒舌となる。彼に惑わされるわけにはいかない。

「まあ、ボールを見れば分かることだ」

そう呟いて、透はバットを構えた。神主打法 小沢昇平が時折
見せる、身体を柔らかく使うことを意識したそれとは違い、身体中
からオーラが発せられているようだ。

中はすぐにサインを出す。先ほど決めた通り、インコースのスト
リートだ。

逃げるなよ、駿……

駿が頷き、投球モーションに入った。右足だけで立てているし、左足を踏み込めてもいる。そして腕も振れていた。ケガの影響は考えられない。

しかし、彼が放ったそのボールは違った。中が構えたところと逆のコース　少し真ん中寄りの外角に向かう。中が、あつと声を漏らすと同時に、反応していた透のバットがボールを捉えた。

大きな放物線を描き、白球は右中間へ飛んでいく。昇平と裕が必死に追うが、無情にもそれは彼らの頭を、そしてその奥にあるフェンスを越えていった。

嘘やろ……

中は立ち上がったまま呆然と立ち尽くす。逆球とはいえ、駿のストリートが逆方向へのホームランになるとは、信じられなかった。

ダイヤモンドを一周した透が、ホームベースを確実に踏む。そして、中の方を見た。

「まだまだ、キャッチャーとして一流にはなっていないな」

「なっ……、なんやと!」

突かれたくないところを突かれ、中は思わず大声を出した。その声に振り返った透は、真剣な顔で再び口を開いた。

「あのピッチャー、このままだと潰れるぞ」

鈍い音がグラウンドに響く。ネクストバッタースサークルで座っていた名茂秀平はゆっくりと立ち上がった。

あのピッチャー、もう終わりじゃねえか……

本塁打、四球、本塁打、死球。一次戦のピッチングを見るに、いくら双葉の打線とはいえ序盤からの大量得点は難しいと思っていた。自分が柵越えをして、打線に勢いづかせなければならぬと意気込んでいたのだが、その必要はなくなってしまった。

次は、俺がホームランを打つ番やな……

右手で持ったバットを身体の右側でグルグルと回しながら、秀平

は打席へと向かう。ここであの投手を叩けば、もう試合は終わったようなものだ。

しかし、完全に興醒めだ。

他府県の強豪校を相手にできる練習試合とは違い、府内の高校としか戦えない公式戦はイマイチ気持ちが高まらない。ましてやベスト16レベルの相手となると、場合によっては絶対に拝めないような格下と戦うこともありえるのだ。

その点、綾波北の投手はMAX140km/hを誇る本格派だと聞いていた。全国レベルには遠いが、冬場にかなりレベルアップしたらしい。秀平は対戦するのを少し楽しみにしていた。

右打席に入り、足場を均す。3点を先制して尚も無死1塁、バントはあり得ないにしても、ここはランナーを進めることを第一に考えるべきだろう。

べき、とかは知らねえ。俺が引導を渡してやるよ

バットを握る手に力を込める。寺島を立ち直らせてはいけないと、秀平は感じた。

初球のボール球を見逃し、2球目を待つ。少し高めのレストランに向けて、秀平は思い切りバットを振り抜いた。

なっ……

少なくとも外野の頭を越えたと思った打球は勢いこそ強いが、三塁手の正面に向かって地面を転がっていった。

三塁手が打球を難なく捌き、2塁へ送球する。秀平が1塁ベースを駆け抜ける前にボールが回されていき、ダブルプレーが成立した。

ゴロ、やと……？

疑問を抱きながらも、秀平はベンチへ戻る。

続く6番の川戸哲がファーストゴロに倒れ、あっという間に3アウトとなった。哲も、少し首を傾げながらベンチへと戻ってくる。

「変でしたよね」秀平は真っ先に尋ねた。

「ああ。思ったより、ボールがキテない気がしたな」

哲の答えに、秀平は頷く。これは自分が思ってるよりも相手は限

界に近いのではないかと、彼は思った。

13 - 2 ・王者からの洗礼(2)

スコアボードに表示された3という数字を、安藤克也はぼんやりと眺めていた。

双葉高校が強いのは分かりきったことだ。だが、一巡もしないうちに駿が3点を失うとは思いつかなかった。しかも、本塁打を2本も打たれたのだ。

せやけど、それよりも気になるのがあいつか……

克也の視線はすぐに、左腕を唸らせながらマウンド上で投球練習をしている男に注がれた。彼の姿を生で見るのは、これが初めてではない。さらに、雑誌でも彼の名前を何度も見たことがあった。

昨夏のボーイズリーグ 硬式による中学生のクラブチーム 全国大会準優勝投手、金松天宙。背番号16が、ダイヤモンドで目立っていた。

中学時代に克也が見てきた同年代投手の中で、間違いなく1番良かったのが、天宙だった。全国大会に行ったとき、彼のピッチングを見て克也は衝撃を受けたのだ。

しかし、天宙が所属していたクラブチームは関東だった。しばらくお目にはかかれないうと克也は思っていたのだが、とんだ幸運だ。

「あんなサウスポー、センバツに出てたか？」

「いや、見てへんな。ケガでもしてたんやろか」

克也の横で、瀬高亮司と千尾啓太が呑気に会話をする。その間に天宙はもう投球練習を終えていた。左打席に1番打者の海田和也が入る。

太鼓が叩かれる。応援の存在を忘れていた克也は慌ててメガホンを口に当てると、和也の応援歌である『狙い撃ち』の”ラツパ”を叫んだ。しかし、マウンドから視線は切らない。

天宙がセットポジションに入った。ランナーがいなくてもセット

ポジションから投げる彼の投球モーションも、中学時代から変わらない。ゆったりとしたモーションから、初球が投じられた。

金属音が響く。しかしそれは綺麗なものではなく、低く鈍い音だった。

ピッチャーゴロか。あいつ、もしかして……

嫌な予感がする。克也は、悔しそうにベンチへ戻る和也と、全く変わらない表情で一塁手からボールを受け取った天宙を交互に見た。もう既に、天宙は高校野球のレベルに到達しているというのだろうか。もしそうなら、これは何の幸運でもない。克也は先ほど自分が思ったことを撤回せざるをえなかった。

2番打者の森山智勝がキャッチャーフライに倒れる。中学時代に見た天宙のピッチングを、克也は思い出した。

1回はピッチャーフライ、キャッチャーフライ、ファーストゴロ。2回はセカンドゴロ、サードライナー、ショートゴロ。バックネット裏で全国大会のスコアをつけていた克也は、その時点で違和感に気づいた。

野球の守備位置には、番号があてられている。投手が1、捕手が2、そして一塁手、二塁手、三塁手、遊撃手、左翼手、中堅手、右翼手の順に9までの数字が与えられているのだ。

スコアシートには、1番打者から6番打者まで、天宙がその番号通りのポジションに打たせているのがハッキリと示されていた。

打者も気づいたのだろう。彼の思い通りにさせないように、簡単に早打ちしなくなった。

しかしそれは、逆に天宙の思い通りになることとなった。甘いコースに投げた球を簡単に見逃してくれる打者ほど楽なものはない。3回からは、三振を意味する「K」の記号がスコアシートに並んでいた。

抜群の投球術、それが金松の最大の武器……

あれから1年も経っていない。天宙は確かに成長しているのだろう。だが、相手のレベルはその成長幅とは比べ物にならないほど上

がつているはずだ。

それにも関わらず、天宙はまるでピッチングを楽しむかのよう
に、綾北の上位打線を”1と2”に打たせてアウトにした。

まさか、今回もあのとときと同じピッチングをしようというの
だろうか。彼には、余裕さえあるのだろうか。

打席に3番打者の昇平が入る。2年生でありながら、綾波北で1、
2を争う打者だ。同じく頼りになる中が左打者であることを考えると、
左投手である天宙を相手にするこの試合では、実質昇平が1番
期待できるというていい。

小沢さんをファーストに打たせることができれば、もうウチは
ただやられることしかできひん……

応援歌をラッパの音で叫びながら、克也は祈る。もしそんなこと
をされたら、同地区の「ライバル」なんて言っていられなくなる。
ただの「障害」だ。それも、とてつもなく大きい障害だ。

初球、アウトコースのストレート。昇平は一瞬バットを動かしか
けたが止めた。審判の腕は上がらない。

2球目もアウトコースにストレートだった。今度は昇平も打ちに
いく。芯で捉えられた打球が、”一塁手の方に”ライナーで飛んだ。

ヤバイ！

克也は心の中で叫んだ。

一塁手が、ファーストミットをはめた左手を上に見一杯伸ばして
ジャンプする。打球はそのさらに上を越えていった。

「よしっ！」

思わず叫んだのも束の間、打球はそのまま右に曲がり、ファウル
ゾーンに落ちた。

1塁へ走りかけていた昇平も足を止め、再び打席に戻る。バット
の芯で捉えていたが、天宙の球に想像以上の球威があったというこ
とだろうか。

とはいえ、やはり昇平はさすがだ。双葉の投手から痛烈なライナ
ーを打ったことで、スタンドも一気に盛り上がりを見せた。

しかしそれでも、克也は完全に安心することができなかった。1球で仕留められなかったら、もう次のチャンスはないと思っただけ。おそらく、天宙も27個のアウト全てを順番通りに取れるなどとは思っていないだろう。あくまでもそれは”遊び”にすぎない。そして、彼が遊んでいるうちに打たなければいけないのだ。

天宙がセツトポジションから2球目を投じる。明らかに投球のテンポが上がった。昇平がバットを振り抜くが、打球はバックネットに直撃した。

タイミングは合ってる。でも……

嫌な予感しかない。

そして3球目。インコースのボールを空振りして、昇平は三振した。

「小沢さんが三振……」

「しかも全部真っ直ぐやぞ」

「糸井の陰に隠れてたんか……。あのサウスポーも、かなり良いやんけ」

綾波北のスタンドがざわつく。しかし克也は、それを冷めた目で見つめていた。

紅白戦での対戦で、昇平の凄さは身をもって経験している。その昇平が、ストリートを続けられて簡単に三振するはずがない。

高速スライダー……。またさらにキレが良くなったんか

マウンドから降りてベンチに向かう天宙の姿を見ながら、克也は思いつき唇を噛んだ。あの男はどこまで登っただろうか。そして彼は、段々遠ざかる背中から視線を逸らした。

「ファースト！」

ライン際の絶妙なバントが、一塁手の前に転がる。ダッシュしてきた河北亮はそれを捕球すると、そのままバッターランナーをタッチした。

一死一罌。アウトをくれたのは、精神的に楽となった。しかし不気味だ。もう、あとは自分たちの野球をするだけだと言わんばかりの、迷いが無いバントだった。

駿はこの回の先頭打者に四球を与えていた。元々、彼が抜群のコントロールを持っていたわけではないが、先頭打者の四球は極力出さないように意識していたため、少し気になる。やはり双葉が相手ということは、それなりのプレッシャーとなっているのだろうか。

《9番、ピッチャー、金松君》

ウグイス嬢のコールとともに、天宙が左打席に入った。ピッチングは素晴らしかったが、バッティングはどうだろうか。次の打者が琢磨であることを考えると、この打者は確実に抑えておきたい。

中はストレートのサインを出し、外角ギリギリにミットを構えた。まずは様子見だ。9番打者の1年生とはいえ、双葉で公式戦の先発を任せられている選手だ。打撃センスはないと考えるのは、早計だろう。

ビビるな。思いつきり腕を振れ！

声に出さなくても、これくらいのことは駿も分かっているだろう。あとは、信じるだけだ。

セツトポジションから、初球を投げられる。吹っ切れたのか、駿が投じたボールは中が構えたミットに向かってきた。

最高のボール。中がそう思ったとき、天宙のバットが動いた。

これに反応するか。投手とはいえ、積極的やな……

積極性のある打者は、それだけで不気味となる。様子見から入って良かったと、中は思った。

天宙がバットを振り、金属音が聞こえる。打球が三遊間に飛んだ。外角ギリギリのボールを打ったのだ。遊撃手の寺重大輔が捕球し、三塁手の和也が自重してベースを空けなければ、ランナーの進塁は食い止められる。

「ショー……」

そこまで言って、中は止めた。打球が速い。大輔が横に飛ぶが、

打球は彼が差し出したグローブの先を抜けていった。

「レ、レフト！」

慌てて中は叫ぶ。左翼手の智勝が打球を掴んだとき、2塁ランナーはとつづくに3塁ベースを蹴っていた。

速い……！

打球が速かったにも関わらず、2塁ランナーは迷うことなくホームへ突っ込んできた。スタートから迷いがなかった証拠だ。そういつた一つ一つの細かいことを確実にできるのが、強豪と呼ばれる所以だろう。

アウトにできるか微妙なタイミングだったが、中は迷わずバツクホームを命じた。相手が思いきったプレーをしてくるなら、こちらも引くわけにはいかない。智勝から中継に入った和也へボールが渡り、和也が中に向かって送球した。

近づいてくるランナーの気配を感じながら、中はボールを捕った。送球はほとんど問題ない。あとは、自分の仕事だ。

回り込もうとするランナーへ、ミットをはめた左腕を伸ばす。間一髪のタイミング、そう思っていた。しかし腕を伸ばしたその先にランナーの姿はなかった。既にホームベースをタッチして立ち上がっているランナーが、視界に映る。

これが双葉の実力か。両手を横に広げて、凄い勢いでランナーの生還を示した主審を見ながら、中は思った。

今まで対戦したどの相手よりも強い。そんなことは初めから分かりきっていたことだが、改めて実感させられた。

「セカンド！」

聞こえた声に、中は慌てて顔を上げる。バッターランナーである天宙が、2塁ベースへ向かっていた。すぐに立ち上がって送球する。送球に問題はない。しかし、タイミングが遅すぎた。

何をやってるんや、俺は……

ホームインされた後、すぐバッターランナーの動きに注意を向けていれば。アウトにすることもできたかもしれない。一番雰囲気

呑まれているのは自分ではないかと、彼は唇を噛み締めた。

「せやから言ったやろ。仕方ないから、俺が引導を渡してやるわ」
ウグイス嬢のアナウンスが球場に響く中、次打者の男が中に向か
って言った。

「引導？」

「俺の忠告を聞かへんかったのはお前やからな。あのピッチャー、
もう投げられへんようになっても知らんぞ」

そう言っただけで打席に入る琢磨。中は唇を噛みながら、マスクを被っ
て座った。

タクの奴、好き放題言いやがって……

琢磨よりも、それに対して言い返せない自分に腹が立つ。駿の怪
我というのは確かにダメージが大きい出来事であったが、それだけ
じゃない。ただ自分の力が足りないことに、中はようやく気づかさ
れた。

外角のストレートを、琢磨は見送る。際どいコースだったが、審
判の腕は上がらなかった。

序盤から不安定やから、審判のジャッジも辛めやな。コースを
狙うコントロールも、今の駿には……いや、際どいコースをストラ
イクにできない俺の技術も問題か……

多少甘くなっても構わない。バツクを信じて投げ込んでこい。

ストレートのサインを出してど真ん中にミットを構えると、駿は
頷いた。肩で息をしているが、まだ目は死んでいない。

2球目、中が構えたコースより僅かに低めへボールが来た。むし
ろちょうどいい。本当にど真ん中へ投げられては、それはそれ
で困る。

琢磨のバットはまたしても動かなかった。中はボールを捕ると、
ミットをほんの少し 審判に気づかれないほど少しだけ上げた。

「ストライク！」

審判のコールに、中はホッと一息ついた。琢磨から奪った、初め
てのストライクだ。駿の顔にも一瞬だけ笑顔が浮かんだ。

3球目も琢磨は見逃した。しかし今度は、ほぼど真ん中といえるボールだった。当然、審判の腕は上がる。

どういうことや……。こいつ、何を待ってる？

4球目はカーブを投げさせた。ワンバウンドさせる球で、琢磨の出方を探ろうと思ったのだ。しかし、琢磨はそのワンバウンドしたボールを平然と見逃した。追い込まれているというのに、その表情からは相変わらず余裕が感じられる。

5球目、今度はミットを外に構えてストレートを要求する。そして、やっと構えたコースにボールが向かってきた。

完璧だ。そう思った瞬間、琢磨のバットが動き出した。

痛烈な打球が三塁線を襲う。投げ終えた直後の駿であったが、慌てて目で打球を追った。

「ファール！」

三塁塁審の両手が上がる。間一髪というほどのギリギリではなかったが、それでも三塁手の和也が反応できないほど速い打球だった。足の痛みは、かなり限界に近づいていた。1球投げることに激しい負荷がかかるのだ。球威が落ちているのは自分でも分かつている。最高のコースに投げたボールを捉えられたのがその証拠だ。だが、それでもマウンドから下りるわけにはいかなかった。

エースの意地だけを頼りに投げ続ける。しかし、どのストライクゾーンに投げてでも琢磨は対応してきた。どれもファールとなったが、駿はやがて、その全てが完璧な当たりであることに気づいた。

まさか……

彼はわざとやっているのではないか。恐ろしい推測が駿を襲った。そのとき、審判がタイムを宣告した。琢磨が要求したのだ。

琢磨は打席を外して、靴紐を結び直す。そして彼が再び打席に入ったとき、駿は思わずのけ反りそうになるほどの威圧感を、彼から感じた。

次が、本番ってか

自分が見下されているように感じ、思わず苦笑いを浮かべる。まだ笑えるのかと、自分でも驚いた。

見下されなくなったら、力を証明するしかない。駿は最後の力を振り絞り、全力のストレートを投じた。

琢磨のバットが動き出す。駿が空振りを期待したそれは、その期待を裏切ってボールを捉えた。今度はファールではない。左中間に、
またもや痛烈な勢いで打球が飛んだ。

外野から内野にボールが返ってきたときには、もう既に宙がホームインし、打った琢磨も悠々と2塁ベースにまで到達していた。

これで5点目だ。どんどんと増えていくスコアボードの数字を見て、中は主審にタイムを要求した。駆け足で駿のところへ向かう。だが、彼に何と声をかけてよいのか分からなかった。

わずか数秒ながら、二人の間に沈黙が流れる。それを破ったのは、駿だった。

「すまん、限界や……」

「なっ……まだや、まだいける！ ボールも良くなってきた、琢磨だって、あと少して打ち取れるってところまでいったやろ」

視線を落しながら言う駿の姿を見て、中は慌てて彼を励ました。ここで駿にマウンドを下りられては困る。

しかし駿は黙って首を振ると、中の目を見つめてきた。それだけで彼が何を言いたいか、中には分かった。分かってしまった。

「新名との対戦で、俺の力が足りひんのは分かった。あいつは、いつでも打てたのにわざとファールで遊んでたんや」自虐的な笑いを浮かべて駿は続ける。「正直、足も万全じゃない。これ以上迷惑はかけられへんわ……」

中は何も言わなかった。ただ黙ってベンチに顔を向ける。それで分かったのだらう。監督の西村雄吾がブルペンへ何か声を掛けた。

ありがとうと呟きながら、駿がマウンドを下りてベンチへとゆつくり歩いていく。小走りすらできない状況だったのかと、中は唇を噛み締めた。

ブルペンから走ってきたのは2年生右腕の藤澤翔也だった。中はホームベースへ戻ると、主審に投手の交代を告げる。ウグイス嬢のアナウンスを聞きながら、投球練習のボールを受けた。翔也の調子は悪くないようだ。だが、これが双葉打線に通用するかは全くの別問題である。

それでも。

「まだ5点差や……」

それでも諦めるわけにはいかない。中は自分自身に言い聞かせた。

2番打者が1塁へ歩く。もちろん歩かせたかったわけではない。

翔也は彼に対して13球を投じていた。何度もファールで粘られた挙げ句に出してしまった四球だ。

そういう役割なのか、山本って奴は。いつでも打てると言わんばかりやな……

翔也に対して声をかけながら和也は思う。琢磨と透の間というのは、かつて自分が担っていた場所だ。琢磨が出塁した後、送りバントはもちろん盗塁の手助けやヒットエンドランなど様々なことをしてきた。あのときは透に少しでも良い状況を渡すため、必死になっていた。完璧にこなせていたとは思わないが、それなりにはできていただろう。しかし双葉の2番打者がこなすそれは、和也から見ても完璧であった。

今は自分が琢磨と同じ1番打者を任されている。彼のように打てるとは思っていない。しかしそれでも、綾波北打線を中と共に引っ張ってきたという自負がある。

お前もそうやる？ 中……

駿が降板した以上、2番手以降の投手が双葉打線を抑えなければ

ならない。そのためには、中の好リードが絶対に必要となる。そしてもちろん、和也らの守備もだ。

翔也は自身にとっての先頭打者に与えた四球を気にしていない様子でマウンドに立っている。冬を越して駿が成長したため彼の完投も増えたが、秋は1年生ながら何度もピンチでのリリースを経験した翔也だ。むしろワクワクしているといった心持ちなのかもしれない。

昇平といい亮といい、頼りになる後輩たちや……。なあ、中和也は翔也にサインを出す中をじつと見る。自分たちも頑張らなければいけない。そんな気持ちを彼に送った。

そのとき、中と視線が合った。テレパシーが通じたのかとも思ったが、そうではない。その意味を察した和也はさりげなく頷いた。

2塁ランナーの琢磨にチラリと視線を送る。三盗の可能性は低いだろうが、やりかねない男だ。和也はそれがないことを祈った。

セットポジションから翔也が足を上げる。それと同時に、和也は2歩分だけ三塁線寄りに守備位置を変えた。

インコースのボールに透は手を出してきた。三塁線を襲う打球は速い。しかし和也は横っ飛びでそれを捕ると、すぐさまベースを踏んで1塁へ送球した。

併殺が完成し、チェンジとなる。3年生の意地も見せなければいけない。和也は全力でベンチまでダッシュした。

13 - 3 ・王者からの洗礼(3)

空振りの三振に倒れた裕とすれ違い、中はバッターボックスへと向かった。

「あと5点やな。まあ、予定ではもう10点取ってるはずやったんやけど」

「ぬかせ」

マスク越しに嫌味を言ってくる透には目を向けず、中は打席に入ってバットを構えた。

あと5点というのは、コールドゲームが成立するために必要な10点という数字までの点数だろう。7回終了時に7点差があれば、それでもコールドゲームは成立する。しかし彼らは、その前 5回で10点差をつけて終わらせようというのだ。

本気かどうかは分からない。そんなことはどうでもいい。大事なのは、自分たちがそれだけナメられているということと、実際にそれを狙われるだけの実力差がある と思われている ことだ。

マウンド上の投手は、ベンチで見るとよりもさらに小さい印象を受けた。双葉の即戦力となるくらいの1年生であるのだから、少なくとも180センチは越えているだろうと思っただが、高くても175センチほどだろう。もっともそれは、スポーツをしていなければ十分な数字であるが。

その小さな左腕がセットポジションに入る。ボールの位置がさらに右側に寄るため、左打者である中からすれば非常に見づらい。その右足が高く上がる。身体の前で離れたグローブとボールをポンと叩く独特のフォームで、初球が投じられた。

ボールが自分の顔に向かってくる感じがした。その感覚は間違っ
ておらず、中は慌てて身体をのけ反らした。

いきなりのブラッシュボールか。あの1年、やってくれるやないか……

立ち上がった中は、バットを握る力を強めた。これ以上ナメられるわけにはいかない。

2球目のサインに、左腕が首を振った。もう一度サインが出される。また首を振った。

透のサインに、首を振るやと？

中学時代から、中は透のことを評価していた。勝つことは諦めなかったが、それでも勝てなかった。その透のサインに首を振る1年生がいるのか。

3回目のサインでようやく首を縦に振った左腕が投球フォームに移った。独特なフォームから繰り出されたボールが外角へ向かう。難しいコースではない。中は思いつきりバットを振り抜いた。

捉えた感覚とともに、打球がライナーで投手を襲う。右手のグローブが、それを難なく捕らえた。その顔は、今までと何も変わらない無表情であった。

「あつ……」

失投だ。投げた瞬間に分かった。あと3センチ内に投げるつもりだったのだ。天宙は僅かに顔をしかめる。金属音がグラウンドに響いた。

インコースぎりぎりのボール球を投げて空振りを奪うはずが、ぎりぎりストライクゾーンに入ってしまったことで当てられてしまったというわけだ。

遊撃手の琢磨が前進してくる。打球を掴むと、もうその瞬間には右手にボールがあった。流れるような動きで送球し、打者がアウトになる。3アウトとなり、天宙はマウンドから下りてベンチへと小走りで行った。

「テンチュー、ナイスピッチ！」

「……タカヒロです」

「ああ、そうやった。悪いな、テンチュー」

天宙は琢磨の発言をスルーし、ベンチの前で作られている円陣に加わった。

ナイスピッチングというほどでもない。天宙は抑えるべくして抑えただけだ。絶対に打てないが絶対に打ちたくなるコース、捉えても凡打にしかならないコースというのが、どんな打者にもある。そこに投げていれば打たれることはない。そのために必要なのは絶対的なコントロールと、多彩な変化球。もっとも、こんな楽な場面で失投しているようでは、まだまだコントロールが物足りないと思っただろう。

初球にブラッシュボールを投げて打者をイラつかせ、サインに首を振ることでさらに打者は早く打ちたくなる。そこで外角のボールを絶対に出すようにそこまで厳しいコースでないボールを投げれば、ピッチャーライナーが来ることも十分に予想できる。

唯一の誤算といえば、予想よりも少し打球が速かったことくらいだろうか。

早く攻撃が終わらないかな……

4番打者の湯川奏純が右翼線へ二塁打を放ったのを見て、天宙は心の中でため息をついた。

ベンチの中では慣れない関西弁が飛び交い、1年生は自分だけしかない。こんな環境でリラックスするという方が無理だろう。自分の世界に浸ることができるマウンドの方が、何倍もリラックスできる。

しかし天宙の希望は儂くも崩れ去った。双葉打線は2番手で登板した藤澤という名前に興味はないがサイドハンドの投手に襲い掛かったのだ。1点を加えて尚も一死2・3塁で、打席には8番打者の稲田耕平が入る。バッティング用の手袋を装着した天宙はゆっくりと立ち上がると、バットを持ってネクストバッタースクールに入った。

サークル内で座りながら、ここも悪くないと思っただ。狭い空間の中には誰もいない。落ち着くには十分の場所だ。

耕平がセカンドゴロに倒れる。いや、セカンドにゴロを打つたと言つべきだろう。高く叩きつけられた打球を捕った綾波北の二塁手はホームを一瞬見ただけで、一塁へ送球した。三塁ランナーである秀平がホームに返ってくる。耕平が打つたと同時に三本間の延長線上に行つていた天宙は、ジェスチャーでスライディングが必要ないことを彼に伝えた。

アウトカウントが増え、得点も増えた。願つたり叶つたりの展開だ。

天宙が打席に入ると同時に、彼の応援歌　ピンクレディーの『サウスポー』　が三塁側のスタンドから鳴り響く。自分がサウスポーであるからの単純な選曲だが、比較的好きなメロディであった。二死三塁。これで自分が凡退すればこの回の攻撃は終了する。しかし天宙に、わざとアウトとなるつもりは毛頭なかった。

バッティングは嫌いじゃない。むしろ好きだと言つてもいい。できることなら次戦は9番打者ではなく、もっと上の打順を打ちたい。そのためには、打てるときに打っておく必要がある。そもそも、手を抜くこと自体がありえないのだが。

相手がミスをしなれば、ヒットを打つしか点を取れない状況だ。ならば打つしかないだろう。

外野陣を確認する。中堅手の守備が上手いことは事前のビデオで調べてある。しかし右翼手と左翼手の守備はそれほど上手くない。この試合を見ていてもそれは分かった。

相手投手がセットポジションから左足を上げて、初球を投げ込んできた。低めのボールを天宙は見送る。おそらくナチュラル沈んでいる。球威のない証拠だ。

2球目は外角にきた。またストレートだ。天宙はバットを動かさず。しかし振り抜きはしない。捉えた後で、バットを押し込むように力を加えた。打球が三塁手の頭を越えて、フェアグラウンドに落ちた。天宙は走り出す。回り込んで1塁ベースを蹴ったところで左翼手の位置を確認する。左翼手はようやく打球に追いついたところだ。

た。

よし

ギアを入れ直す。天宙は迷うことなく、ノンストップで2塁ベースへ向かってスピードを上げた。

「二つ、行ったぞ！」

一塁手の声を背中中で聞く。ボールを捕った左翼手が、中継に入っている遊撃手へ送球した。タイミング的に余裕はない。だが、間に合わないタイミングでもない。天宙は足から2塁ベースに滑り込んだ。

遊撃手からの送球を受けた二塁手がタッチをしてくる。天宙は身体を右に傾け、外側に90度曲げた左足の先をベースの右端に引っかけた。フックスライディングだ。二塁手のタッチが空振る。それを見逃さなかった塁審の両手が広がった。

三塁側スタンドの応援団が沸く。立ち上がった天宙はユニフォームの尻についた土を払いながら、少し口元を緩めた。正直、全く緊張しなかったわけではない。初めての公式戦だ。緊張しないわけではない。それでもこれだけの結果を残している。まだまだ満足はできないが、悪くはないだろう。

春季大会での背番号は、入学前から半ば約束されていたことだった。清水昌平監督から、即戦力として期待してると言ってもらえた。言葉通りに、すぐ練習試合でチャンスを得た。しかしこの試合で先発を任せてもらえたのは、そのチャンスを生かす投球をしたからだと思っっている。

どれだけ期待されようとも、またどれだけチャンスを与えられようとも、それを活かさなければ意味がない。切符を貰うだけで電車に乗らなければ、目的地には辿り着けないのだ。

打席にキャプテンの琢磨が入る。ちゃらけたところもある人だが、プレー中の集中力は、良い選手が揃っている双葉ナインの中でも群を抜いている。

テンチューー……か

そう呼ばれたことは、今までの人生になかった。確かに天宙
タカヒロ　を音読みすればテンチューとなる。本当に単純なニッ
クネームだ。しかし、天宙はそもそもニツクネームで呼ばれたこと
がなかった。

自分のことを、中学時代のチームメイトが実際のところどう思っ
ていたのかは知らない。しかし、少なくとも天宙は彼らからどこか
よそよそしさを感じていた。天宙自身もそれほど彼らと親しくしよ
うとは思わなかった。結局、彼らが天宙のことを名字である「金松」
以外で呼ぶことはなかった。それでもチームメイトに不満を持った
ことはなかった。今でも、彼らが進学した学校の成績はチエツクし
てる。

相手投手が初球を投じる。積極的な琢磨が見逃すはずのないボー
ルだ。彼のバットが迷うことなく動きだした。

二死ということもあり、天宙はシャツフルした　ポンポンと右
に跳ねた後、右足に体重をかけた。真芯で捉えられた打球が投手の
足元を襲う。そのときにはもう、天宙の身体は3塁へ向かってスタ
ートを切っていた。

二遊間が打球追いつけるとは思わない。彼は迷わず3塁ベースを
蹴ってホームへ向かった。ランナーコーチも腕を回している。走れ
るところもアピールできるチャンスだ。

ホームベースまであと数メートル。スライディングの体勢に入る。
しかし、それまであまり意識していなかった捕手が動いた気がした。
渴いた音が響く。キャッチャーミットにボールが収まった音だ。

なっ……

想定外の状況に、身体のバランスが崩れる。捕手を避けるために
回り込もうとするも、ホームベースに触れる前に、捕手のミットが
天宙に触れた。

アウトという審判のコールは、1塁側スタンドから聞こえた大き
な歓声によって、ほとんど聞こえなかった。ベンチへと下がる中堅
手を見ながら、天宙は唇を噛む。彼がこれほどまでに強肩だとは思

っていなかった。

今のは、ちょっとムカついたな……

立ち上がり、ユニフォームに付いた土を軽く右手で払う。スライディングをしていればもつと汚れていただろうが、ただ倒れただけである彼のユニフォームについた土は、それだけでほとんど落ちた。ベンチから天宙のグローブと帽子を持った選手が走ってくる。彼は先輩であるその選手に頭を下げながらヘルメットを渡した。

その後ろでは、茶とスポーツドリンクを両手に持った選手がいる。どちらがいいかと尋ねられたが、天宙は両方とも断った。今は早くマウンドに戻りたかったのだ。

帽子を被り、マウンドに立つと。イライラしていた気分も落ち着いてきた。永遠に投げていたい気分だ。

だが、またしてもそれは叶わなかった。

3回裏の綾波北打線を天宙は三者三振に打ち取り、わずか13球でベンチへと戻った。

透の打球が二遊間を破る。中はヒットと盗塁で2塁にいたランナーに目をやる。3塁ベースを蹴ったところで、その足が止まった。直後、昇平からの“豪速球”が中に返ってきた。前の回に双葉はその脅威を体感している。無死である今は無理をする必要がないということだろう。

2番手の翔也は良い投手だ。スリークォーター気味に繰り出されるボールに失投はほとんどなく、打たせて取るピッチングが彼の売りだった。だが双葉打線に対して別だ。駿ほど球威のないボールでは、たとえコースを突いても捉えられてしまう。

「中、タイムだ！」

ベンチから西村監督の声が響いた。それはピッチャーの交代を意味する。

ブルペンから走ってきたのは芝田一貴だった。ベンチ入り唯一の

サウスポーターである彼は今大会初登板だが、次の4番打者以降は左打者が多い。5番と8番以外の4人が左打ちだ。ことを考慮したのだろうか。

マウンドに向かい、軽く打ち合わせを済ませる。無死1・3塁と、この状況では、1点を防ぎにくいべきではない。無理な守備体形をとれば、大量失点に繋がる可能性もある。第一、初登板である一貴のことを考えると、まずアウトを取りたかった。

投球練習が終わるとすぐに、4番打者が左打席に入った。流れを切らせたくないだろう。早く投げると、その身体が言っている。

まあ、お望み通りにはいかへんな

中をあえて、ゆっくりとした動きでサインを出した。一貴の緊張を少しでも解す意図もある。彼もそれに気がついたのか、サインに頷いた後の間を長めに取った。

打者のイライラが伝わってくる。双葉の4番というプライドもあり、打ちたくて仕方ないだろう。一貴が初球を投じた。打者が打ちにくい。

しかし、中が出したサインはスローカーブだった。一貴の決め球でもあるボールだ。バットを振り出すタイミングが早い。必ず空振りすると中は思った。

しかし打者は、地面に下ろした右足に体重を移さなかった。“タメ”を作り、タイミングを少しでも合わせてバットを振り抜く。打球は高く弾み、一貴の頭を越えた。

遊撃手の大輔が打球に対して突っ込む。2塁ベースの前で打球を掴んだ彼は、2塁ベースに入った勝弥へトスした。1塁へは投げられない。4番打者はもうベースを駆け抜けようとしていた。

1点は失ったが、悪くない。中はそう自分に言い聞かせた。

ジェスチャーで、滑る必要がないことを伝える。3塁ランナーの真一はそれを認めたのか少し緩めたスピードでホームに還ってきた。

彼とハイタッチを交わした秀平は、そのまま右打席に向かう。打席の前で数回素振りをして、そのままゆつくりと打席に入った。

今の得点で、9対0となった。5回で試合を終わらせるためにはあと1点が少なくとも必要だ。

4番打者である龍治のバツティングは素晴らしいものだったと秀平は感じた。パワーだけでいえば、3年生である龍治にも自分は負けていないという自信がある。しかしそれでも彼が4番を務めるのは、チャンスで必ず点が取れるからだ。

代わった投手は今大会初登板であることが、事前に得た情報で分かっていた。その場合、ファーストストライクを打ちにいくというのが非常に大事となる。

秀平としても予期しなかった。情報がないので予期しようもなかったが、スローカーブに、龍治はタイミングを崩された。それでも彼の打撃技術ならば打つのを止めることができただろう。実際、彼は一度踏みとどまっている。

しかし彼はそこから再び打ちにいった。ファーストストライクを見逃すことのリスクを彼は避けたのだ。内野ゴロとなったが、3塁ランナーは余裕でホームに還ってくるのできる打球であった。やはり彼の打撃技術は素晴らしい。

あとは俺が、やな

龍治のバツティングには、後続打者に対する信頼も見えた。それに答えないわけにはいかないだろう。

《5番、レフト……名茂君》

今日のウグイス嬢は良い声だ。軽くテンションを上げながらバツトを構える。

相手投手が初球を投じたが、ワンバウンドとなった。半ば予想していたことなので、秀平はバツトを動かさない。

2球目も低めのストレートだった。わずかにボール球だ。再び秀平はそれを見送る。審判の腕は上がらなかった。

明らかに、相手バッテリーは秀平にゴロを打たせようとしている

ようだった。併殺で切り抜けたいのだろう。あと1点をなんとかして
も死守してやるという雰囲気、捕手から感じ取れた。

3球目を投げる前に、1塁ベースへ3回牽制球が挟まれた。1塁
ランナーの龍治は比較的足が速い選手であるが、盗塁のサインは出
ていない。ただ、「打て」という監督のオーラが伝わってくる。

4回目に右足を上げたとき、投手はやつとそのまま投球フォーム
に移った。バッテリーは少しでも秀平の集中力を途切れさせたかつ
たのだろうが、彼らの思惑は外れた。秀平は打席で集中を切らせる
ことなど、まずない。

1点を守るなんてケチ臭い真似すんなよ……

ボールには今までよりも球威がなかった。咄嗟に、スローカーブ
だと判断する。インコースに食い込んでくる軌道だ。

5回コールドは、何も10点ジャストでなきやいけないわけじ
やねえ

身体は絶対に開かない。その分、インパクトのポイントを身体の
前にすることを意識する。バットを上から振り下ろしてボールにバ
ックスピンをかけると、そのままバットにボールを乗せて、遠くに
運ぶような感覚で振り抜いた。

ごちそうさんつと……

秀平はフォロースルーの姿勢を崩さずに打球の行方を見守った。
左中間に飛んだそれはグングンと伸びていく。もう何回も経験して
いる感覚と一致していた。

ああ……。と捕手の呟きが聞こえた。それを合図に、秀平はゆっ
くりと走り出す。

僅かな望みも与えるつもりはない。自分達の目標が5回までに1
0点を取ることだというわけでもない。ダイヤモンドを一周し、秀
平は11点目となるホームインを果たした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9525f/>

流れ星との約束

2011年12月11日10時51分発行